

泳ぐ、泳ぐ。

續々と集まる人々を待つて總勢百六十人。午前十時半頃出發電車は隼の様に走る。代官山のトンネルを出た頃からの窓外の風景は頓に爽やかさを加へて、來會者の半ばを越ゆる坊ちやん嬢ちやんをしきりに悦ばす。家・人・ボート・藪・筒・麥・穂麥・草・草又草。總てが輕快に飛んで行く。

澁谷を出て二十分の後には日吉驛に着き三々五々打連れて苺園のある方へと朗らかな初夏の遊歩を運ぶ。ゲートル巻あり、網サツクあり、旅行服あり、學生服あり、春廣あり、セーラー服あり、更に紅紫とりんくのバラソルありと云ふ一行の様々のよそほひは、草の武藏の緑の臺地を美はしくも、又華やかに彩る。遠近の田の蛙ものどかに、麥は穂先を揃へて力強き初夏の香りを放つ。道端の竹藪では筒を掘つてゐる。眼前の總てが天地をつゝむ潑刺たる新緑の中の嬉しい動きである。

苺園は丘から丘へと限りもなく作られてあつた。入園券と引換に一同に一つ宛の箱が渡される。その箱一杯に摘み採つて好いのである。そこで入園。忽ちに足許に見出した紅いの中から次へ次へと摘み始める。そこには近着の發聲映畫「ランゴ」の或る場

面に髣髴たるものが忽ちにして展開せられつゝあつた。



苺を摘んでココニ

形容のいびつな、しかし甘味の強い「モナーク」種。圓らに均勢の取れた、しかし多少の酸味に時代の新しい味はひを思はしめる「ダイヤモンド」種。やゝ長目に丸い、しかも甘酸程よく兼ね併せて豊麗極まりなき「クラーク」種等々々。様々の苺はその各々の形を誇らかに明示して坊ちやん嬢ちやんに、それら摘み採られるのを悦ぶものゝ様であつた。その間に中山撮影班長の鮮やかなるスナツブショツトに記念寫眞を撮る。奥村さん、二條さん、宮城さんなどの優しい顔も見えれば、石井さん、池田さんなどの勇姿も現はれる。角野さん、守谷さんなど

は大勢な御家族連れである。

正午・大體の收穫を整理して蛙の鳴聲のきこゆるすがくしい木立の中や、見晴しのよい丘の中腹の涼しい苗木の陰などで思ひくゝに持參の行厨を楽しく開く。

朗らかなそよ風に軽い運動の後の汗を快よく入れて食後の英氣を更に第二、第三の苺園へと向けて新たな箱に苺を満たす。此の日御子さん方の元氣は申す迄もなき事ながら、日頃は中々御出かけの機會のない諸方の奥さん方の苺摘む御手際の鮮やかさには筆者も尠なからず驚き入つた次第である。其の採集振りの微に入り、細に涉りし綿密さよ。程なく數段歩の苺の紅はその影を没して見渡すところ風にそよぐ緑葉のみ。こゝに於てか映畫「ランゴ」の尖鋭なる一場面が一瞬にして腦裡に喚び起されると云ふ事は自然であらねばならぬ。

さて歸りには桃で名高い綱島温泉へ、多摩川原へ、九品佛へ、さては御子様第二の目的先たる樂天地、多摩川園へと思ひくゝの家路へ睦じ氣に足は輕々と運ばれたのであつた。此經費一人當り六十錢。

夜汽車

花堂生

窓がらす玉のしづくの光るなり

今この里は五月雨やふる

水郷めぐり（五句）

斗柄生

早乙女を運べる船や二三艘
麥秋の埃たゞよふ水邊かな
麥打つや入江をへだつ倉の影
早舟に積む麥秋の麥の束
炎天やあやめ踊の雛妓たち

湯河原にて

斗柄生

さわやかに躑躅の紅や就中
くさくさの躑躅に庭の廣さ哉
石楠花の鉢に落花や靜心
老鶯や谷をへだてゝ瀧二つ
老鶯や椎につゝまれ一ト社

【六月之部】

異色ある函嶺踏破裾野驛より湖尻峠へ

東京驛 裾野驛
湖尻峠 湖尻村 深川村 深川村 深川村 深川村
乙女谷 大浦山 神谷山 駒山 深谷山 深谷山 深谷山

期日 六月七日(第一日曜)
集合 午前六時十分東京驛
發車 六時廿五分(神戸行)
下車 午前九時四十分裾野驛
行程 箱根外輪山を越えて中心部に入るルートの中であまり知られてゐないのは此の東海道本線裾野驛から登つて蘆ノ湖の西岸湖尻峠に出る道である、裾野驛前より自動車で深良村の東電發電所に到る、此處迄廿五分、それより徒歩湖尻峠の頂まで行程僅に數軒登路は三百米より八百五十米まで、深良川に沿つてゐる、頂に到れば景色は展開され蘆ノ湖は一眸のうちにつくされ駒、神山、大浦谷の噴煙を始め乙女、

富金 時士
姥ヶ 嶽子
仙石上湯
強羅
小田原

六月

一八八

金時、靈峯富士の端麗な姿は指呼のうちにさまる、湖尻峠の下には徳川の施政に一庶民の開鑿として大事業の水門ありて水は深良川へと落つる。

峠にて少憩、北岸を巡り姥子温泉を経て大涌谷より道を左して臺ヶ嶽の東麓、自然の灌木林の野趣なる仙石上湯の硫黄泉に一浴、漸時下りて強羅に出で電車にて小田原に至る。

歸路 午後五時卅七分強羅發八時四十三分東京驛着

用意 辨當、水筒

地圖 五萬分、御殿場、小田原

天候 雨天中止

深良川に沿ふて水門の湖尻峠へ（紀行）

O E N 生

國立公園の箱根

箱根はまさに『富士箱根』として國立公園の一にかぞへられんとしつゝある、箱根獨特の自然形態的美觀が富士と不離の關係にある點及び歴史的情緒の豊富な點は他の候補地の企て及ばざる所であるが故に箱根を逸する時は日本の國立公園設定の意義のなかばを失ふと迄、力説されたと聞く。

異色の箱根

此の時、我等同好者が箱根旅程を試むるも一興と思はれる、その日は六月第一日曜の七日、同行十七名、東京驛發午前六時二十五分、異色ある函嶺踏破の行は活況を呈した、箱根に入るには多く國府津驛より熱海線にて南下し足柄、金時を右にのぞんで進むが、今回は東海道本線にて左窓に足柄、金時の山容の浮ぶも異色の第一歩である。

外貌の箱根

くもり勝ちの空も晴れるに従つて雄大な箱根群山が鐵路に平行して一直線に全容をあらはす。

六月

一八九

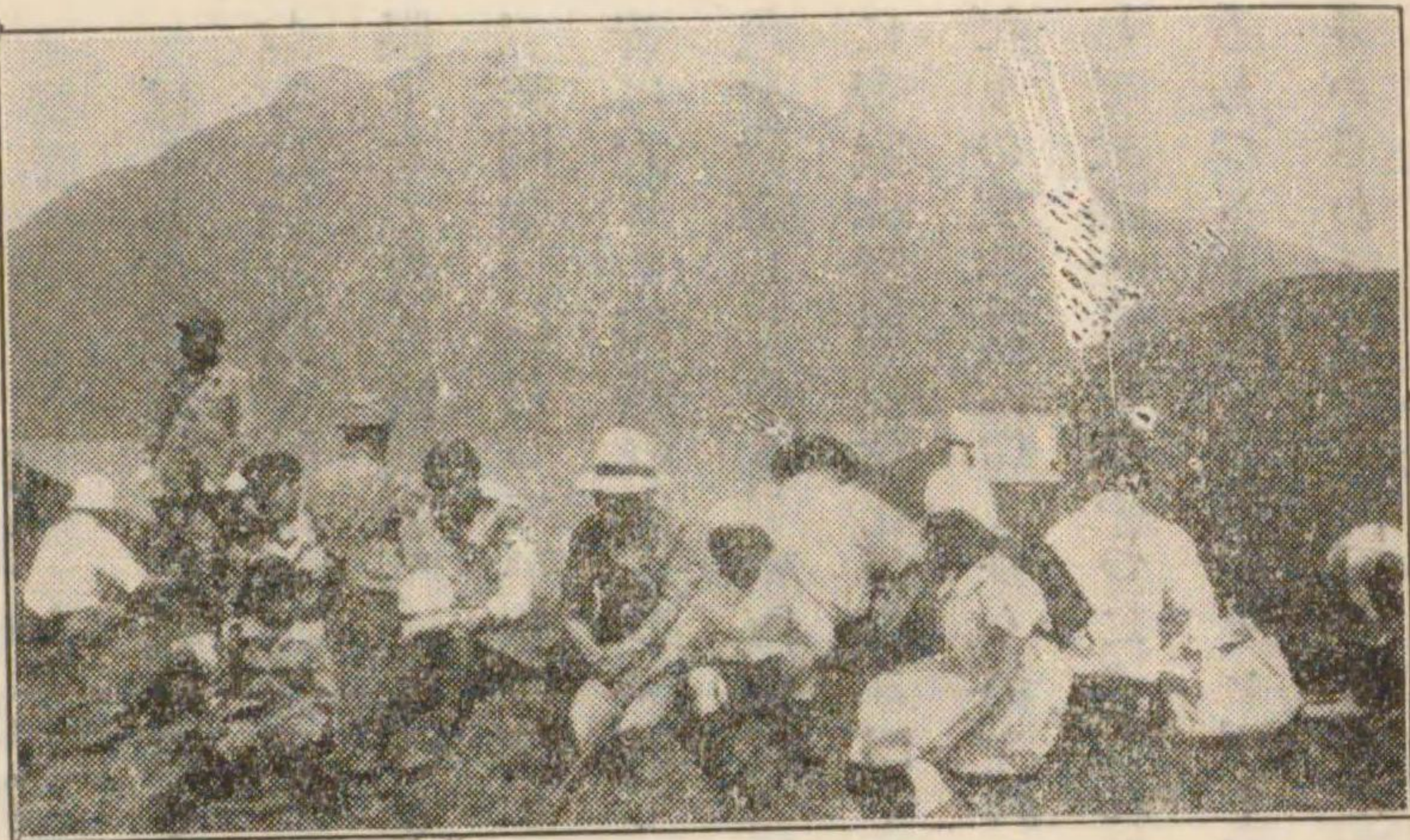
その南畫趣味の山波の巒こそ箱根連山の外貌である。蜿蜒とつゞく山脈は、あたたかも屏風をたてまはした様な形だ、駿河驛を過ぐれば富士電力工場の眞上に端麗な富士の姿が眺められた、下を流るゝ溪川に初夏の陽をあびて乙女の障子を洗ふ情景もすがたい、御殿場に到れば富士は、ますます／＼壮大に雲天に浮びあがつてゐて、今夏は山内物價の値下を斷行し、振つてお山サービスの効果を發揮しようといきこんでゐる由。

裾野から箱根

九時四十分裾野驛到着、直ちに用意された大型の自動車にて御殿場街道を進む、右折鐵路を横斷して駿東郡深良村の東京電燈の第三發電所前に下車する、茲までの所要時間廿五分、愈々此處の三百米より登路にかゝる。

道幅一間位、第二發電所を過ぎて第一發電所まで四十五分、道は深良川の左岸より右岸と橋梁を渡り川ぞへに登つて行く、荷馬も通つてゐる、東電の社宅があつてラヂオが響いてゐる、かゝる山間にも都の風が吹く、道はせまつて三尺あまり、日かげある五五〇米の川べりにて半時休憩、早起のため空腹を感じた連中は第一回の晝食を始

める一行中の小學、女學生五名が元氣に先進をつゞける、正午、水門の出口に達す、



湖の蘆と山三の嶺函

この水門は湖尻峠の下、約一、三五〇米の隧道を潜り蘆ノ湖より約一〇〇米の距離を有する堀川で今來た深良村へ引水し二十九ヶ村の水田を開いたもので今また發電の水力にも利用してゐる、この堀川の工事は今より二百六十年以前、寛文八年起工し約二ヶ年半にて竣工したと云ふこの時代の事業としては稀に見る大事業でこれをなしたげた人の偉大さを恐れた當局者は彼を處刑に附したといふ哀話が残つてゐる。この水門の出口には水電の取入口と深良川の源とが分流してゐる。これより道は、せまい登りとなつて箱根特有の竹やぶに鶯は朗かにさへづゝてゐる。

る、山路の遠近に、つゞしが點々として紅を見せてゐる。

大觀せる箱根

はるかに湖尻峠の白標をのぞんで一行元氣百倍、まもなく八五〇米の鞍部に至る、忽ちに駒ヶ嶽、神山、冠嶽を背景として蒼水の蘆ノ湖が眼下に展開される瞬間は愉快限りなく自ら快哉を叫ばないものはなかつた、時に十二時半、茲處まで徒歩程六軒、二時間強、いたつて平易の登りである、湖の遊覧船は小さく浮んでゐるがゴトクと音は大きく四邊の山にひびいてゐる、光線の水に照射する美觀燦然として藍色湖の特色を發揮してゐる、亦復晝食の第二回を眺望絶佳の峠の頂にて談笑の裡にすまず、茲に帝室林野局の禁札がある曰く、『濫ニ御料地内ニ立入ルコトヲ禁ズ』とある、このみだりの文字は『猥』と多くかゝれるが、いづれが正しきかに就て議論百出、結局疑問として衆議一決しなかつた、これより湖北の岸へと水門の五角形になつた取入口を見おろしつゝ下る、黄色のキンボーゲ、紅色のツツジが美しく道端に咲いてゐる、岸邊にさわさわと波がよせてゐる様は海邊のような感がする。

水源の箱根

北岸の極、早川の源はとびこえられる程せまい幅である、これが早川の溪谷となつて箱根の山水美を表はすかと不思議に感じられる、こゝら一帯は濕原をなし地味が瘠せてゐて雑草の離々たる間に、マウセンゴケ、ミミガキグサ等の食虫植物が生えてゐる、かくて冠ヶ嶽の麓の姥子温泉に到る、大涌谷の西側に當つて崖下に位し湖尻との中間に在る旅館秀明館の浴場を見る、大岩窟からなつてゐる天然の大浴槽中に滾々として迸り出る温泉は無色透明で滋味が有り古來眼病に特效があるといふ。

硫氣の箱根

三時、箱根火山活動の大團圓を演じた大舞臺、大涌谷に着く、今は硫氣洞として僅に餘喘を保つのみであるが白煙濛々と立ち上り熱湯を沸ぎらせ熱泥を吐き硫氣鼻をつき凄慘たるものがある、わきの極樂茶屋に少憩、直ちに道を眞北にとりて臺ヶ嶽の東麓、仙石上湯冠峯樓に豫定の三時半、一分もたがはず到着、浴舎は仙石原の俵石閣の

別館にて自然の灌木林と續き野趣に富み興の深き境である、茲に一浴硫黄熱泉にして多量の硫酸鐵を含む、藤枝氏のうす墨をながしたと云ふ評は最も云ひ得たところである。尙、本日の斡旋者杉山氏は病後で山あるきが不適の爲め國府津驛着一行と別れて冠峯樓へ先着萬端の用意をされた爲に好都合であつた、こゝに一言御禮を申上げる次第である。五時出發同廿七分早雲山發ケーブルにて下山、豫定の小田原發七時近き列車にて歸途につく此度の異色ある路途を終了したことは誠に愉快のかぎりである。此經費一人當り四圓三〇錢。

松戸の工兵學校見學と總武沿線のピクニツク

上野驛
野田町驛
期日 六月十四日(第二日曜)
集合 午前八時上野驛
發車 八時二十分(青森行)
下車 十二時九分野田町驛

松戸驛
常磐線
柏
總武電車
運河
金乘院
清水公園
座生沼
藤島
大宮公園
氷川神社

行程 途中松戸驛で下車すれば八分で工兵學校に着く。同校には吾々が戦地へ行かなくては見られない塹壕や築城、タンク、架橋材料、特種な通信材料等の新式兵器があつて見學する價値は充分ある。特に少年諸君には多大の参考となる。終つて驛に引返し再び常磐線にて柏驛乗換へ總武電車に乗り櫻で有名な運河を通つて野田町に下車、龜甲萬醬油工場に向ふ、野田の今日あるは醬油の爲で此醬油も三百有餘年の歴史を有し一ケ年の醸造石高五十餘萬石全國産出高の二割を占むるとの事で其規模の大なるには驚かされる、附近には金乘院、清水公園、座生沼の名所があるを訪れる時間は充分ある、歸途は天然記念物藤島の藤を見るも、大宮公園に下車して氷川神社に參拜するも隨意である。

歸路 午後三時五十四分清水公園發午後六時十分上野驛歸着解散
用意 辨當
天候 雨天中止

初夏のピクニック(紀行)

天 楓 生

正直によくも降り続く梅雨期に、珍らしくもからりと晴れた日曜日だ。ブラ／＼歩きのピクニックには持つてこいの上天氣一同満足此上なしである。松戸驛をあとにして數丁、ダラ／＼の坂路を登りきると、陸軍工兵學校の正門はすぐである。衛兵の方に刺を通じて案内せられたのが將校集會所『ようお出で』とニコヤカに迎へられたのが折柄の日曜にもかゝはらず、一行をお案内下さるため、態々御出勤になつた八隅工兵少佐殿である。御話しによつて、此地が千葉縣東葛飾郡明村であり、此の學校が大正八年に創立せられたことや、里見氏の古戰場であることなどを承はる。時間の都合で勝手ながら早速御案内を受けることとする。先づ學校本部から學生講堂に至り、架橋築城其他に就ての色々の模型などを見せて頂く。

見るもの、聞くもの悉く珍らしいものばかり。呑氣坊の吾々も、實戦に際してはかう、ああなど、詳細の説明を伺ふと、心中頗る緊張して、軍備の充實、兵器の改善など云ふことが急に頭の中を馳け巡つて来る、工兵隊の威力が忽然として眼の先きへチラついて来る——次で寫眞及電氣實習室、機械工場及發電所などを順次案内して頂く軍隊と云ふよりは工場と云ふ感じだ。さうして何れを見ても掃除はキレイに行届いて居る、チリ葉一つ留めて居ない。少佐殿にこのことを伺ふと『これは學校の傳統的美風で、別に八釜敷く云つて掃除させるわけではない』と面白いお答へであつた。更に兵舎、既舎、野戦探照燈などの各種を見學して、校外作業場に至り鐵條網、地下坑進其他の各種實習場を詳細に案内して頂き、庭前で記念撮影をして松戸驛へ戻る。

學校と驛との中間に珍らしい金明竹の森がある、聽ては天然記念物としての指定でも受けさうな資格あるものである。工兵學校の南方約一軒の地に牡丹で有名な縣立園藝學校があり、開花の季には喜んで參觀させて呉れる、松戸では見るべきものゝ一つである。尙工兵學校の參觀に就ては布施松戸驛長が種々斡旋の勞を執つて下さつたこ

とを此機會に感謝する。

◇

松戸から馬橋、北小金の二驛を経て柏驛で總武電車に乗換へ野田町で下車する。途中の運河驛は利根川、江戸川を連絡する運河の中央に位し、櫻の名所として近時人に知られて来た。野田に下車したのは有名な龜甲萬醬油醸造元野田醬油株式會社の工場を見學せんが爲なのだ。野田と云へば醬油を連想し、醬油と云へば野田を考へる、二にして一、それ程に野田は醬油の街なのだ。此地に醬油醸造業の芽えたのは三百有餘年の昔であるとか、大正六年此地の八大醸造家が合同して創立したのが會社の前身で其後流山の味醂會社其他を合併して現在の資本金三千萬圓の野田醬油株式會社となつたものである、工場十七ヶ所、一ヶ年の造石高五十餘萬石、全國醬油總生産高の約二割を占めて居るさうである。

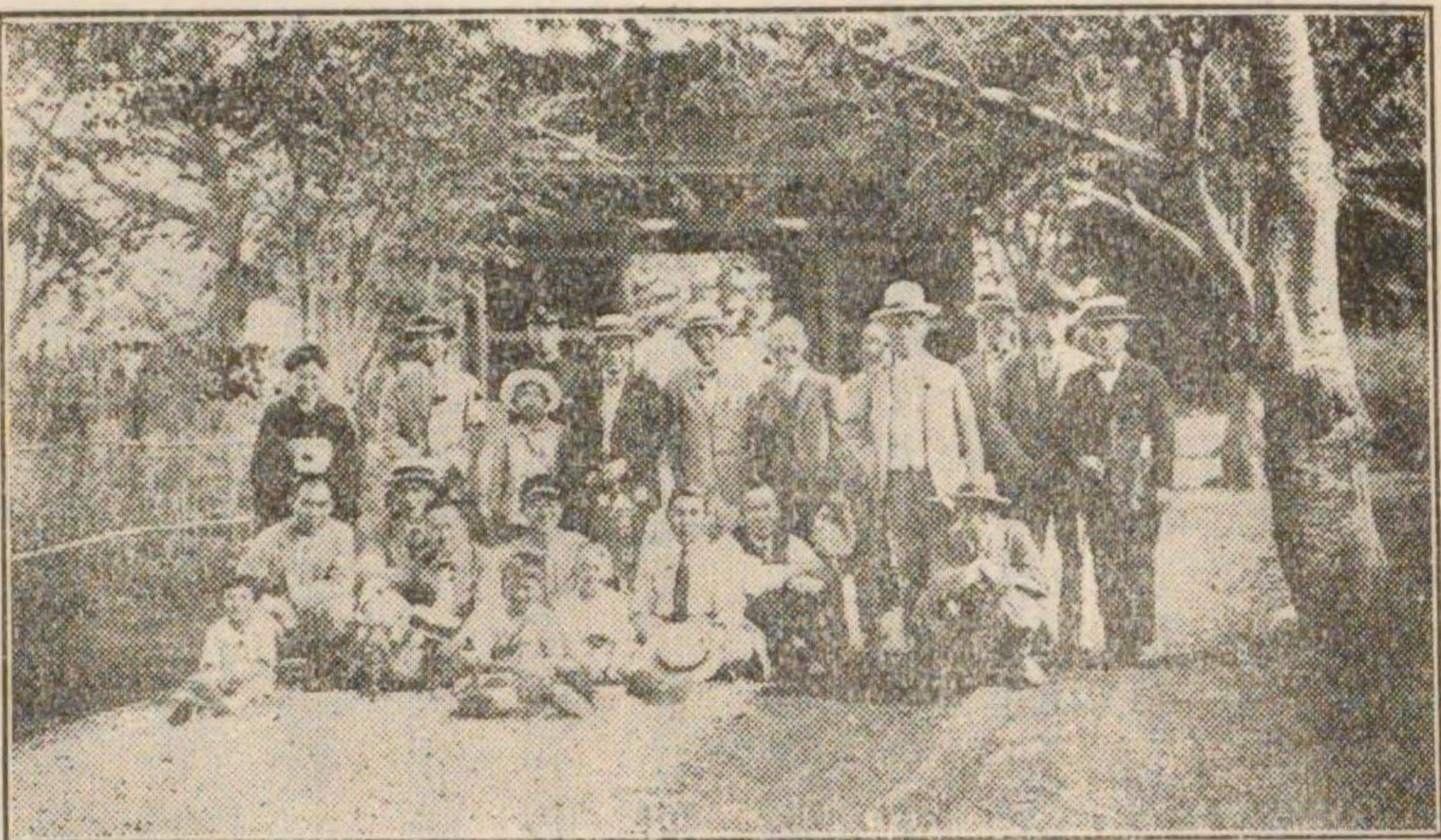
◇

最新式模範工場たる第十七工場を參觀する。先づ原料たる大豆と小麥の取扱ひから麴室の設備、食鹽水を混和して造る諸味(醗)、雄大なる諸味貯藏室、壓搾裝置、火入

裝置、樽詰の裝置等を技術員の説明により順次參觀する。専門の知識を缺いて居る私

達には詳しいことは判らないが、只其設備の完備して居ること、器械力を充分に應用して居ること、總てが清潔に操作されて居ること等は能く了解が出来る。従て此醬油なら安心して使へると云ふ感じは正しく印象されて来た。會社が工場を參觀させる主旨も其處に存するであらうし、吾々の智識慾も満足させられる、工場見學は全く以て一舉兩得である。

◇



清水公園入口にて

野田町驛からまた乗車して清水公園驛で下車する。驛から公園まで四丁、道幅の廣い立派な遊歩道路がある。公園一名を聚樂園とも云ひ、面積約一萬坪、座生沼に臨んだ丘陵の上にあつて、高低變化の多い面白い自然公園で

ある。櫻樹の老木が多く近來又盛んにつゝじを植ゑて居るから、四月は櫻、五月はつゝじの満開で、春の花見は大した人出である、此公園の生命は何と云つても新緑の木の間から座生沼を望んだ趣で、東南隅の淺間山と稱する小山からの眺望は何とも云はれぬ風情である。



以前は此附近は桃の名所として知られたもので、大町桂月翁の『沼ばかり残して八村桃の花』の句がある、今は如何なる譯か桃は餘り見受けない。昨今總武鐵道と野田町とが聯合して清水公園の擴張を計畫し、大に此處へ東京人士を引付けようと目論んで居る、之れによると面積を今の十倍約十萬坪とし、食堂、舟遊池、テニスコート、つり堀、四季花壇等近代的な設備をしようと云ふのである。隣地に位する金乗院は眞言宗の大伽藍で由緒の古いものである。此行總武鐵道會社の加藤運輸課長は種々便宜を與へられ、小川社員は一行案内の任に當らるゝ等、好意深謝の外はない。此經費一人當り一圓九十錢。

新緑の大谷川を溯り明智平登攀

期日 六月廿一日(第三日曜)

集合 午前七時半東武淺草雷門驛

發車 午前七時五十五分

下車 東武日光驛十時十五分

行程 東武日光驛より直ちに自動車にて馬返しに到り、女人堂の傍より大谷川に沿つて溯行する。深かぶかと茂る兩岸の新緑を貫いて走る一道の白龍、大谷溪谷の美は實に其行程に盡る。白雲瀧を眺めつゝ巨瀑華嚴の直下に立つ、實に壯絶無比である。それから五郎兵衛茶屋の傍を過ぎて大平に登り、白樺の新緑を眺めつゝ中禪寺湖畔に出で、大尻橋を渡つてレーキサイドホテルの背後より山路を登ること約二軒で千四百mの明智平に着く、日光の全風景は全く双眸に收むることが出来て勝區日光を鳥瞰し得るの快は蓋しこゝならでは味ふことが出来まい。一氣に徒歩馬返しま

東武淺草 雷門驛
馬返し 女人堂
大谷川 白雲瀧
華嚴 五郎兵衛
茶屋 大平
中禪寺 大尻橋
明智平 日光

で降る。

歸路 午後五時五十二分東武日光驛發午後八時卅分淺草驛歸着解散

天候 不拘晴雨(雨天なれば行程を變更する事あるべし)

地圖 日光 男體山(五萬)

用意 辨當、水筒、雨具等

服裝 輕装のこと

大谷溪谷溯行と其右岸山稜の縦走(紀行)

梨 萃 生

巒峯あり、不斷の白雲搖曳す。溪流あり、滔々一道の白龍躍る。巨瀑あり、鞆踏として地軸を撼す。山湖あり、千古の神秘を藏す。温泉あり、靈泉滾々として湧出して盡るを知らず。寔に日東帝國、山水美の鐘る處、之を彩るに、東洋美術工藝の精粹を蒐めたる建築美あり、之を日光の一區となす……と云つた調子で、勝區日光を説かざ

る案内書はなく、之を説きたるもの汗牛充棟も唯ならざる有様であるが我が關東旅行クラブ一行の探つた所は、未だ曾て如何なる案内書にもその勝を説かれず、然もその勝れたる景觀は既知の何れの所にも勝り、且つその行程もそんなに難澁でないばかりでなく、一部分(馬返——大平)は却て、現在多くの人々が往來してゐる所よりも樂である。新緑、銷夏、紅葉等、何れの時に之を探つても、決して諸君を失望せしむることはない。

大谷川溪谷の遡行

クラブの一行二十名が、馬返に着たのは午前十時三十分。結束して中禪寺道を進み榮橋、幸橋、深澤橋を渡つて、昔は女は此所迄しか登ることを許されなかつたといふ女人堂の傍、深澤の茶屋に着いたのが十一時である。途中幾臺も、幾臺も、中禪寺から降りて來る自動車に會つたが、日本人の乗用車はどれもこれも皆箱自動車であるが流石に外人一行の自動車だけはオープン幌自動車であつた。ドライブもかうなくつては本ものではないと妙な所で、妙な感想を抱く、中禪寺道は、バスを通す爲めに、

今改修中ださうで岩を碎く爆薬の炸音が、梅雨齋れの薄曇の重たい空気を震動させてゐた。

十分ばかり休んで、再び身仕度を整ひ、大谷川の左岸に沿つて溯行する。棧道あり危橋あり、約八百米も行つた右岸に、古河鑛業會社の水力發電所がある。

それから先の大谷川溪谷の景觀は、俄然一變して、左岸には千仞の岩壁屹立し、溪流滔々、直ちに其裾を洗ひ、奇巖は磊砢として散亂し、急湍之に激して白雪を吐いてゐる。一步にして一景、十歩にして十景、變化極まりなき眺めである。聽て兩岸相迫つて徑全く絶え、纔に危き吊橋によつて左岸に移り、更に吊橋と棧道にて右岸に渡り三度、溪流の間に重疊、散亂する巨巖の間を縫つて、登り勾配に斜に架けられた吊橋を行く。飛沫は衣袂を濕して壯快云はんかたもなく、一行は豫想以上の豪壯味に全く酔はされて了つた。かくて左岸に立ち、四度、吊橋によつて右岸に出た所に、送水大木樋の番小屋がある。番人の許しを得て木樋の上を渡り、左岸の山腹を約百米も登ると、白雲瀑は珊々として懸つてゐる。鵲橋を渡り、山徑を二百米ばかり行つた所が華嚴觀瀑エレベーターの發着所である。エレベーターも結構であるが、自然の山徑をコ

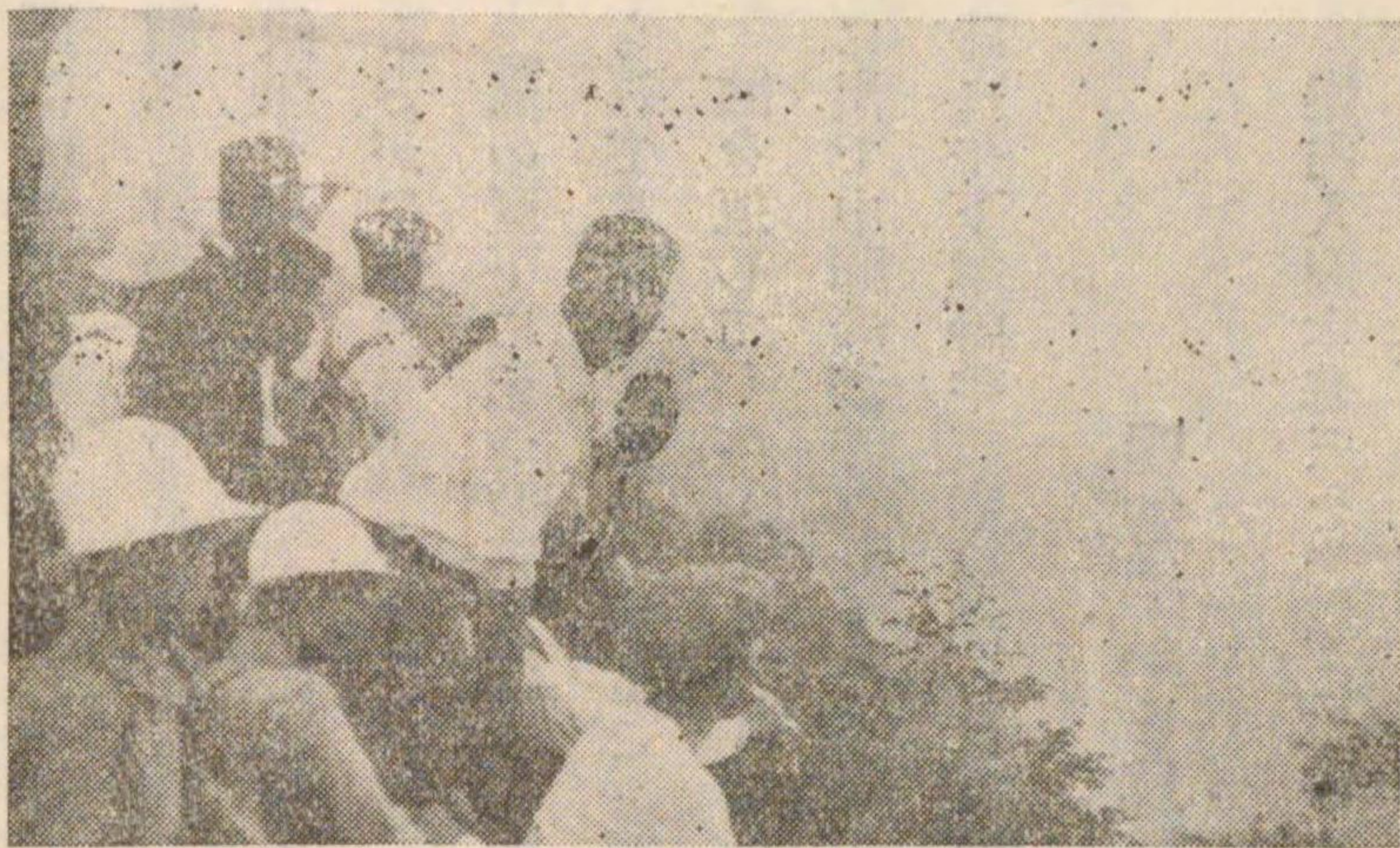
ンクリートで堅め、階段を附けるなど、自然の風致を害ふこと甚大である。五郎平茶屋にはニツケルのコーヒー沸器が据附けられ、何やらテーと蟹の這ふ横文字のピラが瀧風に打靡いてゐるに到つてはもうお仕舞だ。乍去自然は偉大である。巨瀑華嚴は、銀線を束ねたるが如く、直下百五十米、鞆鞆として地軸を撼し、乍昔の雄姿を換ふることがない。

瀑の直下に起つ。飛沫濛々、碧潭九地より沸きかへり、落下より起れる氣壓に壓せられて息詰り、久しく居ることができない。

踵を返して、エレベーターに搭乘し、百五米を一氣に登つて大平(眞高一二七〇米)に出で中禪寺湖畔、レーキサイドホテルの前面、適當の位置に陣取つて行厨を開く。時に午下零時半、幸の湖にはヨットが浮び、男體山頂には白雲が去來してゐた。

明智平から馬返へ

案内人岡本基三を先導に、中禪寺湖畔を出發したのが午下一時半。レーキサイドホテルの前面を過ぎ(立木觀音の方に向つて)その盡きる所をホテルに沿つて左折し、小



明智平より華嚴瀑を望む

徑を行く。躑躅日光登山鐵道の軌道敷地に出る、白樺の丸木橋などを渡つて行くと鐵索道用の大きな小屋があつて、そこから電光形に山徑を登る。登り切つた所に聊かな平がある。茶ノ木平の一分脈で、眞高約一四四〇米、明智平と呼ばれてゐる。そこで本山徑に別れて左に糸の如き踏跡を辿つて山稜を少し降ると闊葉樹の間から、華嚴瀑、中禪寺湖、男體山を鳥瞰し得る所に出る。實に眺めのよい所で時の経過するのを忘れる。中禪寺湖畔より約二軒半、所要時間約五十分。それから更に五六百米降つた所にも好箇の展望所がある。

本山徑に戻り、案内人に別れ更に五六百米東に進むと徑は二分してゐる。ほんたうは眞直に行くべきを、一行は左の徑を降つた。羊齒科の植物が生茂り、ウメバチサウの可憐な

花が處々に咲いてゐる。約三百米程降ると日光登山鐵道の軌道敷地に出る。二棟の大きな小屋が半ば壊れて建つてゐた。軌道敷地を行くと、隧道入口に達したので、その上を一直線に登つて山稜に登り、鐵索槽の下を左に少し許り登つた所が一三八七米獨立標高點の地點で、二本の測量標杭が打込まれてあつた。

先頭に登つた私は思はず「アッ」と聲を揚げた。見よ、中禪寺湖よりそれを取圍む山々、深々と茂れる深緑を貫いて一條の素練を懸けたるが如き華嚴瀑、その右には一聯の玉簾の如き白雲瀑、その上に聳ゆる男體山の端正な姿、實に勝區日光のエキストラックを更にコンデンスした様な鳥瞰で、恐らく日光山水美の大動脈と稱するも敢て過賞ではあるまい。

暫く眺望を恣にして、一気に山稜を降り、乳ノ水澤に出で、大谷川の吊橋を渡つて馬返に歸着したのは丁度、午後四時二十分、小憩後東武日光驛へ向ふ。

樂な一日行程で、これ程の收獲のあつた事は近頃稀である。

参照地圖 陸測五萬「日光」「男體山」

此經費一人當り四圓四十錢。

初夏の多摩川の流に沿ひて

期日 六月廿八日(第四日曜)

新宿京王
電車

集合 午前八時半新宿京王電車發驛

發車 午前九時

行程 清き流に沿ひて柔い初夏の日を浴び草深き野や川原をかけ歩き思ふ存分自然に親まうと云ふので、此コースが選ばれた。

仙川
深大寺
押立
富士丹澤
奥多摩
分倍河原
府中大國
魂神社
八洲園

途中仙川下車、津村薬用植物園を菊地氏の案内で見學する、近頃和漢薬復興の氣運に向つて居るからよい参考とならう、それより附近の古刹深大寺に詣つ境内大木に圍まれた武藏野の古寺を訪れるもよからう、正午頃多摩川押立渡船場へ出てキャンブファイヤーで茶をわかし野菜料理でも作つて緑深き草叢に中食をしながら漫談にふける。川原で太公望をやり度い方は終日腰を下すもよし。附近は南方に富士丹澤西方に奥多摩の山々を眺めて分倍河原、府中大國魂神社、八洲園等何れも平易な徒

歩行樂者を喜ばすに足る詠向の所が多いから歸路立寄るもよからう。雨天の節は豫定を多少變更しますが御集合されたし、雨の多摩川亦趣あり。

用意 辨當

初夏の多摩川の流に沿ひて(紀行)

春 山 園

朝天氣を氣づかひながら京王電車の新宿驛に来て見ると、早や六人程見えて居つた。九時迄には一行八人となり、愈々車中の人となつた。梅雨空の遠近の山や谷に一際目立の、刈残された麥や、眞白に咲き亂れた栗の花などである。此の花は梅雨中に咲いて、梅雨中に散つてしまふのである。それ故に「梅雨」を「墮栗花」とも云ふさうだ。干して見よ何ぞにならん栗の花など、云ふ句がある。



仙川驛で下車、北に約五町程行けば即ち藥草園である。松の大木多く雑木林より一段と高く聳えて清楚な感がする。案内を請ふて、栽培主任の加藤氏に種々御説を承る。

◇ 當園は津村重舎氏の經營で、大正十三年の創立、其面積約二町歩、藥草即ち民間藥の研究及び普及が目的で、標本園、圃場、野生植物區などに分れ、香料、染料、有毒植物などを集め、一般の觀覽に供して居る。又求めに應じて、苗を民間にも分與するとの事である。尙野生植物區に於ては、大東京の發展に伴ひ次第に消滅されて行く武藏野の野生植物を蒐集移植し、保護培養に力め、漸次此地にムサシノフローラの完成を計るとの由、誠に近來の快舉である。

◇ 花壇を廻れば、レモンエゴマや、ハナスゲなどは花盛り、エビスグサ、ハブサウなどはまだ幼い、ホタルブクロが、樹下一面に咲き亂れて居るのは誠に美しい。ゲンノシヤウコや、ヤブクワンザウなども咲き初めた。其他數ある内に特に目立つのはドクウツギ、見るからに、毒々しく咲いて居る、尙圃場にはベニバナも花を付け、朝鮮人

蓼も眞紅に實を結んで居つた。

◇ 兎も角、我々は路傍の一木一草が、如何に人間生活に役立つか、即ち人生と植物との交渉が如何に密接なる關係にあるかを知り得た譯で、更に進んで原始時代の生活状態に思ひ及ぶも面白からう。

◇ 藥草園を辭し、調布驛から自動車に乗り、雑木林の下道を一直線に走る。北に約半里程で大密林の窪地がある、是れ即ち古刹、深大寺である。

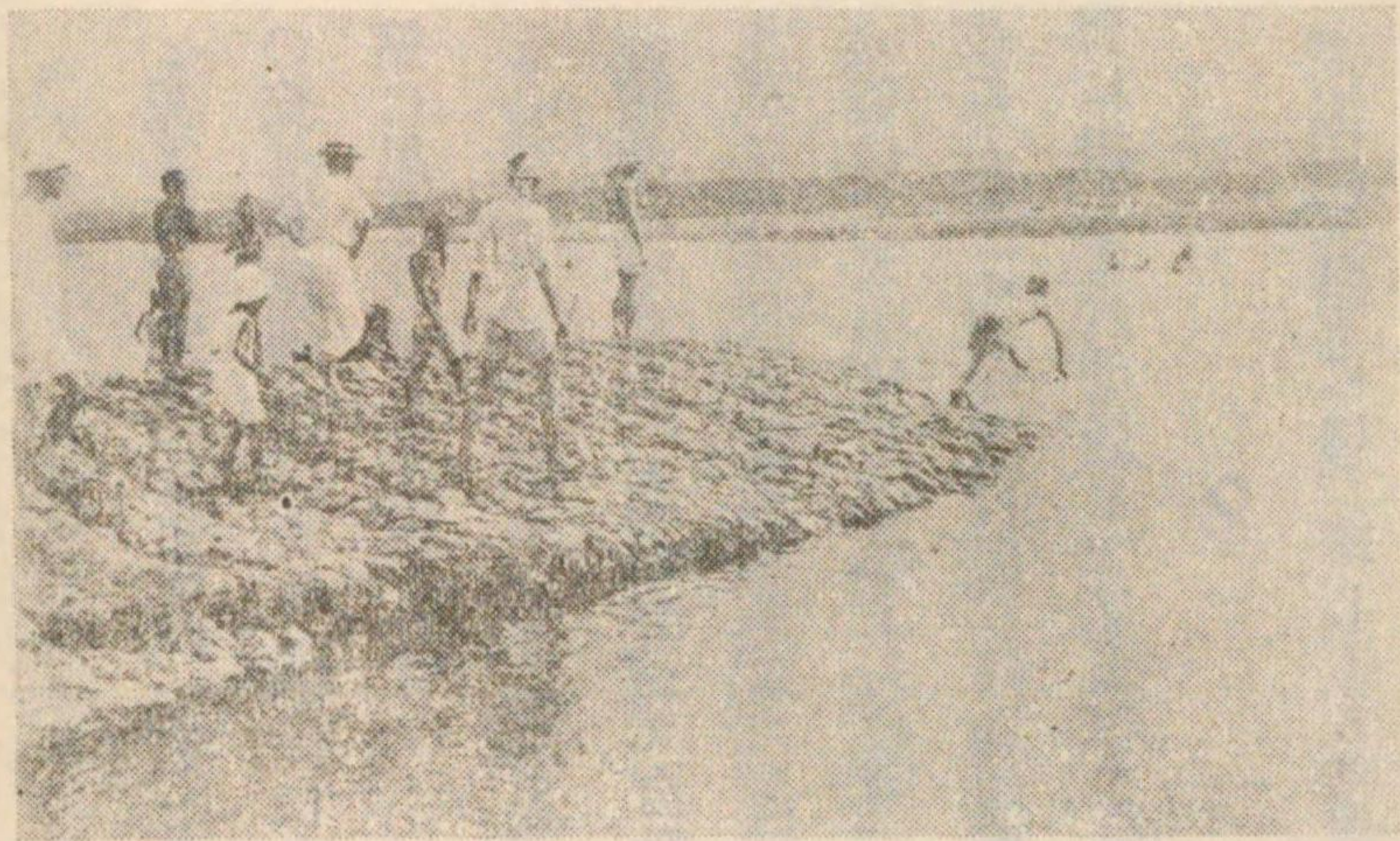
寺は、天平年間滿功上人の開く處、古くは法相宗であつたが貞觀年中に天台宗に改めたと云ふ。堂内には、釋迦如來の坐像がある。奈良朝時代の優秀な作で、現在は國寶に指定されて居る。又永和二年の銘ある古鐘などもある。

◇ 山門の右手には、珍しくも菩提樹の大木があり、今を盛りと咲いて居る。
菩提樹の花に薄日や堂の前

など、云ふ句を思ひ出す。だが釋尊がその樹の下で無上正覺を得たといふのは、此の

樹に非らず即ち印度の菩提樹で、日本のそれは似て非だが、しかし兎に角、何となく聖心を誘ふ木である。又往時所澤の南一里に菩提樹の古木があつて、其處を呼んで菩提樹村と云ふなども思ひ出される。

◇
境内には清水湧き出で、小池をなし、實に静閑である。裏山は鬱蒼として晝尙暗い、清水到る處に出て涼氣を覺ゆる。以前林間學校を開催したとかで大分不自然に改造されてゐる。近郊に稀に見る幽邃境は其の儘に保存し度きものである。



多摩川のリベの水遊び

欄干、白樺、楡、棕などの大木が生ひ茂り、見事に針葉樹を追ひのけた所謂闊葉樹

の林相である。

都人士の一日の行樂には最適の地である。

◇
一行記念撮影をなし、車中の人となる。初夏林間のドライブは又格別である。雑木林の隧道より大道に出た。曇り空も珍しく晴れ、沿道には農夫が農作物の手入に餘念がない。

武藏野西郊散策の一の愉快は多摩の高臺より多摩川に到る眼前の急に開け、眺望頗る大きい處にある。

◇
我が一行は一時近くに押立村の石井氏の別宅に着いた。その附近にはニセアカシヤがあり、待宵草は家を廻ぐりマ、コノシリヌグヒなどは遠慮なく匍ひ出て居る。月明の夜は彼の無心に咲く待宵草の姿を眺めるのもさぞよからう。蘆原がある、風に揺られて青葉の波を送る、涼しさ限りない。邊りは全く千草の園ひである、我等は呼んで千草園とも云はんかな。

押立の里は、香魚の名産地、家傳癆症藥で有名な處であつたなど、東都近郊名所圖や、東京郊外道案内などに、出て居るが今は其の面影もない。

多摩川も、六玉川の一つで、元は水が清らかで、川底の石礫が窺ひ得た川であつた。當時朝鮮娘の布晒しが武藏野の一名物であつたのも故あるかなである。

乍併、時代は移り今は川底處か、布晒しの娘に代り砂利採りの鮮人人夫の爲に河は全く濁されてをる、聊か皮肉の感もする。

石井氏の心遣ひで、中食も濟み一同川原へ散策に出た。

南多摩の急嶺を眺め、秩父や富士や丹澤などが眺められる。と云ふ眼界の廣大さ、殊に洪水の時、満水の有様は實に壯觀であるなど承る。

圖らずも河原にロケイションを見かけた、之れ一行に與ふる復と見難い一大餘興で

あつた。

松竹蒲田の舊劇、——秘武士放浪——大井川渡しの間、追手の役人と、二人の武士之れに加勢する船頭衆の太刀打ち、追手を敗つた二人の武士は、船頭衆に助けられ、首尾よく、河を渡つて落ちのびる場面、舟を河中に押し出す様は、實に捧腹絶倒の至りであつた。

五時、歸路を飛田給驛へとり、押立の宿を右に折れたる處に、家根一面卷柏の茂れる家があり、又人家の盡くる處、田と林の界に、山葵畑がある、近郊には珍らしい風情であると思はれた。

六時頃、電車は一行の疲れた體を乗せて一路新宿へ向ふ。初夏一日の行樂として誠に中分なき愉悅を覺えた。斡旋者石井君に對し深謝する次第である。此經費一人當り八十錢。

莓狩

峯几生

競ひ摘む莓畑の暑さ哉
五月晴摘みし莓の温き哉

網島温泉

温泉疲れに軽き眠さや五月晴

代々木御苑にて

扁舟生

あなたふとみそのにさけるこのはなあやめ
おほぎささのみそなはしつるこのはなあやめ

【七月之部】

中山道六十九次驛路の旅(第一回)

期日 七月五日(第一日曜)

集合 午前八時日本橋々上

出發 午前八時三十分

行程 中山道六十九次五百四十軒を脚に委せ、氣分に任せてテクラうといふのがこの旅の趣意で、何にも規約めきたる堅苦しき拘束に捉はるゝことなく、さりとしてポテカヅラを被つて往來するが如き狂氣じみたることもなく、同勢一行和氣霽々、乗るも歩くも、行くも休むも、飲むも食ふも風のまにまに、晴れて好く、雨に奇く、或時は昭和の恩澤に浴し、或時は三世紀の古に還る。路傍の小草一木、古き建造物にも旅の味はあるなんめり。など雅俗折衷、ワイワイガヤガヤと俄仕立の旅鳥で先づ

昌板志戸蕨浦大上桶鴻
平 田
橋村橋和宮尾川巢

七 月

二一八

日本橋から昌平橋を渡つて本郷の追分を左に板橋から志村の坂、戸田橋を打渡り、蕨の宿から浦和を過ぎ、街道の松並木を眺めつゝ大宮、上尾、桶川、鴻ノ巣を第一回の行程に豫定した。サアサア皆さん参りませう。

歸路 午後五時四十七分鴻巣驛發七時上野歸着解散の豫定

天候 不拘晴雨

地圖 東京東北部、東京西北部、大宮、幸手(五萬分)

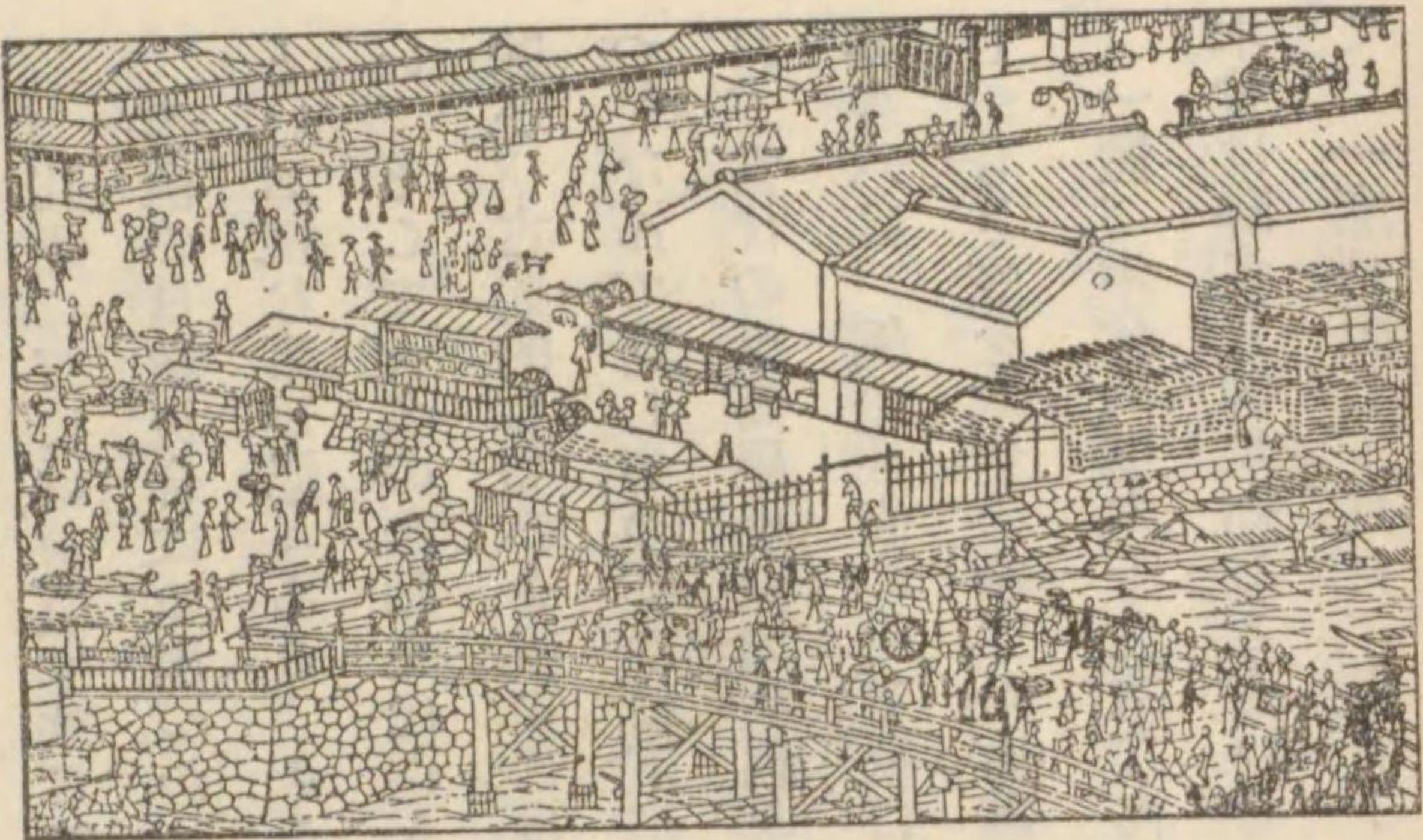
用意 辨當、水筒、雨具等

中山道六十九次驛路の旅

喜 多 八

第一回

お江戸日本橋セツ立ちと唄はれるのは、品川宿から出る東海道五十三次だが、昔、



お江戸日本橋

江戸を中心にしての街道は、千住掃除宿からの奥州街道。小菅からの濱街道。内藤新宿からの甲州街道。青梅街道。其他、千葉街道から成田街道。岩槻街道から流山街道。例幣使街道。秩父街道。川越街道。富士街道。鎌倉街道。大山街道と流行物の街道オンパレードが出る。其等の中で、四宿の中、西北に在る板橋宿から出る中山道から木曾街道となる六十九次は、山又山である爲め、文化の侵入が遅れ、未だに江戸時代の面影が隨處にある。全體、東海道筋は、所謂本街道で、道路も比較的平坦なので、道中が樂であつた。併し、徳川氏の政策で大井川其他の河川に橋を架けず、渡渉させて居たので、一朝大水となると、川止めと稱して、川があく迄川の兩岸に逗留するが、其滞在日

七 月

二一九

數がわからず、従つて費用もかゝる。

川止にてはを直す旅日記

奥様の日數が合はぬ川づかへ

といふ様な事が屢々ある。そこへゆくと、路は多少險しいが、木曾街道は、其憂が無
い、そこで大名の參勤交代にも、木曾街道を往復した物もある。で、寧ろ旅氣分を
味ひ、古典的な匂ひを嗅ぐには、木曾街道の方がすつと面白い。東海道五十三次をや
つたなんて嬉しがつてやに下がるなんざあ、あめえもんだといふので、此企が實行さ
れ、當代の板面屋小池彌次利兵衛を先頭に、喜多一から始めて同行十二人、かく申す
喜多八は、例の朴齒の中下駄に、雨に好し晴にもおつたと、洋傘一本を持つたまゝ、
しがらき笠を木曾の旅、千山萬嶽を踏み破らうといふのである。

一體、木曾街道六十九次なんていつたつて、東海道なら、道中双六でも御存知だが
木曾は驛名も御承知あるまいと、老婆心から、驛名と間隔里數を、古い道中記によつ
て、一應列記して見た。驛名下の括弧内は、現時の稱呼。里數の下の括弧内は其間に
ある、名所、舊跡等である。

日本橋—二里十五町半—板橋—二里十五町(戸田の渡)—蕨—一里九町半—浦和—一
里半—大宮—二里一町—上尾—一里一町—桶川—二里—鴻の巣—四里十六町半—熊谷
—二里二十八町半—深谷—二里三十町(傍示堂)—本庄—二里六町半(武藏上野境、神流
川)—新町—一里二十六町半—倉賀野—一里九町—高崎—二里—板鼻—三十町—安中
—二里十六町—松井田—二里十五町(横川關所)—坂本—二里三十四町半(碓氷峠、上野
信濃境)—輕井澤—一里五町—沓掛—一里三町—追分—一里十町—小田井—一里七町
—岩村田—一里十一町—鹽奈田—二十七町—八幡—三十三町—望月—一里八町—芦田
—一里十六町(笠取峠にて淺間山見晴し)—長窪(長久保新町)—二里—和田—五里半
(和田峠)—諏訪—二里三十町(鹽尻峠)—鹽尻—一里三十町(桔梗が原)—瀬波(洗馬)—
三十町—元山(本山)—二里(木曾境)—熱川(贊川)—一里三十町—奈良井—一里十三町
(鳥居峠)—八五原(藪原)—一里三十町—宮の越—一里二十八町(義仲城址)—福島—二
里半(木曾かけ橋長サ八十間)—上ヶ松—三里五町(寢覺山)—須原—一里三十町(今
井兼平城址)—野尻—二里半(架橋多し)—三戸野、三富野(三留野)—一里半(河渡觀
音)—妻籠—二里(馬籠峠、木曾のみ坂)—麻古女(馬籠)—一里五町(十曲峠、信濃美

濃境)―落合―一里―中津川―二里二十四町―大井―三里半(追分、大井川、西行坂)―大久手(大湫)―一里三十町(琵琶峠)―細久手―三里(和泉式部屋鋪跡)―御嶽(御嵩)―一里五町―伏見―二里(太田川渡)―太田―二里(観音坂)―鶴沼―四里八町(各務野、長良川)―加納―一里半(河戸川)―河戸、合渡(河渡)―一里六町―御影寺(美江寺)―二里八町―赤坂―一里十二町(青墓に朝長の墓、青野が原、物見の松)―垂井―一里半(班女の舊跡、不破關)―關ヶ原―一里―今須―一里(美濃近江境、寝物語)―柏原―一里半(鶯ヶ原)―醒ヶ井―一里(蓮華寺)―番場―一里六町(夫婦石、摺針峠)―鳥居本―一里半(多賀、彦根)―高宮―二里(高宮川)―越知川(愛知川)―二里半(關寺)―武佐―三里半(鏡山、三上山)―守山―一里半―草津―三里二十四町―大津―三里―京都

合計百三十七里二十六町半(文化元年と安政五年の道中記により作成せり。二十萬分地圖、東京、宇都宮、長野、高山、飯田、岐阜、名古屋、京都及大阪参照)

イヤ大變だ、何年かゝるか判らない。自動車なら二日もかゝれば行かれらア。莫迦奴! なにを云ふ。それだから貴様は頭が悪いと云ふのだ。己れの事を古い頭だといふそつちの方が餘ッ程わるいぞ。一體、旅の味といふものは、其間に人事の交錯があ

つて、始めて面白いのだ。急用の旅なら、飛行機でゞもおツ飛ばせろ、天地の美に陶



てに頭橋標元し際に發出

酔し人間の機微に觸れ、悠々として楽しむのが趣味の旅の本領だ。三十八軒の奥入瀬の溪谷を自動車でぶッ飛ばし、十和田湖を見たのちや、本統の自然美は判りやしないぞ。一體全體抑元來人間が、森羅萬象の味といふものが判るようになるのは……オイ、お彌次どの、なんだつて、そんなにあつくなるのだ、陽氣のせい、か、氣の毒な。そんな屁理屈は、法律書生の出來損ひの云ふ事だ、別荘へ二週間もいつて涼んで來さッし、江戸ッ子はな、錢に奇麗に、萬事淡泊にやる事だ、よさッしく。

一日曜。旗上げはしたものの、同勢やうやう四五人と思ひきや、十二人とは香氣坊も

多き者なり。前夜、信州よりの不意の老客を、萬世のメトロの入口迄送り、青バスで飛ばせ、日本橋へ着いたのは、八時三分前、吉川君第一着、彌次さんは第二着で、早や日本橋をカメラに収めて人待ち顔なり。待つ間を日本橋郵便局へスタンプをとりに行く悠々生の出立ちは、紺の脚絆に、ゴム底足袋、先づ現場監督と尊稱を奉る。中山の本さんは、午後用事が出来たので、同行出来ず、されど寫眞撮影の御約束あればとて、態々携帯して御出張には恐縮したり。出発時刻八時三十分となりたれば、徳川慶喜公が筆を揮はれたる日本橋の文字ある柱を圍んで記念撮影の第一回。すると小松原頭目子が馳けつけ、續いて和多利氏は、満洲を踏んでも足りないとして、此行に加はらる。たうとう、寫眞の撮り直しとなり、交通子は、獅子の脊中へ乗りかけの段となつて、御覽の通り。

先づ第一に、駿河町は、御案内の三越へ飛び込む。今日、日本橋々上の集合とて、何時もの旅行服を、背廣とめかし込んだAちゃんを除き、あとは異様のいでたちの多人数に、玄關子の眼を視張るを餘所に、鐵道案内所に飛び込み、スタンプ押しに忙はし。越後屋三井呉服店の昔は、番頭が店先に並び、頭の上に名前を書いた札を下げてあり

風の神三井の店に小半年

と川柳子は読んで居るが、今では使用人多數なれば、風の神も中々半年一年では、おさらばとは行くまじ、盛大なるかな〜。

次に神田驛前の案内所を訪ひ、復スタンプ押しを済ませて出立し廣瀬中佐の銅像下を過ぎ行けば萬世橋の消防署にて、消防梯子をいと高く引き延して磨き最中なり、一同上を見上げて立止まり感心する許り、そこで恐る〜消防手の傍により、此梯子は何の位長くなりますでせう。八十五尺ですと聞いてびつくり、なんと皆の衆聞かッせい八十五尺あるとよ、村の鎮守様の御神木より高いでねいかよ、と云ひつゝ古へ中山道の通路なりし昌平橋に着く。

本鷹君お別れにと寫眞機を組めば、折柄橋柱にうづくまるルンペンを入れてと用意したるに電柱が邪魔にて、どうにもならず、止むなく橋を渡り、西側の橋柱に行かんと暫し佇めば、交通巡查公、地方出と見てか、手を振つて横切れといふ。お上りさんと見られたのが嬉しくて、馳けて集り復パチリ。中山氏と別れ、聖堂へ向ふ。

抑、昌平爰は、寛永十年尾張の徳川義直公、上野に建立せられしを、元祿四年、五

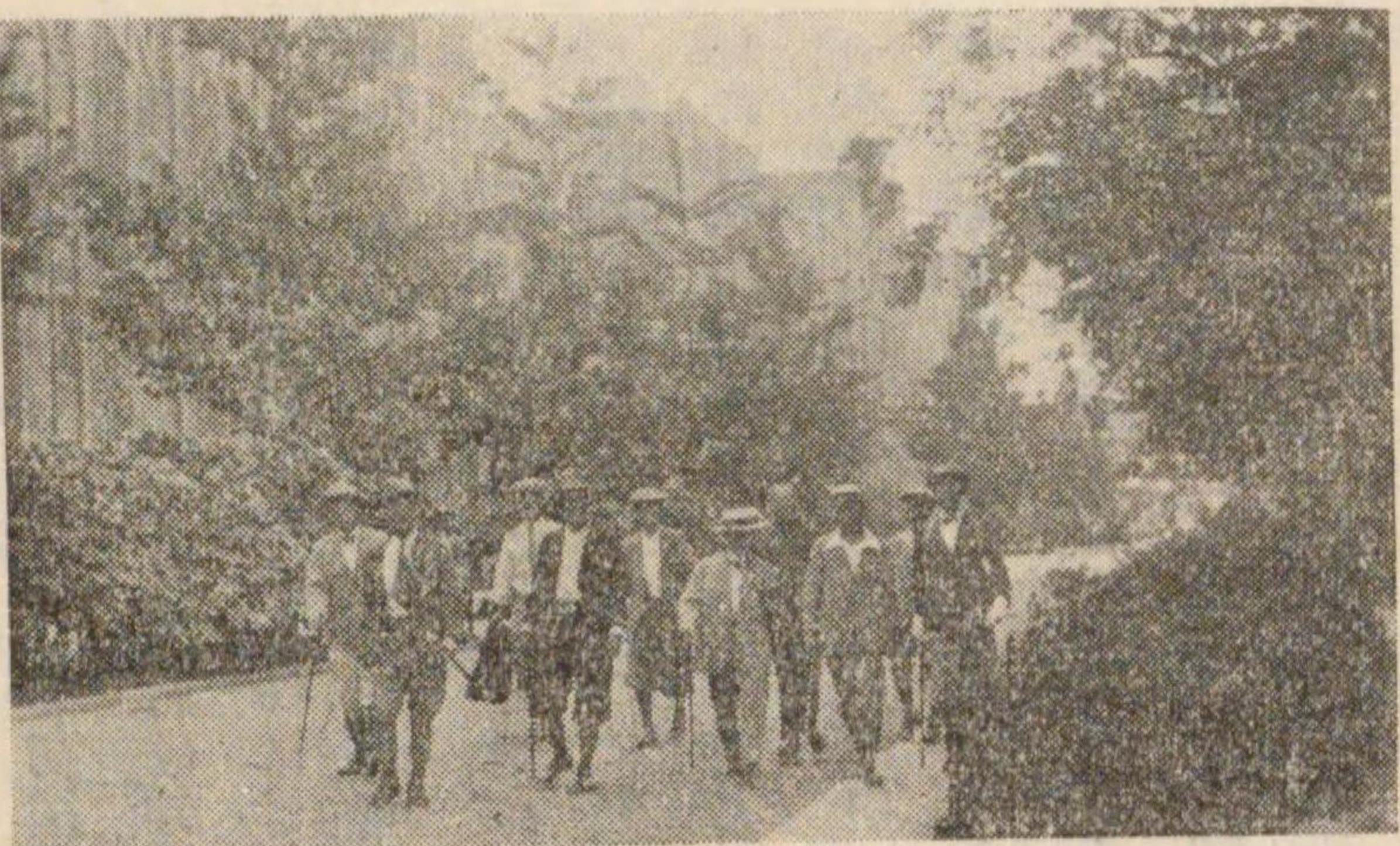
代將軍綱吉公今の地に遷され、寛政に造営ありしも、辛亥の震災に焼失し、再建の計畫中にて、今は假の大成殿あり、昌平とは、孔子は、山東省曲阜縣の東南なる昌平郷



上右 昌平橋にて。天然記
念物。癰瘰
上左 神明田にて。印
本郷の掛行と一行

の生れなれば、江戸湯島の此地に、昌平坂學問所と名付けて各藩の人材を集めたるなり。さるにても、羽織の紋の古きをば胡粉にて塗り潰し、其上に紋を書きたるを昌平

紋といふは如何なる理由にや。



帝大構内の一行

魯學者紹に昌平の紋をつけ

それより神田明神に賽す、祭神は大己貴命と平親王將門なり、人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年の鎮座にして初め神田橋内にあり、慶長八年駿河臺に遷り、元和二年今の地に遷座す社殿は震災に焼け、今コンクリート造りの新殿建築中なり。

公卿惡の前に魯國の實事師

とは、將門と孔子を讀みし川柳子のさかしらなり、昭和の今は

キリストと孔子行交ふ聖橋

子、事の次第を話すにぞ、それは面白い、前途の無事の爲めお穢ひを致しませう、と

一同を神前に立たせ何やら告詞を上げて大幣にて拂ひ給ひ浄め給ふ、御神供をめぐくに頂だいしたれば、御初穂をあげて引下る。

彌次さん曰く、イヤ流石は神田の神主さんだ、氏子を扱ひつけてるので旨いもんだ、たうとう御供物を授けられた、アハ、なんと彌次さん、一句浮んだ、將門と神田の読み込みはどうだ〜

まさか毒はあるまいと噛んだ菓子

電車通りを本郷三丁目に来る途中、地口行燈の繪を見、文句を讀んでる様子は、確かに田吾作づれだ。

「本郷もかねやす迄は江戸の中」と云はれた小間物店は、今尙ほかねやすゆうげんの看板を藏すといふ。前進すれば、大學の赤門なり。本名を御守殿門といふ、徳川將軍の息女の、三位以上の位を有する大名に嫁したる時は其居所を御守殿と云ひ、通用門を作る、即ち朱塗りの門なり。此門は慥か、文政年間に十一代將軍家齊の女の爲と覺ゆ。如何様百萬石といふ洒落のある位の百二萬二千七百石取りの大々名であつたゆゑ、藩士は中々威張つた者で、蜀山人が、水戸ッポポに加賀ッポポと悪口を云つたも其

爲である、何處にもある奴さ、虎の威を借る狐はね。

赤門をくゞつて正門から出て高等學校の前の追分で、右に日光街道を見て、電車通と離れ左に入る、大分疲勞したらしいUU子の爲め、一高の學生の御馴染、梅月に入り、一同みつ豆とげびる。宮内省御用のみつ豆は東京で私の所一軒と老爺に氣焰を吐かれ、國の土産にするからとマツチを澤山貰つて出て、東片町の、ほうろく地藏で有名な大圓寺に、高島秋帆の墓を弔ふ、秋帆は長崎の人で、町年寄の、たしか三軒の中の一軒で、高島四郎太夫、秋帆は其號だ。大田蜀山人が、文化六年に長崎へ行つて、オランダ船を見たり又諸所の臺場も巡見した事が紀行に見えて居る、其時飛道具と唱へる鐵砲に深く感じた事があつて、一自西洋傳火技、孫吳韜略盡陳腐といふ詩を作つたのであるが、此詩が、僕の祖父が、江戸から土産として秋帆先生に贈つた書畫帖の中に在つたのが、新式の西洋砲術を起す導火線となつたは實に不思議である。

和蘭の甲必丹とは、船長の事で、商船の主管である、文政の末から天保の初にかけて、四年間長崎出島の蘭館に在住して居た甲必丹デヒレーニューペ氏は、武官出身で砲術に精しくオートルローの戰に参加した人だ、秋帆先生は、蜀山人の詩に感動して

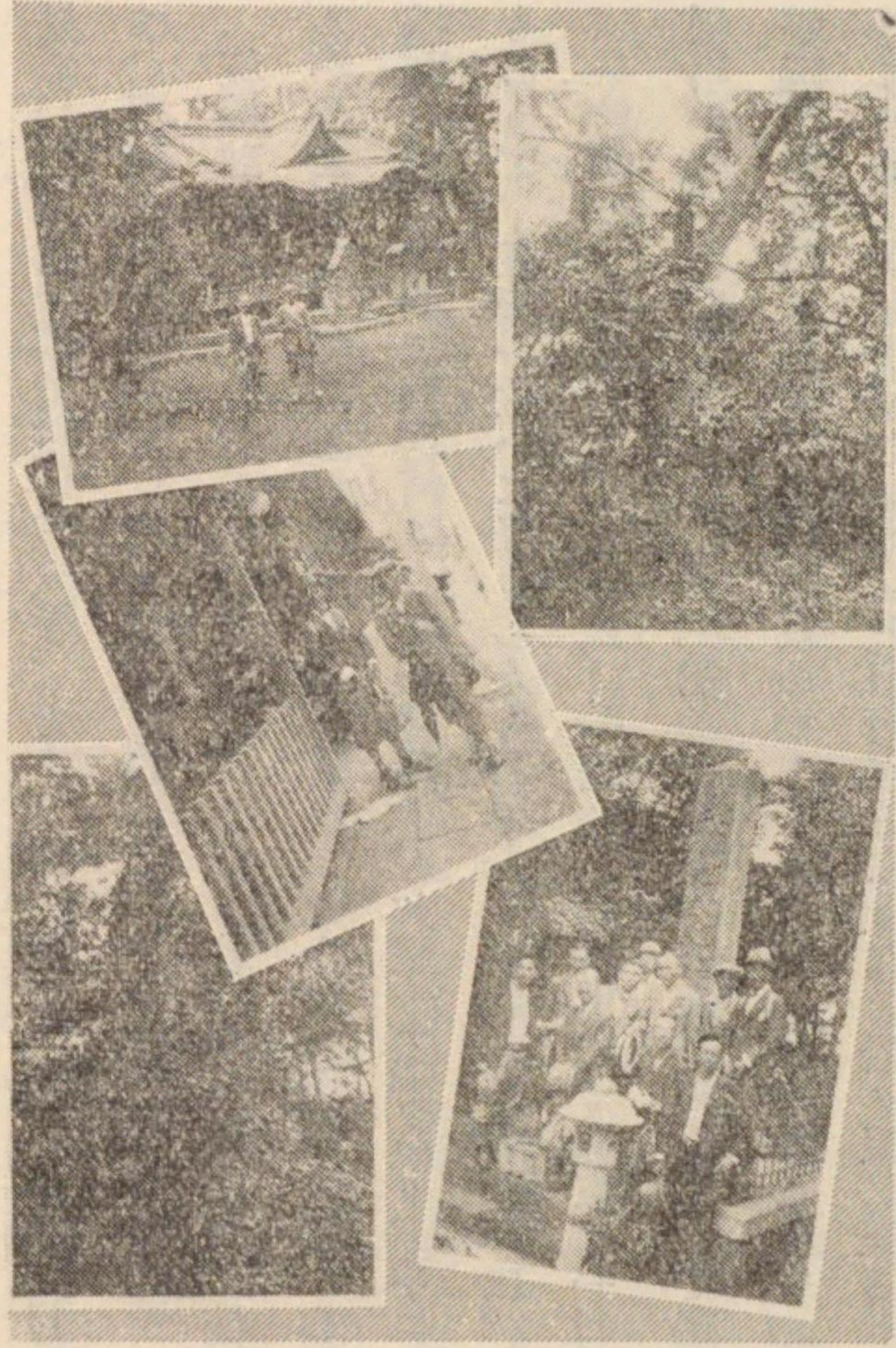
デヒレー氏に就いて西洋砲術を研究した、其後長崎奉行田口加賀守といふ人が非常にこの西洋新式の銃隊に賛成し、自分の家來を其門下とし、弟子が五六十人出來た、天保十二年に加賀守が、高島師弟を江戸へ連れて來て、四月十二日に板橋在の徳丸原で銃隊訓練を、老中若年寄に見せた、是が今日の西洋銃隊の抑々の始なのである。伊豆菰山の江川太郎左衛門は、此高島の門人だ。秋帆先生は、慶應二年に六十九歳で歿してゐる。

それより東西片町の境界の大道路を下り左折して電車通りより右に曲り上り、白山神社に詣る。白山神社は、小石川の鎮守で、祭神は伊弉册尊、菊理媛で元和三年の勸請、社殿は今改築中で假社殿に鎮座ましましてゐる、平生如何にも疲れたらしく、それに此間には見る所もなければ白山上から市電に乗り巢鴨終點にて下車、眞性寺の江戸六地藏の三番を拜み、とげぬき地蔵で名高い高岩寺の延命地蔵に參詣し、乗合自動車を奮發して、萬歳館前迄五錢、それより、幕末のチャンバラで活動館のおまんまの種を作らへた新選組の隊長近藤勇、副長土方歳三及び隊士永倉新八の墓に詣る。往來より一寸這入りたる所に、目印の石標あれど、大きな芥箱に隠れて迂闊に通ると見逃して仕舞ふ。其横町を突當り、一寸左を見ると、大きな石碑がある。記念撮影して前進板橋郵便局でスタンプを押して貰ひ、市電の板橋終點より更に前進、川越街道を左に見て、中山道の舊街道に這入り、とある蕎麥屋の二階へ押上り行厨を開く。彌次さんは、廢驛の典型的な遊女屋をカメラに収めてニコ／＼する。

板橋驛は、六十九次の第一次の驛にして、昔、驛舎の中程を流るゝ石神井川に架する小橋ありて、板橋とは稱せしなりといふ。今は新道出來て、自動車も通ずれば、石橋驛とでも改稱は如何呵々、宿驛當時の遊女屋十二軒あり、中には堂々たる構のものもありて、食指の太いに動きし人もあるらしけれど眞晝間では、どうせうもない。

一時出發、新道にて小松原氏は午後からの所用にて歸京、一行は、縁切榎迄乗合を利用する、榎は、老木は枯れて樹幹が残り、若木が天を摩して居る。昔も今も、家庭争議は盡きぬと見え、子供連れの婦人二人、頻りに樹後の堂守の家にて話し居たり。更に前進、貫ひ子殺しにて、近頃有名となりたる岩ノ坂に至る、近時其名を忌みて蓬萊坂と建札し蓬萊坂分讓地と稱す、されど笑止や傍の交番所には、岩ノ坂上巡察交番所となり居れり、是では頭隠くして尻かくさずぢや。

かくて行きゆきて、志村に出で、一里塚を見る、道の左側の榎は枯れて小丘残り、右側のは亭々としてゐる、慶長九年に造りし者にて、無論天然記念物なり。交通子は



。部上の榎 塚里一村志 上右
墓の三歳方土。勇藤近 下右
橋板 中左。社神調 和浦 上左
塚里一村志 下左 てに前樓青
部下の

一里塚の定義を寫すに忙し。

あの世には未だ間があらう一里塚

左の方約半町に延命寺あり、門を入ると、直ぐ左に、去年七月天然記念物に指定せられたる瘤樺あり、一見の價値ある見事なる大木なり。更に進んで、志村の急阪を下る。九號国道として今盛んに勾配緩なる新坂を作り居れり、梨幸氏曰く、これだから困ると、監督の土木技師、妙な顔色なるもをかし。自動車隊は、新道開鑿賛成ならん。戸田橋は、橋脚危しとて、面倒臭き提書あり、新橋は、ビヤ一丈け出来上り居れり。ありがたい事くといふ題の前句附に

渡さぬは渡さう爲の橋普請

とあり、前記の提書の爲めか、現今自動車多くは川口を通るとぞ、吾等の爲めにも、ありがたいことく。

橋を過ぎてハイヤーを呼び、蕨郵便局に途中下車して、浦和の入口、岸町の調神社前に車を捨てる。

延喜式神名帳に、武藏國足立郡調神社とある之れなり、今は縣社にて、境内もの寂びて、其一部は浦和公園なり、社務所を訪へど、更に人影なく、止むなく蒐印を斷念して、浦和町に入り、右折して郵便局にスタンプを乞ひ、一路大宮に向ふ。

お待ち兼の約六軒の松並木は大分傷んで居て、意外な思がした。しかも下は小さな割栗石がごろ／＼して歩き悪く、U現場監督、いよく顔をしかめる。

仰のいて悦んで居る松並木

とは、古るい川柳なれど。今は

俯むいて小石を避る松並木

やつと、氷川神社の参道入口に来る。此處から十八町の参道は一寸ウンザリさせられたが、兩側の並木、何時もながら神々しく、歩みを運ぶに心強し。天楓子も流石に弱つて呻り始めたり、氷砂糖をしやぶらして、おほ坊や達をなだめ、神前に一拜す。

氷川神社は、人皇第五代孝昭天皇の御代の創建、武藏國の一の宮にて、延喜式神名帳に、

武藏國足立郡氷川神社、名神大月次新嘗、とあり、祭神、大己貴命、素盞鳴命、稻田姫命を祀り、官幣大社たるは人の知る所なり。今の社殿は、明治十四年の建立にて流造りなり。拜後スタンプ連は郵便局に向ひ、スタンプを乞ふて停車場に馳せつけ、こつちは彌次さんと二人連れ、饅頭むしやく／＼喰べながら日光より来る七時十分發の

八二四列車にて無事歸京の途に就く。今日の行程、神田明神に始り、氷川神社に終る。

中山道六十九次驛路の旅は、神明の加護いよく／＼いやちこなるべし。

汽車中談に、今日の日和の好都合照らす降らず、始終薄曇りにて暑からず、好コンデイション、思ひの外捗どらねど、無事京都に着きたらば、東海道を江戸へ下り、續きて濱街道、奥州街道、次ぎには、芭蕉の奥の細道を尋ね、連続旅行を毎月一回決行し、先づ五六年の繼續事業とすべしと、睡き目をこすり／＼衆議一決して分袂せり。此經費一人當り金一圓十六錢

燦たる異彩を放つ相馬野馬追祭り見物

期日 七月十二日(第二日曜)

集合 十一日午後九時十分上野驛

發車 上野驛午後九時四十分

下車 原ノ町驛十二日午前五時五分

七月

上野驛

原ノ町

行程 相馬の野馬追祭は、我國でも、さう他所には類のない異彩を放つた祭りであ



相馬野馬追祭

る。祭りは十一日(宵宮祭)十二日(野馬追祭)十三日(野馬掛)の三日間行はれるうちで、二日の野馬追祭はそのクライマックスに達した壯烈なるシインを現す日である。先づ一行は旅館で七時半頃迄休憩朝食を攝つて夜行の疲労を醫してゐるうちに甲冑に身を堅め、幟指物物々しき行列が来る、それと同時に雲雀ヶ原に行つて最も猛烈なる神旗の争奪戦からその優勝者が牛來山七曲りを一氣に馳せ上つて本陣に神旗を届ける迄の祭事を見物する。歸路は湯本驛に下車して約三時間程湯本温泉にでも浸つてのびる事にしようと思ひます。

歸路 午後六時五十三分原ノ町發列車に搭乘、十三日午前五時五十分上野驛歸着解

散

天候 不拘晴雨

雨の野馬追祭り見物(紀行)

悠々生

梅雨が逆戻りしたような、連日の雨に、野馬追祭り見物も、如何あらうかと、氣遣はれたが晴雨に不拘といふ豫定により、出かける事にした。

一夜を寢臺車中で熟睡し、眼が覺めれば、やむように祈つて居た雨が、窓を打つて居る、何となく憂鬱になる。

◇

午前五時二十分頃、原ノ町驛に下車すれば、先着した半田氏の待つて居られたのも嬉しかった、共に雨に悩む町に行く。今日の祭典を機會に、來遊者に展覽さすべく、各種の物産の陳列會などの標示や、見本などが雨の爲に、臺なしになつて居るのも、

氣の毒に思つた。

一足先に、旅館を定むべく、出かけた大槻氏父子の迎ふる扇屋といふ宿におちつく各所から、祭り見物に来て居る宿泊者で雑沓して居る。

心おきない一行四名は、宿の主婦等と爐を圍んで語る。煤けた黒光りの天井に、自在鍵をつるし、カンカンとした炭火に大鐵瓶の湯はタギッテ居る。薄い莫座の座蒲團だけは、夏らしいが、雨の爲の冷氣で、火が欲しい、爐邊の温みがなつかしい。

祭りの行列の通るまでには、間もあるので、朝食後小憩してから、太田神社に詣でる。自動車は、篠つく雨の中を十町餘走つて、田圃の中の小流れを前にした神社前に着く。社頭の巨杉は神寂びて、林立した數株の根の合して居るのも、他によくあるものと異り、最も自然味に富んだ、古色の豊かなものであつた。當社は縣社であり、由緒の古いものである。相馬妙見宮の御本元で郷黨の崇敬篤く、場所柄、牛馬御守神としての目標ともなり、馬體健全を祈る意味の轆り數流の建つて居るのも、珍しいものとして見た。

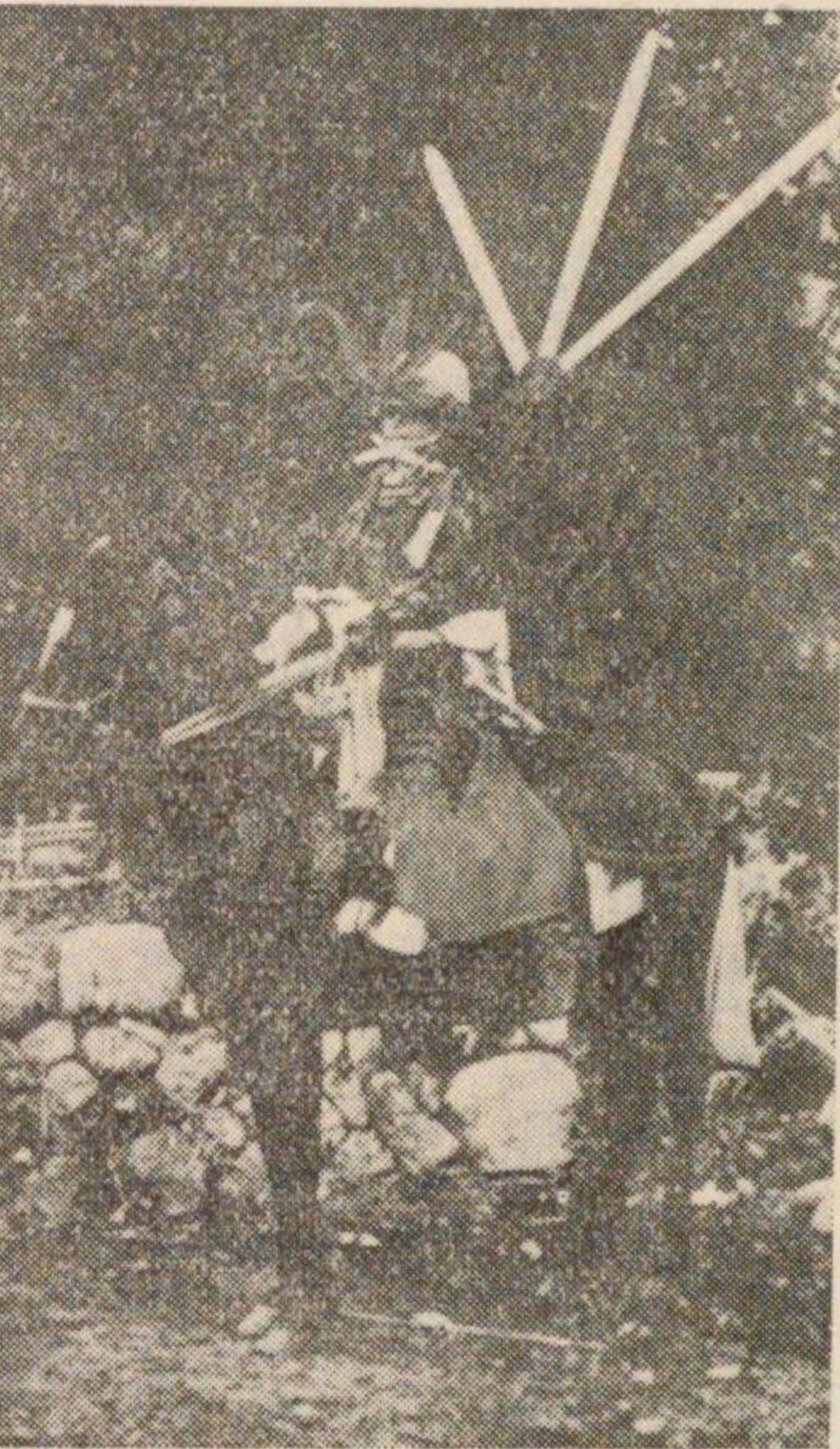
神社では野馬追神事のある大祭であるから、手傳ひらしい人々も多く見受ける、禮拜してから、社務所で集印を乞へば、丁寧に各種の珍しい印を押捺してくれる、深切味が溢れて居る。

自動車中から見た野馬追ひの祭場地、雲雀ヶ原は、夏草の生ひ茂つた廣い平野で、二三天幕などもあり、觀覽席のような處も見えた。雨に煙つて遠望は達せられないが今日の盛儀を想像した。

旅館に歸つて、復しても爐を圍み、宿の人等と荒天を恨み、毎年の催しの景況を聞いて、僅かに想ひを慰める、態々出かけて来て、見なければといふ慾望を何かによつて、償ひたいといふ氣も、初めは濃い、徐々に此の香氣な爐邊の語らひに、晴雨常ない天候によつて、一喜一憂するのも、大人氣ないと觀念して、宿の子供の女學生、中學生、小學生等の體格のノンビリとして居るのに、別趣の感も得て、廣大無邊の天

の配劑を欣しく見た。到る處青山ありだ――

空は明るくなつたようだが雨はやまない、その中、午前十時頃になつて愈々騎馬の



姿衣母の將大總るた爽颯

行列が見え初めたと云つて、ざわめいて來た。宿の前に道路を挟んで、見物人で一ぱいである、吾等もその行列を一人も見逃すまいと多くの人の間から凝視する。

太田、小高、中村の三神社の氏子の主なる人々の行進であるから、各神社、特有の壯麗な神輿に續いて、騎馬が列をなして居る。陣貝、陣太鼓を鳴らし黒絲緘の大鎧に五枚兜の緒を締めて三春駒に跨る大男もあり、或は緋緘の鎧を着て鍬形半月の兜を戴

き、眞白い幌を負ふて月毛の駒にゆられる老武者があり何れも身に纏へる甲冑は、傳家重代の寶物とも見るべきもので各々家柄を誇り氣に、十騎、二十騎、三十騎、歩武肅々として雲雀ヶ原へと向つて行く、その得意想ふべしである。九曜星の紋所を染めた紙片を、各戸の軒先に張り交はしてあるのと反映して、威容嚴然とした武者姿、古武士の出陣の様も斯くやと偲ばれる。實に天下の偉觀といふも過言ならずである。

此の行列も、今日は雨の爲に例年の三分の一にも達せず、累代の重寶を、祭典の爲とはいへ雨ざらしにするのは惜しくて出ない人も多いとのことである。

行列の壯觀を目のあたり見て更に雲雀ヶ原の、野馬追の盛儀も見たく思つたが、雨のやむ氣配もないのに、神旗の争奪戦といふような、勇壯な觀物は次の年に、好天氣の日を選んで來ることゝして、午後〇時五十六分發の列車で歸ることにした。

大槻氏父子は、長驅して、仙臺、平泉方面へと探勝の旅を續けられるとのこと、

別れて、半田氏と共に上り列車に乗込む、原ノ町驛に隣りした、無線電信の送電柱鐵塔二百米突の突端には、霧が深くかゝつて居た。全く梅雨の模様である。

車中八時間、向き合つた二人窓外の景を語り、人事の變を談じ、興の盡くる處がない。天氣が良ければ、途中下車して日立鑛山など見るべく、知人より添書も得て居るが、此の雨では氣乗りせず、車中から鑛區の狀況を想像しつゝ、一路歸ることに決した。想へば昨夜出發してから、一晝夜の行程である、雨に祟られた野馬追祭り見物も特別な古代の時代相を知るには良い觀物であると思つた。

此野馬追の由來は、相馬子爵の祖先が、昔下總に居住の時、小金ヶ原に馬を放ち、將士を會して武事を講じたるに起因し、後居城を奥州相馬に移してより六百年、野馬を雲雀ヶ原に放牧し、毎年五月の中の申の日に野馬追を行ひ、藩士を訓練し、治に居て亂を忘れざる備となしたが、廢藩後、縣社太田、小高、中村の三神社の祭祀として連郷其の典を擧げ、祭日を七月十一日(宵乘)十二日(野馬追)十三日(野馬懸)と改めた。

明治四十一年十月九日大正天皇皇太子に在せられ、東北行啓の際、臨時野馬追を舉行して、畏くも、台覽の榮を賜はり、爾來一層天下に宣傳せらるゝに至つた。此經費一人當り九圓二十二錢。

家族連れで危険のない川遊を催しませう

期日 七月十九日(第三日曜)

集合 午前七時三十分池袋驛(武藏野鐵道驛)

發車 午前八時

下車 佛子驛午前九時四分

行程 驛から數百米で名栗川の川畔に出ます、此邊は水が清冽で、川幅廣く、遠く秩父連嶺の翠巒を望み、近く阿須山の懸崖を眺め、水深は何處でも大抵大人の膝より深い所はない、流れも極めて緩慢で、どんな小兒でも全く危氣のない理想的な川遊場所です、そこで豫て依頼し置きたる漁師を促して鮎其他の川魚狩りを始めま

池袋
佛子
名栗川
阿須山

す、此處は特に遅れて漸く六月廿一日に解禁になるのですから漁獲物も豊富であらう、それを副食物に河原で晝飯を攝る。愉快、愉快、飯の一杯や二杯は餘分に入るあはよくば午後の漁獲物は家苞とする考もある。斯くて一日を家族と俱に楽しく遊びませう。

歸路 午後五時廿八分佛子發午後六時卅五分池袋驛着解散
天候 雨天中止
用意 川遊びに必要な濡れても差支ない様な御仕度を願います。

日光白根登山と丸沼菅沼へ

上野驛
期日 七月廿五日、廿六日
集合 廿五日午前八時上野驛
發車 午前八時廿分
日光驛 十時五十分

湯元 中禪寺湖
男體山 精體山
白金山 根原山
戰場原

行程 驛より直ちに自動車にて湯元へ向ふ、途中の瀧や溪谷美は云ふ迄もない。中禪寺湖畔よりは右に男體山を見左に湖水を越えて金精峠より白根山が見える。戰場原へ進めば白樺やカラマツの林と此平原獨特の草花が美しい、やがて山奥の湯の湖を廻り北岸の湯元温泉につく、こゝは近頃避暑地やキャンプ地として有名だ、一浴後散歩し高原の一夜を過す。翌日は早朝前白根より奥白根へ向ふ。道は森林中岩石多く急坂であるが五時間あれば頂上に着かう、頂上からは上越那須及關東平野を距て、秩父富士の諸峯が見える、頂上より西北方菅沼丸沼大尻沼の幽邃な湖水を廻り白根温泉を経て鎌田に到り自動車で沼田驛に出る。

用意 當地は雨量多き所ゆゑ雨具其他必需品
地圖 男體山(五萬分)
天候 不論晴雨

【八月之部】

世界に冠絶したる秀麗無比の富士登山

期日 八月二日(第一日曜日)

集合 一日午後六時飯田町驛(混雑の見込に付早く来る事)

發車 飯田町午後七時十五分

下車 富士吉田驛十時卅六分

行程 吉田の驛を出外れると縣社淺間神社がある、參拜後社背から登路にかゝる、馬返迄五軒半の道は極めてよく約一時間四十分で達する五合目迄もそんなに骨は折れない。八合目迄は矢張少し骨の折れる程度、それから胸突八丁の急傾斜を攀ぢて頂上に達する途中で御來迎を拜することとなる。淺間神社の奥宮に參拜して後眺望を恣にする、其景觀に就てはこゝに縷説を要すまい。歸途を須走口にとり六合目か

ら太郎坊迄一氣に砂を蹴て降り須走から自動車で御殿場驛に出る。夜行の苦しき方は先發されて吉田で一行に合さるゝもよし。馬返迄は馬車、五合目迄は乗馬の便もあるから利用せらるゝもよい。

歸路 午後四時二分御殿場驛發午後六時四十五分東京歸着

天候 雨天中止

地圖 山中湖、富士山、御殿場(五萬分ノ一)

用意 辨當三食分、水筒等

昭和の富士登山風景(紀行)

石 健 生

第一景 飯田町驛夕景

八月一日午後南風で蒸暑く日没より微風で漸く夏の氣候も定つた、夕方の飯田町驛頭には山麓鐵道の係員が天幕を張つて電車の割引切符を賣るに忙しい、省線驛では吉

田迄連絡切符を買つて呉れと掲示して居る、私設鐵道は賣上の現金が直ぐ欲しい様に見えて憐れだ。

驛の待合室には色々の仕度の登山者が話かけて居る。富士行の者は大抵輕装だ、中には雨具を持たないで天氣は確だと一人で晴天を保證して居る者も居る。重いリツクサツクを持つてる女連の者も居る、五合目邊で御召替の積りか未だ白靴に絹のドレスの彼女は、化粧姿美しいが八合目邊では精々彼を困らせる事と想像される、その中に異彩を放つは履物で苦心の結果弟の中學生の靴を借りて來た婦人で得意に話して居た。

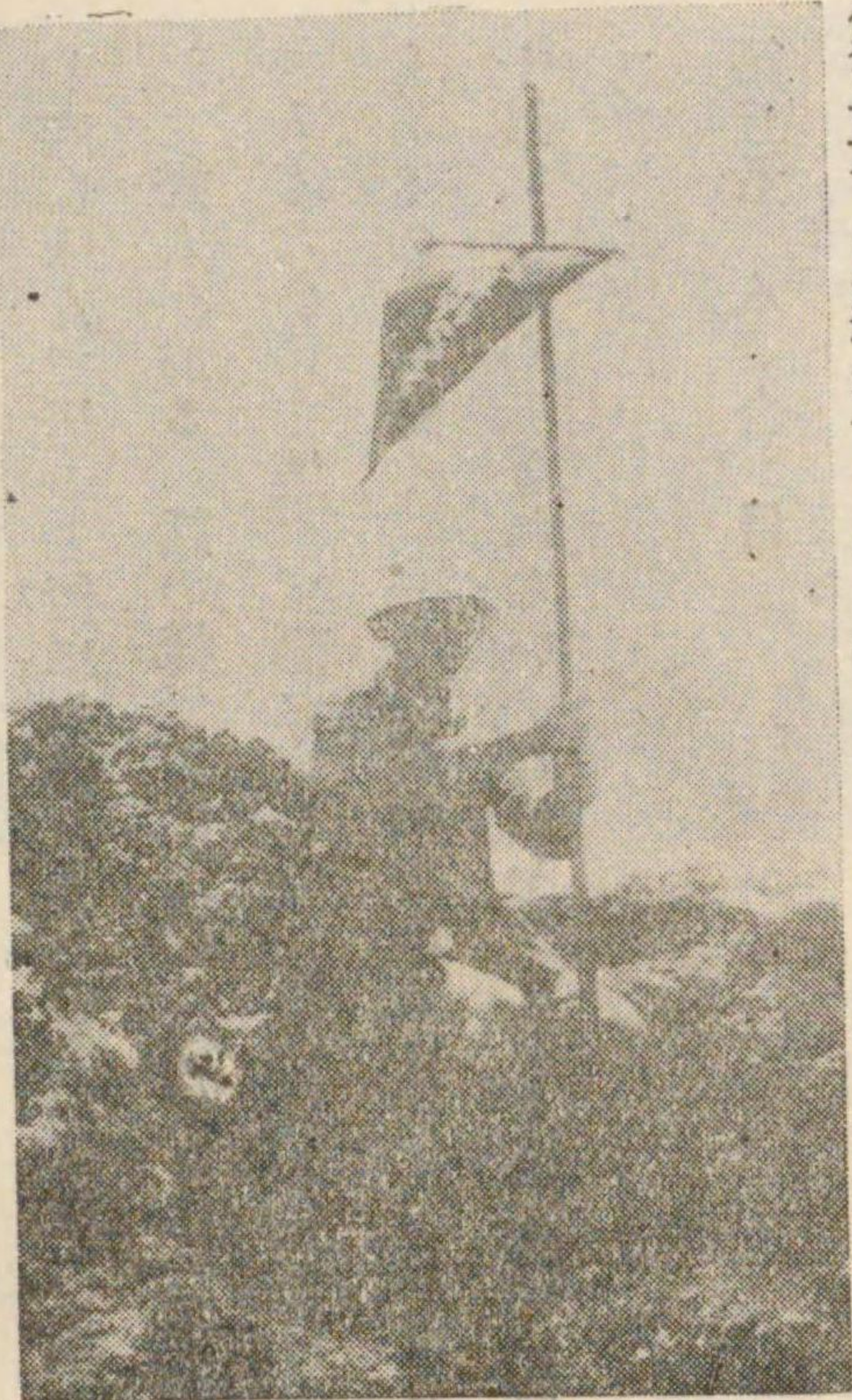
第二景 富士吉田町(不眠の町)

電車から下車すれば夜半とは云へ電光映く賑である、賣店は軒を並べて支度品を賣るに燕の如くさへする。

霧が下りて山も見えず雨の様に感じられるが警察の前に来れば五合目以上は晴れと掲示されて居る。旅館は満員である。昨夕着いて熟睡休養して早朝登山する積りの客も隣室の騒ぎに一睡も得ず早や零時には支度にかゝる、かくて夜半に總動員だ、客も眠らないから旅館も雜貨屋も食料品屋も不眠の活動だ、まあ一ヶ月位はかうして働くの

もよからう、進んで淺間神社へ參詣すれば、社務所の人や夜の零時近くなのに社殿の賽錢を掃き集めて居る、神社でさへ夜中迄かく多忙である、一般町民は朝迄寝る間はない。

第三景 馬返(車と馬の接目)



旗會が我るへ嶺に頂山

淺間神社裏からポロ車六人乗へ十人以上詰込まれ馬返へ着、馬返と云へば馬が返る様だが昨年からは自動車も返るから車返と改名すべきだ。馬は馬返しより五合目に到り

て歸る、馬の背に乗る者は婦人が多い馬子にも女が多い、一合目より五合目の針葉樹の間を月に照らされて夜露をうけながら登るのもよいがこの馬共の御馳走の臭氣で山道は興がさめる。

第四景 五合目茶屋

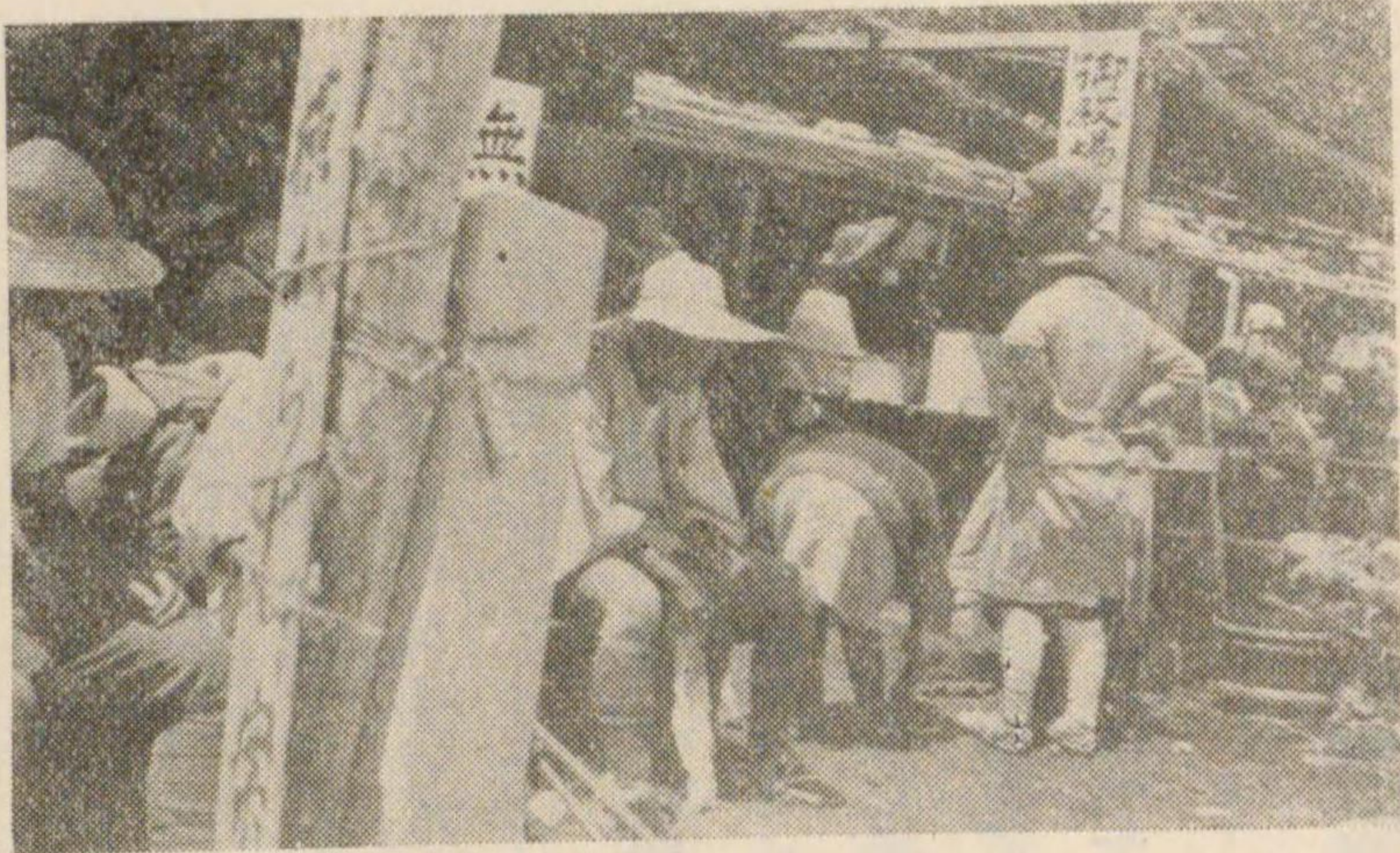
四合目迄は難なく登るが五合目となると一寸休み度なる、未だ夜は明けない、麓は霧に圍まれてるが月は西に傾き星は天の河附近に澤山見え東の方は明るみかけてる。茶店に休んで居ると傍に生後八九月の乳兒を手に抱へてる三十歳前後の浴衣姿のやつれた婦人が居る、話の様子では芝居に子供をつれて行くと同じ事で留守に預つて呉れる人もないので連れて來たらしい。四合目と五合目の間、五合目と稱する茶店の九つもあるのには驚く、一つが眞物であとは皆インチキらしい、これが休む毎に一人茶代十錢宛ではやりきれない。これをリーダーは五錢に値切て去る、富士登山には商賣のコツが必要だ。

第五景 八合目

五六合目より鼻先に見えて歩くと中々ある、夕方から頂上目掛けて登つた者や、寝ずに登つて來た人が御來光を仰ぐべく七合目八合目に集る。八合目は正に富士山の銀座四町目と云ふ形である、勞れた足は先づこの附近に止る。

六合目からは溶岩露出して足は進まず、若い妻君を半ば背負つて登るものあり、腰

に綱をかけて引上ぐるあり、子供をリツクサツクの上へ猿廻しの如く乗せて先を急ぐ



砂走りにかかる彼女達

あり、路傍に生氣を失つた顔をして倒れるあり又反對にトツプを切つて元氣よくかけ登り、振りかへつて後より青くなつて續く男連を嘲笑して居る女學生もある、昭和のガツチリした異性をウツカリ山などへ誘ふやさ男は、此嘲笑をうけぬ様にしつかり頼む。

第六景 頂上

青黄色の顔をして八合目と頂上の間で倒れ虫の息で居た人も頂上に着けば急に元氣になる、そこで金明水から劍峯廻りと慾が出る、金明水一杯十錢を越えて、愈々本島第一の高峯劍峯の頂上に立つても、霧があれば何にも見えない、

羽衣の松から伊豆半島も見えたと云ひ度いがそれも見えないから大宮口へと急ぐ即ち

浅間神社奥の院である、神社の中で富士登山の御土産と記念繪はがきはこちらですと大聲を上げて販賣能率百パーセント發揮して居る。山は高く俗界を超越して居るが富士山の商賣人は誠に下等のが多い様だ、靈峯富士も之を如何ともし難いと見える。頂上で午睡中の人は中々多い、霧が多いから展望がきかないが若い婦人は登山記念として總ての知人に記念はがきを書くに大多忙だ、その傍に男連は大いびきの姿、

第七景 砂 走り

絹のドレスの白靴の婦人、背廣に半靴の輕装紳士も愈々砂走りとなると中々珍しい武裝をする。海水浴帽にスエター、靴下に縋帶で作つた白ゲートルで脚は太いのが益々太く見える、足には二足の草鞋をしばり付け全く判じ物である。走り出す姿を下から眺めればスカートは帆の如く風を孕んで舞ひ上りドロースの脚だけが山を下る様に見える。此經費一人當り五圓七十五錢。

東北の名山飯豊山へ

期日 八月八、九、十日の豫定

集合 七日午後九時上野驛

發車 午後十時二十分

下車 八日午前七時二十六分山都驛

行程 飯豊山は山形福島新潟の三縣にあつて、羽越山脈の南にその雄峰は聳えてゐる。山都驛から、一ノ木川に沿ふて一ノ木迄約三里自動車の便がある。一ノ木から

川入まで森林軌道に沿ひ約二里半、川入から小白布澤を廻り、地藏岳の尾根に出て

尾根傳ひに三國岳を経て山頂迄約三里であるが、途中は所々に休泊所が出来て居る

頂上には飯豊山神社奥社並に社務所があつて泊る事が出来る、山腹は大原生林に包

まれ谷深く山頂附近は草本帯で高山植物に富で居る。頂上からの眺望は雄大で東に

吾妻連峰、東南に磐梯山猪苗代湖若松平を望み西に新潟新津新發田の市街と羽越平

原を俯瞰し日本海の青碧に浮ぶ佐渡島、北東間近に朝日連峰の山地が指呼の中に雄

偉な姿を見せて居る。

歸路は登路を降るか或は何れに取るか時間と天候の様で極める事にする。

山都驛

一ノ木川

小白布澤

地藏岳

三國岳

地圖 飯豊山、大日岳、加納、喜多方、野澤、新發田
用意 普通登山の仕度

東北の靈峰飯豊山へ（紀行）

藤 義 生

第一日

山都發七時半、一ノ木八時、八時半川入、十時半不動小屋、十一時—十二時、地藏山二時十五分、劍ヶ峯三國山、三時四十分切合小屋、五時十分着。

信仰の人々を乗せた數臺の自動車は一ノ戸川に沿ふて走る、空は晴れて僅に白雲のたなびくのみである。

軒高く尖鋭な屋根、廣き座敷をがらりと開けて、飯豊山參拜者御定宿の大文字をかゝげた數軒の旅館の間を走る、己に飯豊祠遙拜所のある一ノ木村に入たのである、つき當りの地藏堂に車をとめて附近の民家より強力を物色して中村美作なる屈強の若者

を選抜する。一ノ戸川は次第に溪流の美を現はし黒森山（土地名丸山）は行手に大きく控てゐる。黒森山を後に見る頃には左手に龍の山大花山の岩壁は凄く越後の岩苔取りがあつた。あの岩から落ちたとか、向ふの岩影からよく熊が顔を出すとか俗離れの話が出てくる。

十時半川入の寒村に入る村はづれの木賃宿に腰をおろして一休するが茶ももつて來ない。路傍の清水をくんで渴を醫した、一ノ戸川には小供が素裸になつて釣を片手に尻を天に向けて魚をついてゐる。丸木橋を渡ると地圖に温泉の記號のある所に出たが今は只廢屋と赤い鹽分を含んだ冷泉が流れてゐるのみであつた、一ノ戸川は此處で大白布澤と小白布澤とに岐れる。道は大白布澤に沿ふて居る。炎熱の下草いきれの強い田畝の道を一キロ程行くと鹽小屋の關門を通る一名十錢也の登山料をとる。昨夜來の睡眠不足と食欲缺乏は此炎熱に目も眩み想になる。大白布澤を右岸に渡ると森林地帯となつてほつとする。不動小屋に着たのが十一時冷い川水に身體を洗ひ汗にしたゝる下衣を洗濯して大に六根清淨の用意をする。一舉九百mの長坂の登りの爲めにふんだんに食事を取り大に休養して約一時間の後に出發。坂は意外の急坂に樹の根は縦横に露

出して居る、下十五里の御宮迄を樹の根坂と稱して居る。中十五里あたりより磐梯山の峻峯が現はれる、西大嶺西吾妻は雄大なスロープを曳て居る。上十五里を経て笹神社小屋の館湯に咽喉を濕して一休する。三國岳及劍ヶ峯の嶮岨な岩壁には先發の白衣



山 神 様 の 横 顔

の人々の登つて行くが蟻より小さく見える。長坂は石坂の尊稱を與へられて地藏山迄石のゴツ／＼の歩き悪い道となる。頂上血の池には小屋が二ヶあつて宿泊の便があるが

二時十五分一氣に通つて劍ヶ峯の難所にかゝる。岩は馬の背の様になつて殆ど直立し、兩岸は千仞の谷に望み然も岩は砥の如く滑かである、此行程の最難所である。

三時十分三國岳箸の王子の小屋着、此處に始めて西岳、大日岳の雲霧の中に隱見するを認め且つ雪田雪溪の壯觀に狂氣の様に喜ぶ。此頃より雲霧の去來劇しく遠雷の響

を傳へるが、此壯觀に元氣は旺盛となつて蜻蛉の群集する中を足を早めて急ぎ、菅原

神社も過ぎ、種蒔山は右に雪溪の上を巻て賽の川原に出で丸いピークを越ゆると、下に城廓の如く土堤と樹木に圍はれた切合小屋が見える。

此小屋は米澤方面より地藏岳を越てくる道と合さる所で切合せの小屋と稱するのださうである。小屋着六時十分。靴をぬぎ汗にぬれた下衣を更へ始めると、篠つくとか盆をくつがへすなんて云ふ生やさしい形容ではとても足りない豪雨がやつて來た、雷は上にも下にも鳴る、家根の間からは猛烈な光が流れ込む、先着の人達は何やら拜み出す、小屋の親爺曰く今夜は雷が騒ぐらしいと、此場合諸君の心理状態にてり合せて思は



大 日 岳 よ り 西 岳 を 望 む

す噴き出してしまった。

雨は七時頃上る、空は星が見え始める、遙か東北に火がかすかに見える、米澤市か北方遠く星雲の如くまたくは山形市か、夜は焚火の周りに其儘とぐるを組んでのこる寝、何か襟のあたり足のあたりをむづ／＼散歩するので少なからず閉口する。

第 二 日

草履塚一九〇八m四時五十分、姥堂五十八分、御秘祖塚五時廿八分、一ノ王子五十分、三ノ王子社務所五十五分、六時半、飯豊山二一〇五m△點四十二分、西岳七時廿五分、大日岳九時、十時十分、西岳十一時廿五分、社務所十二時半、オソ一塚一時十五分、切合小屋歸着一時半、二時半出發、御坪山三時十分地藏岳前ピーク卅分、八點五十七分、鍋越山岐四時十分、御田一〇四〇m四十分、大日杉五時十分、卅分、白川葡萄澤合流點六時廿分、嶽谷六時五十分、上岩倉岐道七時半、高造路七時四十分、岩倉橋五十分、伊藤方八時。

午前二時半薄寒くなつて目を覺す、小屋の人達は食事の用意を始める、三時半頃には下の小屋に泊つた人々が、提灯片手に景氣よく挨拶して通る、我等も四時半に出發する、空は晴れ渡り、東天は紅く、御來光も眞近らしく見えた、雪田の上を通つて一

九一〇m草履塚に登ると御來光が現はれた、姥堂、御秘祖、御前の各御宮を経て東方の最高點一ノ王子二一〇〇mの石に疊まれた絶頂に立つ、三ノ王子飯豊山祠は目前に三角點飯豊山本祠は西方遙に聳てゐる、御西様と稱する西岳は豊圓な容を、大日岳は牛首山の尖鋭な峻峯を伴つて堂々と聳てゐる。雪田と雪溪は益々大きく壯觀である。道の高低は之より少なく二の王子の小ピークを過ぎれば、一の王子と同高の三の王子の本宮に出る、御宮は周圍を石で疊み、入口を江戸城の各門と等しく屈曲して風の進入を防いで居る、北方は遠く鳥海山、續て月山、大朝日連峯は手に取る如く、東は吾妻連峯、磐梯山は朝霧の中に隠見し、南は那須、日光の諸山は糢糊としては居るが連る様がよく見える、西南には上越國境の山、淺草、平門岳、其奥に大きく根張るはなつかしき平ヶ岳中の嶽等の雄容である。西方遙に紺青の波を打つは、妙高連峯か、北アルプスカ。佐渡ヶ島は雲の彼方に浮び、信濃川か阿智野川かの川原は白く平野の中に赫てゐる。

金五十錢也を奮發し三人分の名前を連ねて家内安全旅運長久を神主に依頼して飯豊山奥の院の三角點に向ふ。頂上には二一〇五mの礎石があるばかりであるが、西岳より

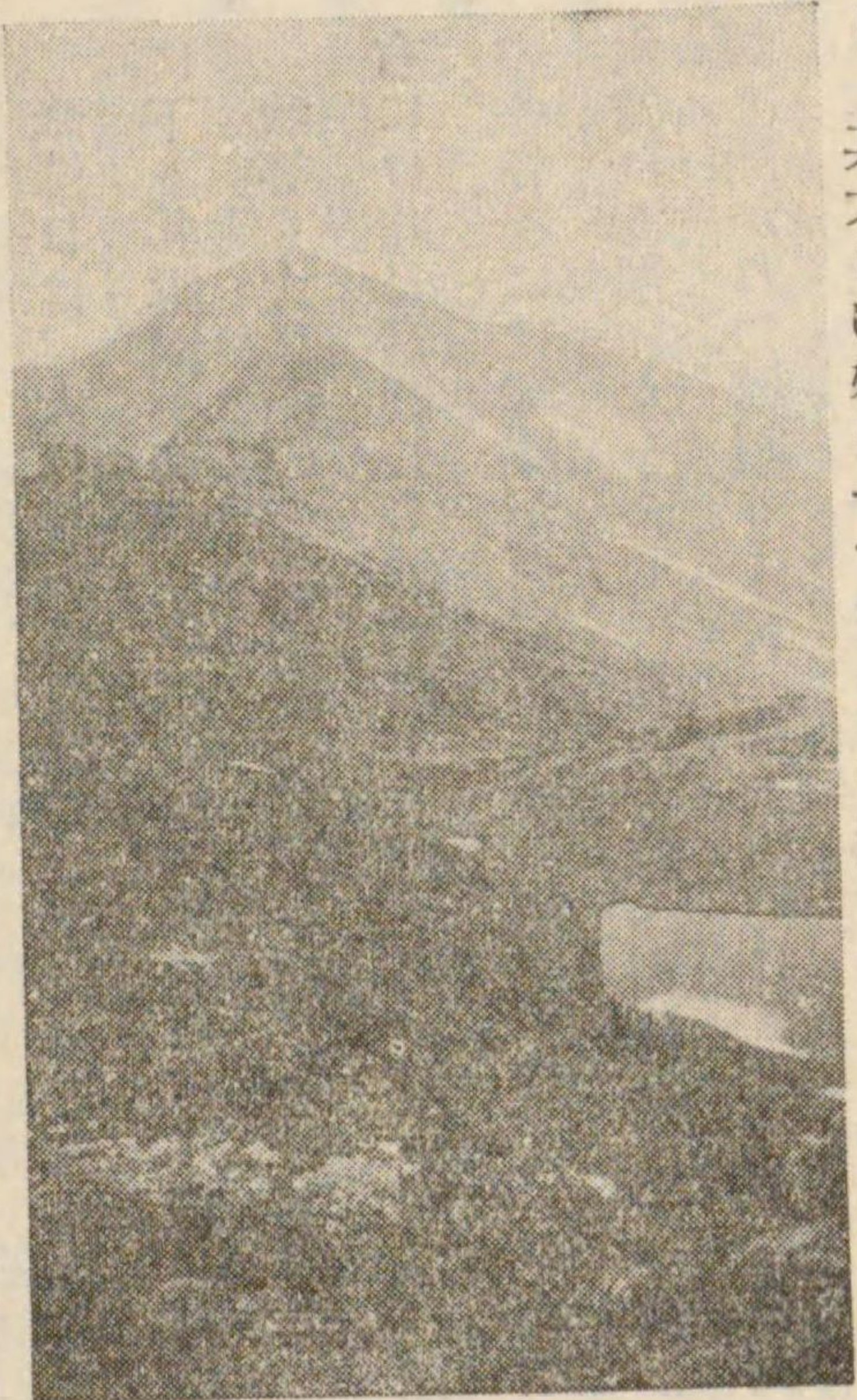
北西に走る烏帽子岳「二〇二四 m」地神山の尾根には雪がべつとり着て居るのが見え始めた。三角點より尾根を西岳に向ふ、始め小徑があつたが間もなく藪の中にけされ、朝露深き藪の中を少時さまよつて尾根の南側に出づれば、藪もなく茅戸の中に本道を發見する、總て飯豊山より大日岳に到るには迂回しても全部南面をへつるがよく、北面は松根曲り、なゝかまどの密生に身動きも出来ない、十數の雪田を渡り縷の如き徑を手繰る、雪の消た草地には高山植物の色取りふの花は今を盛りと競ふて居る。大日岳の登りは一寸急であるが草地で歩きよく、案外早く頂上に出られる、頂上は東西に延びた狭い頭で其西よりに金網に包むだ黄銅製の立派な鏡がかざつてあつた、西岳尾根より下る加治川道は嶮岨の話であるが、烏帽子岳の中腹を蜿蜒と巻て行くのが見える、飯豊川の上流直下二百 m の斷崖の上の道は所々赤いガレを現はし雨後の危険を想像させる、振り返て飯豊山は一の王子と本岳とが左右に聳えて富士形をなし各谷々には全部雪を以てうめて居る。先輩諸氏が雪溪の發達は日本一と稱して居たが我等の通りしものにては數十を數へる程であつた。

食事をすませながら、所々方々を眺めて一時間後に出發、歸路はさすがに早い、

日は已に高く温度は上昇して雪溪の誘惑に陥り、尾根を越す毎にある雪溪に出では、シロップだ、パイナップルだと腹をがぶくさせて本祠に着たのは十一時半、社務所では朝の雑沓に引換て神主が二人爐を圍んで胡麻の入つた甘い蜂蜜餅を焼て居るばかり、其大きい奴を一つせしめて路を追ふ、御秘祖も草履塚も小屋の主人の挨拶を後に

切合せ小屋に歸つたのが
一時半。

早速温い飯をたら腹つ
めて山を下る用意をする
歸路に同じ路を行くのも
つまらなく、加治川道は
一等嶮岨で面白相である



大日岳尾根より上頂を望む

が、一日か二日は夜營をしなくてはならなく其準備なく、山形道は餘り北に行き過ぎる、彌平四郎口は面白くないと云ふので米澤口に道を取る事に一決したのであるが、強力も未だ歩た事のない不案内の山道、唯地圖をたよりに五里の路、夕方近くなので

足によりをかけて出發する、切合小屋は此登山路の中最も景勝安全の場所をしめ、小屋も大きく休泊所としては上の方である、位置は種蒔山と草履塚との鞍部にあり、直下には大雪溪があつて水の便が充分である。

米澤口は、大目杉から地藏山でない一五三九m地藏岳に出て御坪山より御澤の雪溪に下り其雪溪を切合せ小屋の直下迄登れば小屋の用水の道と合すのである。

我等も大又澤の上流御澤の雪溪を約二十分下つて地藏の尾根に取付き御坪山に登る右には昨日奮闘した地藏山より剣ヶ峯が凄い形に、左は一の王子より草履塚、種蒔山の各谷々には雪溪が何處迄も長く延びて居る、一の王子には雲がかつた、大又澤の水音は雪解け水を合せて囂々と傳へられる。御坪山より地藏岳の尾根は米澤營林署の切り開かれた道頗るよく、其上山都口と違つて樹根坂、石坂剣ヶ峯等の尊稱のある所もなく、土やわらかく足あたり非常によく少し記録でも取つて居るとどん／＼と置いて行かれる、只此尾根の缺點は、小屋が一つもない事が何よりをしく思はれる、地藏岳頂上近くの谷に相當の雪田があつたので、最後の雪として手拭に一包して持つて行く。地藏岳には立派な小屋の跡があるが今は全く用を爲さない、切に復舊を望む次第

である、此處から大目杉迄一舉九百mの下り、中途鍋越山を経て羽前津川村に至る分岐がある、標に左津川村に至る一萬m、右中津川村に至る七五〇〇mとある。

長坂は千四百m御田の小平地には石垣の跡があり、水も探がせばあり相に見えた、此小平地の外は急天直下の尾根道、垂直に近い懺悔坂を下ると、徑三mもあらんと思はるゝ大杉の切株がある、之が大目杉の跡である、附近には日光の並木位の大杉が三四本あつた。時に五時十分此處の谷川に汗を流して各自の嗜好品を陳列してメートルを上げる、後は平凡な谷川道になつて飛ぶ様に進む、葡萄澤の合流迄五キロ、未だ明るい、二三の牧場の小屋を通つて嶽谷が約七時未だ明るい、村人は異様の風體の人等を長閑な顔をして見て居る、文明のあらゆるものより遠ざかつた此部落、玉庭の自動車發着所迄六里、自動車を利用して一時間で羽前小松、それから米澤市迄行かなければ活動も見られないので、未だ此村には活動を知るもの極少數であるとか。

上岩倉を左岸に見る頃には足元少し暗くなる、高造路迄我慢して漸く各自の電燈ラントンをつける、螢はすい／＼と暗の中を飛びちがひ、疲れた人々を勞はる様に思はれた、七時五十分今夜の宿舎にあつべき岩倉村の入口岩倉橋に着く、村の入口の家に

當村長(今夜の宿)宅をたづねると、直此先だと云ふから幾何位あるかと言へば、左様八九町はあるだると。

重い足を引すりながら村長宅に着たのが八時少し過ぎであつた。養蠶に親しむ家人を漸く納得させて座敷を開いてもらふ、十疊に十二疊のぶつ通した、豪勢なものだが今夜は風呂を沸かさないと云ふので、前の白川の清流に汗を流しに行く、前と稱しても二三丁はある、素裸で肉體美であるのや、ないのやが四人行列して行く、日中と違つて雪溪より落ちくる此白川も殊更に冷い、眞暗の中、深い所へすべり込むだり、ぬかるみへ這入つて折角きれいにした足を泥だらけにして豆を踏つぶした足を引すりながら歸る所などは決して親になんか見せられた容子ではなかつた。

極度に空になつた腹をさする事二時間、黒塗の膳に黒塗の椀が四つ乗つて此家の十六七の乙女が運でくる。一の椀にはやまめ、一にはかじか、一は豌豆の味噌汁、それで人夫の爲めに酒を依頼した處、焼酎しかないので、之を共にくむで聊かメートルを上げて此行の成功を祝した。

第三日

岩倉四時發、下屋地四時四十分、上原切通五時十分、菅沼鎮守社六時、四七三_m下清水食事、六時四十分、七時十分、塚田七時三十五分、玉庭村湯田ノ自動車發着所八時十分、自動車發八時四十分、羽前小松發十時四十五分、上野着午後九時四十分。此經費一人當り十三圓五十九錢。

中山道六十九次驛路の旅(第二回)

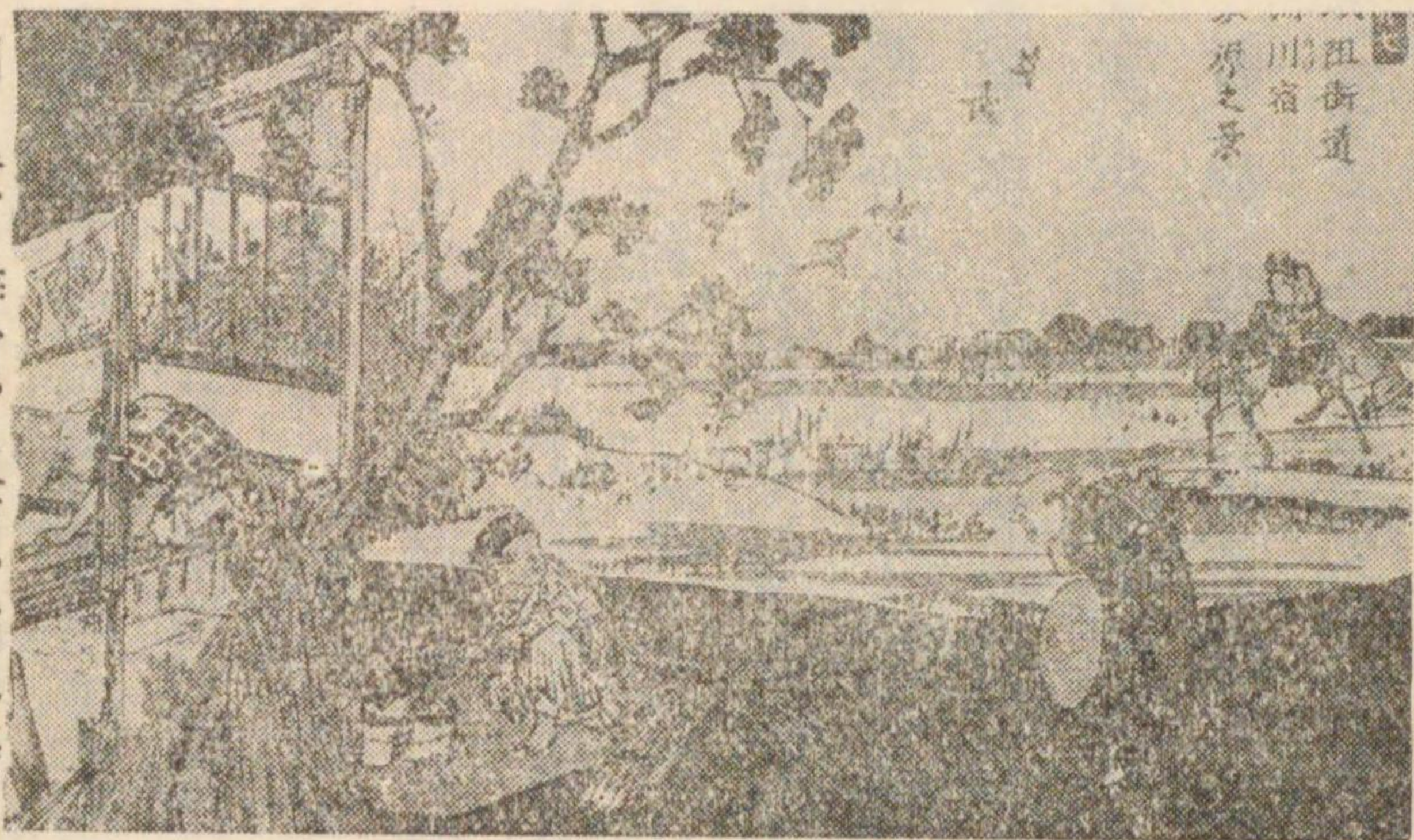
上野驛	期日	八月九日(第二日曜)
上尾驛	集合	午前六時四十分上野驛
熊谷	發車	午前七時五分(新潟行)
	下車	上尾驛午前八時七分
	行程	第一回は道草が多くて豫定通り進行せず、今回は暑氣の折ゆる少し早く出發する、今度は熊谷迄の豫定なれど、大宮熊谷間九里半は中々つらい。そこで、上尾驛へ途中下車して、郵便局でスタンプを頼み、別に見る所も無けれど紅花の産地な

桶川 鴻ノ巢 勝願寺 箕田村 久吹下村上

八月

二六六

れば尋ねて見、次列車八時四十八分に搭乗、八時五十四分桶川驛に下車、淨念寺に



古昔の桶川宿原の景

賽して前進、鴻の巢に着き、宿の中の關東十
八壇林の一なる淨土宗勝願寺に參詣する。宿
より三十町許行きて箕田村路の右に八幡宮あ
り、頼光の四天王渡邊の綱が出生地にて傍に
碑あり、綱は武藏の箕田の者と云ふは此地の
事なり。間の宿吹上を通り、久下村より熊谷
土手にかゝり、熊谷に着き、各所を見物する。
歸路 午後五時廿八分熊谷驛發七時上野歸着
解散の見込
天候 不拘晴雨
地圖 二十萬、東京、宇都宮、五萬分、大宮
幸手、熊谷

用意 辨當、水筒、雨具等

中山道六十九次驛路の旅(紀行)

喜 多 八

第二回

秋來ぬと眼にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる

八日午後九時半臥所に入り、あと十五分で立秋の節に這入ると氣がついて、扱今年
は太陽が戸惑ひして、七月中は殆んど顔を見せず、其代り今月になつてイヤハヤ照る
はく〜てりつけるは毎日三十度以上の暑さ。此の炎熱にもめげず、明日來る人は誰か。
U現場監督は鐵道省の用で樺太から北海道を巡り、歸りは十和田へ寄つて十日の朝歸
るとの便りなれば間に合はず。K氏は是非來月から參加させて呉れと云はれたが、此
暑さでは老人には來られまい。重ちゃんは、途中チヨイ〜乗るんぢや詰らないぞと

八月

二六七

通がりを云つてたさうだが、情ない通だな、昔の人だつて草鞋ばきでゴシ／＼歩いてばかり居やしない、馬の背も借りれば、雲介の脚も使つた事を知らないんだらう。つまり強がつて御免を蒙る口だらう。其外指を折つて見ると、先づ四五人は大丈夫。エ、また蚊が来た、ヤ、蚤も居るぞ。

蚤一つ貞女に帯を解かせけり

夏の夜は蚊を疵にして五百兩

昔の人は斯ういつて一刻千金の春の宵を、半値に値切つて夏の相場を極めたが、五月蠅さい蚤だ、蚊だ。所で一句。

夏の夜や、エ、憎らしい蚤め、蚊め

蚤は腰の廻りに這ひ、蚊は耳の邊りに飛ぶ、追へども去らず、拂へども来る。五百兩／＼と何時か眠におちて眼覺むれば四時過なり、朝の日課そこ／＼に出かけ六時半上野驛に着く。誰も見えず。其内天楓子白鴨仕立で乗り込む、彌次さんも来た。兩君とは舊知の秋田氏、昨日迄伊東に在りたるが、今月より参加とて、昨夜歸京されたばかりなりと。選りによつて暑い今月からとは、勇氣の程恐入るの外なし。其外には姿

を見かけねば車中の人となる。日暮里で吉川君、赤羽で桃太郎さんと頭目子乗り込みこれで同勢揃つたとまん談ははすむ。上尾に下車して郵便局の御厄介。往來に繋いである荷馬車馬の鼻を撫で、居ると

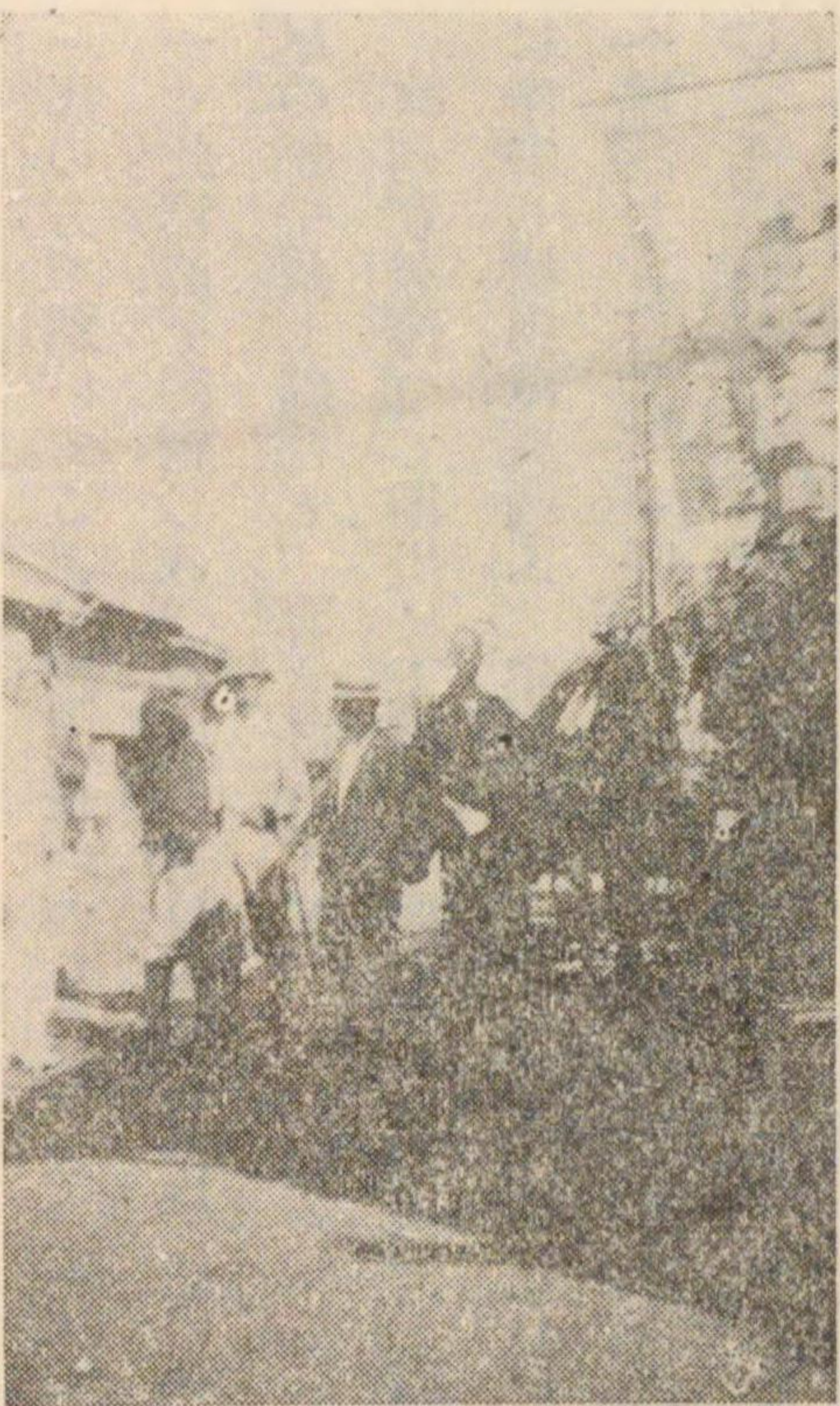
「オイ比べてるのかい。

「馬の方で驚いてるよ、馬鹿長いつらだなアツて。

一寸此寫眞を御覽じろ。桃坊の茶目が頭へ會旗をのせた馬の傍の喜多八の様子を。上尾の松平長七郎だと、専ら好評です。

次列車を待つて桶川に下車して淨念寺に參詣す、慈覺大師作の子安正觀世音を本尊に奉安し境内涼風通ふ。集印連方丈を煩はせば。石戸の蒲櫻へお出なさいと自動車屋へ電話して自動車を呼んで下さる。御厚意に甘え麥湯の接待に預り、妻君に敬意を表して車に乗る。桃太郎坊助手臺にあつて運轉手君に奇問續出、到頭、櫻が咲いてるかいで、運轉手君眼を白黒させる。何にせよ此暑中櫻見物に行くのが既に正氣の沙汰でなし、キ印と見る方が御尤なり。櫻見物終つて天楓子は正午から用ありとて其車で、あとへ。残りの一同北本宿驛さして行進を始める。途中トマト工場あり、此邊一帯ト

マトの産地なれば、生産したるものを蒐集して加工販賣し、價格の變動を防ぐといふ趣向なりとぞ。私設農事試験場長倉本閣下の是非御來臨を仰ぐ所なり。氣がついて見れば成る程諸所にマトがぶら下り居り我庭のより慥に上出來なり。北本宿驛より更に前進せんとしたるに、



上 頭目子數日來の下痢を押
尾 して出掛けたる爲め疲労
宿 甚しければとて、こゝよ
に り歸京さる。扱驛前より
て 本街道に出で、フト後を見れば
見れば楽しみにしたる松

並木はあとにあり、一寸近道したばかりに大事の物を見落したり、今更ながら、行くに小徑によらずの戒を想ひ出さる。

處で街道の暑い事、前に出してある、古昔の桶川の曠原其儘なれば日陰更になりし。彌次さんと拙者はソレ晴に好しといふ洋傘をさせば背中の中の焼きつく事もなければ

帽子一つではたまつたものにあらず、飲みたくも水はなし、やう／＼鴻の巢の宿にかゝり、最早正午なれば何處かで晝飯と尋ねれど、これがまた食ひ物屋は更になし。腹はへる頭はぐらく／＼眼はちら／＼今にも其處に倒れるかと思ひしも、やつと勝願寺門前の一茶亭の看板に、ひも川とあるを見つけ、飛び込むや、氷／＼と謔語なり。一杯の氷に人心地つき、井戸端で顔を洗ひ、饅頭を腹を充たし、勝願寺に参拜す。

勝願寺は、所謂浄土宗關東十八檀林の一なり。十八檀林とは徳川家康が、彌陀の十八願に擬し、松平に因み十八公の盛運を祈らしめしと稱すれど、實は天和年間（五代綱吉）以後に至り確立せしものゝ如し。十八の内御馴染の寺を列擧すれば、傳通院、増上寺、幡隨院、靈巖寺、鎌倉光明寺、太田大光院等なり、其外下總飯沼の弘經寺は祐天上人在住の砌、累の怨靈を解脱せしめたるにて有名なり。

墓地内に、伊奈半左衛門の墓あり。半左衛門は、鴻の巢の領主にして且、關東御郡代として有名なる爲政治家なり、中にも農村の子弟の遊惰に流るを恐れ、其管領地の若衆を集めて、今日江戸の祭禮に無くてならぬ馬鹿囃子を創始し稽古せしめたり。喜多八も道樂の一つとして習得したれば、創立者に叩頭し、お蔭で道樂が一つ餘計にあり

ますと厚く謝意を表したり。

寺を辭して箕田村に向ふ。時に一時半を過ぐ。暑さは彌益しに募れば、河童の頭の皿に水が無くなつては大變故、氷店を見つけては飛び込み、辿り／＼て渡邊綱が出生地、箕田八幡神社に着く、三時半なり。何の事は無い、丁度暑い盛りを歩いた譯なり。參詣して社前の茶屋に憩ふ。

此渡邊の綱が出生地は、芝の三田の綱町と、兎角に間違はれるが、淨曲一中節の中には、獨武者と四天王の戸籍調がチャンと出來てる。左に其文句をお目にかけてやう。

頼光衣洗の段

作者 近松門左衛門

へ御説にや及べき生國はかはれども冥途の道に二つはなしへ保昌は上總の國海上の生たりへ定光は信濃の國薄氷の生へ季武は遠江濱名のうまれへ綱は武藏の箕田の者へ扱公時は伊豆の國とは申せ共、生所もしらす宿もなき山姥が子なれば産所も山、産室も山、最期所も山なれば損徳なしの元／＼(下略)

星霜押し移り、雲霞既に古びたれど、大江山に立てし勳しは千古不滅なるべし。

茲に一大椿事出來せり。茶屋のかみさんの注進によれば、貴方達のお連れさんが、一時間も此處にお待ちでしたが、待ち草臥れて熊谷の方へ、さつき方出掛けました。



上右 箕田八幡神社。下右 石戸の櫻。
上左 桶川宿にて。中左 勝願寺。
下左 熊谷寺。

何んでも今朝熊谷から鴻の巢へ行き二三度往復して探してる様ですとの事。ハテ誰だ

らうと評議すれど見當がつかず。此先の行田街道の追分の處に乗合自動車の發着所があります、事によると未だ其邊かも知れません。ソレ急げと皆一同に馳け出し、其の待合所にて聞けば同じ様な事故、折から來たりし乗合をキャッチして、熊谷さして一目散、吹上を吹き飛ばし、熊谷土手も素通りして熊谷郵便局前にて車を捨て、スタンプを頼み、彌次さんフト窓から表を見れば、稲葉君が歩いて行く。オイ、稲葉君、ヤレ好かつた。追かけた甲斐があつた。これで出面八人となる。打揃ふて縣社高城神社より熊谷寺に賽す、五時過なり。時に彌次さん、かうもあらうか。

歸るにはまだ日が高し熊谷寺（夕刻時）

ナンダやつと洒落が出たな。併し此儘歸るは勿體ない、第一、此次の旅程作成上都合がわるい、モウ一とのしと自動車にて、深谷迄のし切つたり、途中、一里塚の榎、右側の畑中に只一本、いと高く聳え、左側には丘のみ残り。深谷の宿に入る手前の杉並木は實に見事なもの。豫備知識なきを悔ゆ、知りたらば車中より瞥見せず、手前にて車を捨て、歩きし者をと臍を噛めど詮なし。深谷發六時三十九分七三〇列車にて歸京の途に就く。車中談に、今日は暑かつた、勝願寺に着く頃は全くへタツタよ、鴻の

巢では大通りに料理店も、蕎麥屋も見つからないがと、話の末に、奥の細道は大分共鳴者があるから、此次は、ブラ、歩るきの芭蕉のあとを行く事にしやうと定めたり。今回の經費一人當り金二圓七十錢

信仰の山木曾の御嶽

期日 八月十六日（第三日曜）

集合 十五日午後三時半飯田町驛

發車 午後四時二十五分

下車 十六日午前二時九分木曾福島驛

行程 北アルプス南端の雄峯で南腹に三笠山を抱き中央の火口丘には西に繼母嶽東南に王瀧口奥ノ院があり、その間に最高峯劍ヶ峯がある、古來白衣の講中登山者頗る多く年に數萬を越ゆるのである。

福島から王瀧登山口迄五里自動車を通つて居る、王瀧村から頂上迄五里、登路を十合に分け二合目に清瀧を望み五合目に寄生火山である三笠山が見える。六合目の田

飯田町驛

木曾福島

北アルプ

三笠山

繼母嶽

王瀧口

劍ヶ峯

清瀧

黒 澤
乗 鞍 嶽
白 山
木 會 駒
南 ア ル プ
ス

八 月

二七六

ノ原に來てから稍急坂になつて偃松地帯になり王瀧口頂上の王瀧口御嶽神社がある。そこから「八丁たるみ」を行くと黒澤口の登山道と合し石段を登ると頂上に達する。山頂からは北に乗鞍嶽から北アルプス、西に白山、東に木曾駒、南アルプス等の眺望が雄大である。

歸路は黒澤口に出で七時半頃迄に木曾福島に入ればよいのである。

歸路 十六日午後六時四十八分福島發十七日午前六時十二分新宿歸着解散

天候 雨天中止

地圖 木曾福島、御嶽(五萬)

用意 辨當、水筒、雨具等

木曾の御嶽山詣で(紀行)

高 良 生

日歸りでは少し強行かとも懸念されてゐたが、一行四名で元氣よく出發。十五日午

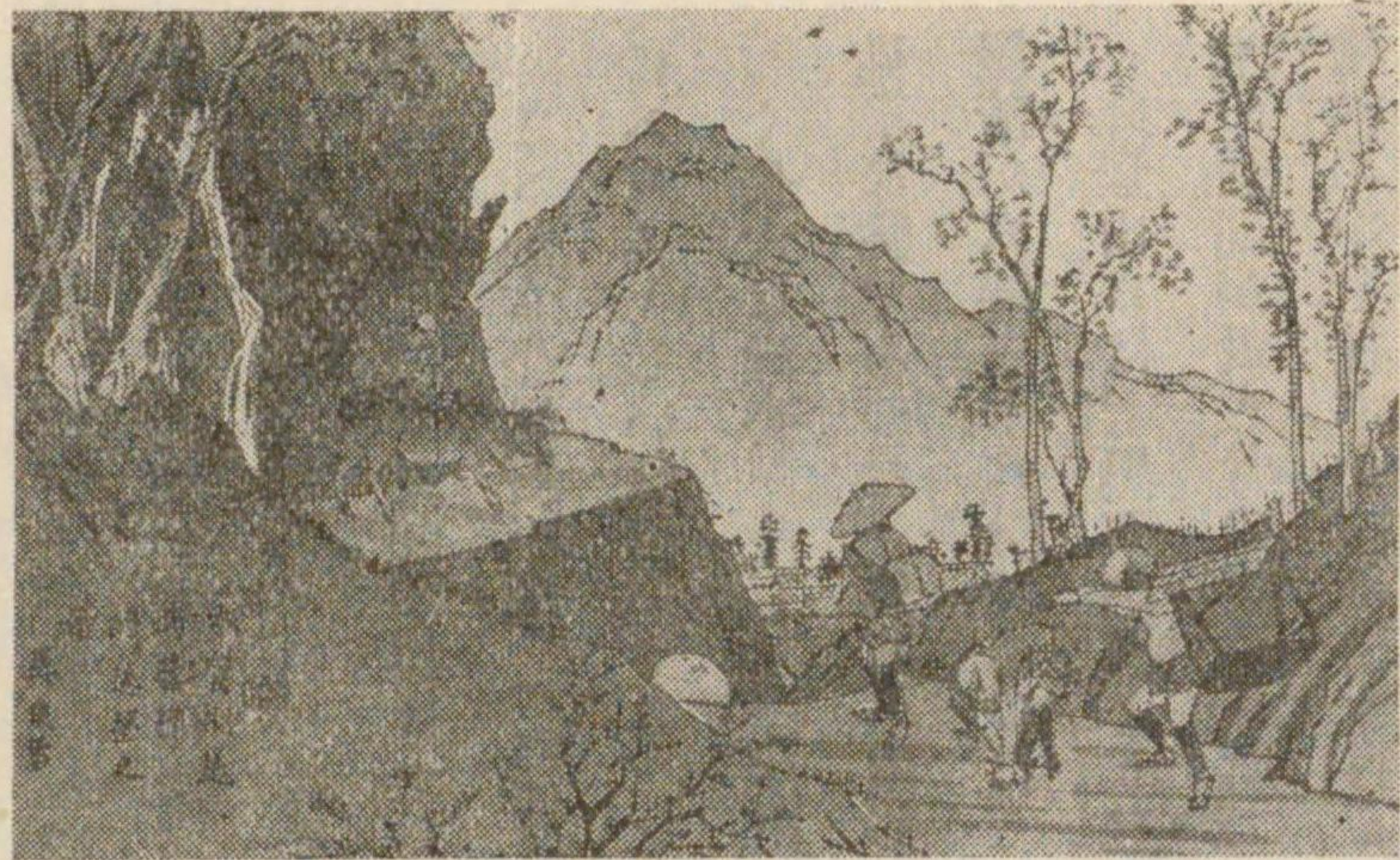
後四時廿五分飯田町驛を出て、木曾福島驛に着いたのが午前二時九分。驛前の自動車

に交渉するのに十五分もかゝる。寢入り端を起されたせいでもあらうが、富士登山口の同業者の血眼になつた様に較べると、實に雲泥の差である。

登山口は王瀧口と黒澤口とがあり、前者をとつて王瀧迄自動車にて約一時間を要した。

王瀧川に沿ふたこの左岸の道路は、黒澤口別れ道まで良く、大島橋を渡つて右岸に移ると、車は稍動揺するが大した事は無い。登路は、車を降ると右折し、又左折して山裾を廻りながらタルミ澤に沿ひ溯行するが、約三キロ許りは殆ど平坦な道である。月は無いが大石氏の携へた

豆提灯を頼りに、澤の音を聞きつゝ進む、歩みは冷氣の籠つた山道を踏み、靜かに運



木曾の御嶽山詣で(紀行)

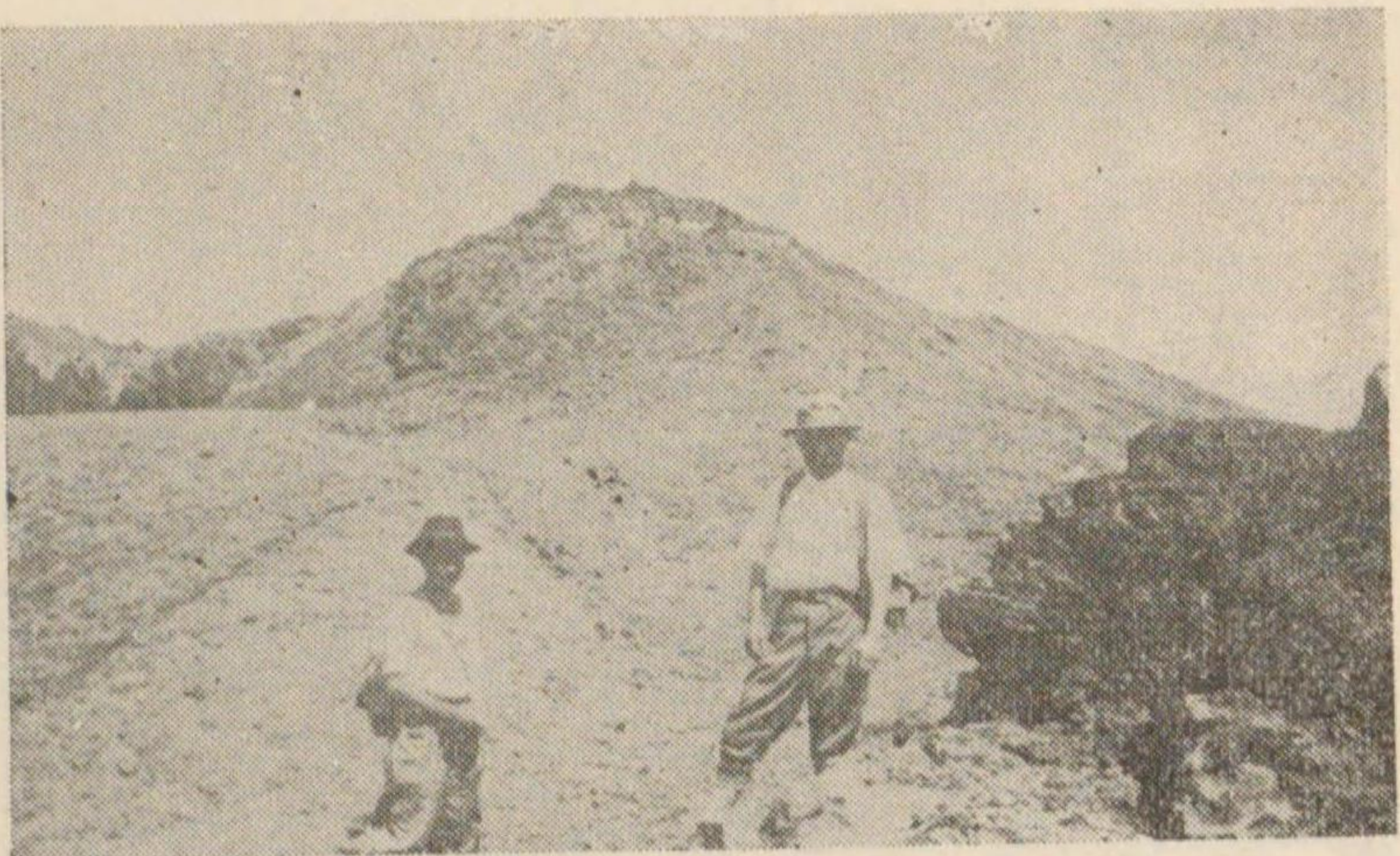
八 月

二七七

ばれて行つた、間もなく真黒な檜林の急坂を登ると、右に清瀧への別れ道があつた。丁度正五時。直ぐ上が普寛堂で茶屋がある、先着があるので見ると白衣の登山者だ。供を連れた御夫婦の御信徒衆。我々を見るとサッサと登つて往つた。此處にて軽い食事を攝る。既に明るく成つてゐるので、三笠山から頂上迄クッキリと空に浮び出した御嶽山は、我々に呼び掛けてゐるかの様である。

こゝから先黒石小屋(一六四八米)邊迄は、一面の草原で眞青に彩られた丘陵は、實にスガムしい氣持がする。フト後方を顧みれば、木會駒ヶ嶽(一九三三米)連峰が恐しく長大な雄姿を呈して浮び出てゐる。瓦斯が尠いので、紫色に染め出された山容が見事な眺であつた。黒石小屋着は六時十七分。此處で先の三人を追越して更に中の小屋着が六時三十八分であつた。

此登山口は、黒石小屋より三笠山に至る五百米と、田の屋小原より山頂に至る九百米の登高が最も骨の折れる所で、他は比較的樂である。三笠山の登りは鬱葱たる黒き檜林の中を枕木を踏みつゝ行くので單調だが、中小屋を過ぎると稍急傾斜となり樹間を通して、間々、木會駒を中心、左に蓼科山(二五三〇米)八ヶ嶽(二八九九米)連峰



峰ヶ剣るた見りよ上頂口瀧王

甲斐駒、右に赤石連峰等が隱見し、中にも我々を威壓する様な木會駒の老大な山容に魅了せられて、不知不識の内に山頂附近迄登つて仕舞ふ。三笠は北側を巻いて通過するが、此間乗鞍、穂高の眺めが良い。少し下ると田の原小屋で七時四十分である、附近一帯は、突出せる岩石の上に倭木密生せる高原で、視界豁達、雄偉老大な御嶽山容を一望に収め得る所である。こゝからは登山路も明らかに指摘されて来る。約二十分休憩し最後の九百米の登高にかゝつた。

七合目(二二四三米)に至ると、白衣の講中登山者が續々下山して來たが、中には山伏姿などあり、殊に婦人の多いのが目にたつた。流石は信仰の山と頷かれた。八合目當りに尙殘雪があり、信徒衆は各々手拭に雪を包みなが

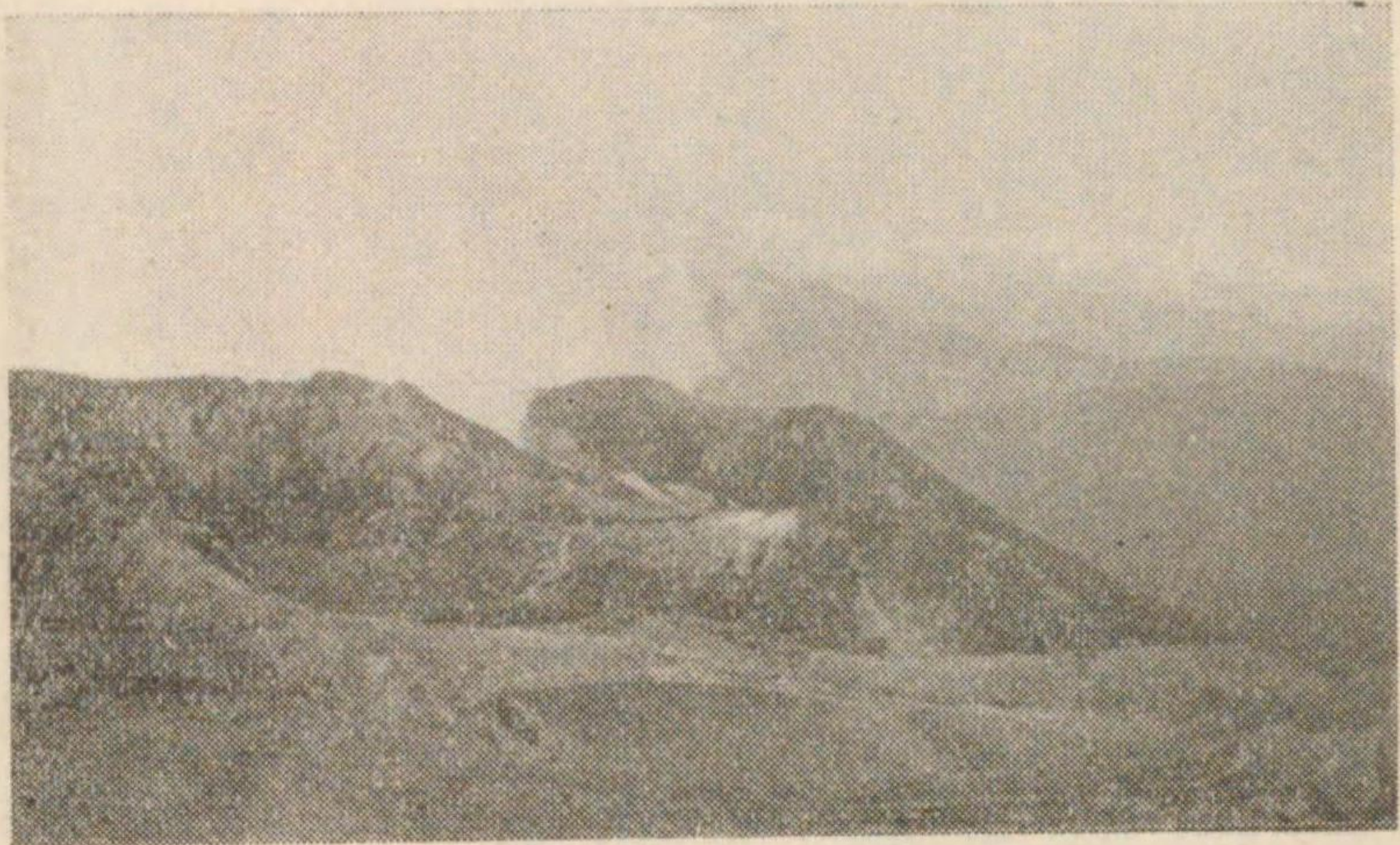
ら我々にも分配して呉れる。九合目にて少憩し、元氣を付けて頂上まで一気に伸ばせば

十時七分には山頂に立つ事が出来たが、尙最高
點劍ヶ峯の社務所へは二十分を要した。

早速神前に詣で、一家の安泰を祈る。祭神は
國常立尊、大己貴命、少彥名命を祀つてあるが
古へより、人事百般に靈驗あらたかなものとき
れ、信徒亦夥しい數に上ると云ふ。この白衣の
講社の人々で埋まつた社前は御嶽山獨特の雰圍
氣がある、これが又全山に漲つて居つた。

小屋に入て休んでゐると、窓から吹込む風で、
寒い寒い。クシヤマミが出て来る。木曾の御嶽山
夏でも寒いといふが、無理はない。甘酒を飲ん
だが旨しく無かつた。

乗鞍、北アルプス方面が展望がないので、摩利支天の方は割愛し、一の池周囲の御



劍ヶ峯より乗鞍岳を望む

鉢廻りをした。劍ヶ峯の西南に、千仞の谷が切れ込んでゐる。地獄谷と稱し、煙を噴
き出してゐる所もあるが、凄氣胸に迫り、悽慘な容貌を呈してゐる。西端に廻ると加
賀の白山が見えた。約三十分で一週し劍ヶ峯に戻り、直ちに黒澤口を下る。相變らず
講中連が押上つて来る。可愛い子供がゐるかと思ふと、赤子を背負つた勇敢な婦人も
ゐた。冠をつけた先達の聲に勵まされて、息せきせき登る講社の傍には、又一家を擧
げて御嶽詣でを念願する敬虔な信徒が緩かに憩ふてゐる姿も見受ける。

登山者を縫ひながら、三笠山の登りと同様な樹林を一氣に駆け抜けて、千本松小屋
に着いたのが午後二時十分。それより青絨氈の様な草尾根を下りながら御嶽を仰げば
その山容は、田の原小屋で眺めたよりも更に雄大で、この白川谷に沿ふた黒澤口は、
此點惠まれてゐる、登路は少し長いが多少樂である。

稍下ると石工の小屋と人家がボツ／＼ある。石工は講社の碑を刻む者だが、王瀧口
黒澤口それ／＼登山道の兩側に立並ぶ諸講碑は其數莫大なもので、正に御嶽山の偉觀
たるを失はぬが、彼等石工等の精進も並大抵ではない。

午後三時屋敷野にかゝると、道は水田に圍まれた平坦な道路となり、平凡な四キロ

餘を進んで田中に到達する。時に午後四時半、田中より福島迄は約十二キロ、乗合があつたので、これに乗つて豫定より一列車早い福島發六時廿五分に間に合はせ早朝無事歸京した。此經費一人當り十圓五十錢。

日歸りで山と海との行樂

期日 八月十六日(第三日曜)

集合 午前七時 兩國驛

發車 七時十五分 急行

下車 保田驛九時三十分

行程 驛から二軒程行つて鋸山に登る中腹に乾坤山日本寺があり、頂上十州一覽臺からの眺望の素晴らしいのは云ふ迄も無く群青の海を隔て、雲上に浮ぶ美しい富士の姿は一幅の名畫を見る様です、足弱の方でも二時間位で往復して來られますから午後は海水の奇麗な浪の靜かな保田の海水浴場で御子供様方と一所に泳ぎませう。右

保田驛
鋸山
乾坤山
日本寺

兩國驛

の豫定ですが朝から泳がるゝとも、附近を探勝さるゝとも、又此地で生れた浮世繪師菱川師宣の古蹟を訪はるゝとも各自御自由の事、保田や鋸山等平凡の様ですが御家族連れで日歸りに山と海との行樂を併せて味ふ事の出来る所は一寸他にはあるまいと存じますから御誘ひ合され多勢御參加を希望致します。

歸路 五時三十分發汽船保田發、八時三十分靈岸島歸着

注意 要塞地帯故寫眞器御斷

用意 海水着手拭及辨當水筒

天候 雨天中止

靈岸島

鋸山登りと保田の海水浴(紀行)

三 英 生

日歸りで山と海との行樂には保田は平凡らしくても實際よい處です。前半を梅雨が逆戻りした様な連雨に痺れを切らした此夏も後れ走せに襲ひ來た毎日の酷暑に水銀柱

はグングン昇る。都人士は水を追ふて海へ水へと出掛けるのも自然の理であらう、新装の兩國驛も何んのそので臨時驛を國技館に移さねばならぬ様な大變な勢ひで驛頭は斷然海人オンパレードの觀である。

朝七時十五分、一行二十餘名は大槻さんの御見送りを受けながら、一路保田へと城東の工場地帯から閑寂なる東郊を一氣に東海岸地方へ出る。八幡宿、五井、姉ヶ崎を過ぎ「死んだと思つたお富さん」の切られ與三郎で知られた木更津を後に、程無く左窓に神野寺、九十九谷等で名高い植林美の鹿野山を眺めつゝ、九時三十一分保田驛へ下車となる。

一行驛前通りを海岸へと保田橋を渡り右へ行き海岸の町の休憩所へと一先落着きました。驛前通りは保田の商店街でその間にカフェー○○○喫茶店サロメ等あり、麻雀大弓はおろか保田橋角にはベビーゴルフ場まで設けられてあるのは少々意外です、少憩の後、輕装して鋸山へと道を取り驛前を左へ縣道を約二軒省線のガード下から右へイヨイヨ山道になる。この登山口を表道と云ひ、濱金谷から登る口を裏道と稱して居る。

鋸山は房總の國境にあり海拔三二四米にして其の名の様に鋸の齒の如き山骨露出して案内書には「山頂は月輪(西)瑠璃(中)日輪(東)の諸峰となり西端は明鐘崎となつて、岩海に斗出して懸崖となり眺望絶佳」と。山の中腹南側には乾坤山日本寺がある、日本寺は曹洞宗に屬し聖武天皇の勅願所で行基僧正の創建と傳へ今は境内を公園として風致頗るよい。寺前には頼朝公御手植の蘇鐵や享保元年の古鐘あり、庭の下り口には印度の名木とてサルスベリに似たる沙羅双樹と云ふ珍木がある。其れより稍々下りたる所に眺望で聞えた香海樓がある、一行中大部分の方はコ、デ晝食を開くことゝした。早速寺に納經を願ふ、集印帳にすらくと書き印を三ツポンくく「ハイ十錢」には恐れ入つた。この附近には有名な五百羅漢を安置せる羅漢窟を始め大小無數の岩窟がある。これは強い南風に吹きつけられた凝灰岩の削磨されたものと云ふ。自分は集印の間に一行にはぐれてN君と急ぎ寺の左口から登る、通天關を経て天台石橋に至るも一向に一行に會はず。豊間根、二條、有吉、小松原諸氏を凡廿分も探したが後にも先にも姿が見えねば二人で頂上へ向ふ。直ぐ上に不動瀧と云ふが崖から落ちてゐる。愈々急な石段を上ること半丁程すれば主峰瑠璃峰の頂上十州一覽臺に着く。「何んと素

晴しい展景でせう。然し生憎にも茶店に着く頃から驟雨で一時は展望も一寸物足りな

いことになつた。茶店で少憩すれば保田・元名の海は漣の影なく一昨年赤城大沼より水沼に下る道で眺めた雲海を髣髴させる景色であつた。

嬉 嬉
前方は房州石を切出した跡で壁立萬仞極めて壯觀である。房州石(凝灰石)は昔は可なり榮えたものであるが現今では大谷石に押されて餘り振はぬとの話である。或る人の言に「十州一覽臺と申すが如何にすれども十州見えず」と傍人云ふ「富士を見られん甲斐、駿河、遠江に股がるならん」と、げに尤もなりと云へやう。

入つたのを自分は先へ登つたものと早合點した結果なりしこと分る。



正十二時下山の途に就く。途中にて漸く登り來る一行に出會ふ。一行は晝食のため呑海樓に

山麓より保田まで乗合自動車通するも、日長の時とて途々鈴虫でも取り乍らN君とてくりぶらりと行く。然し僕等より鈴虫の方利巧と見え一匹も取れぬ内保田の町へ來て仕舞ふ。途中元名海水浴場あり、保田より混雑せず静かにて水清きも遠淺でない、且つ汽車汽船に少々不便なり。又途中江戸繪の創始者と知られた菱川師宣の墓があると云ふ別願院を尋ねたるも見當らず、そのまゝ休息所の保田旅館へ一時頃歸着した。一服後海水着となり出立時間までは自由行動と成つて次々にいよゝ海へ!!

保田は以前から名高い海水浴場で鋸山を背景に左に浮島、右に三浦半島を眺め紺碧の波上遙かに富士の靈峰、豆相の連峰を望み、海は遠淺で波は静かで女小供にも危険の虞が少い好い場所である。返子や鎌倉ほどザワ付いては居らぬ。町では海岸に無料脱衣場を、驛前に案内所を設けて貸家貸間の斡旋する等サービス一〇〇パーセントたらんと大童に努めて居るらしい。

今日は好天氣と日曜とで海岸は大變な人出である。私もN君と共に泳ぐことにする。濱邊では二條氏大槻氏の坊ちやん嬢ちやんと砂遊びや穴堀りをやる或は海へ或は甲羅乾しで遊び疲れて旅舎に入り一風呂浴びて歸る仕度に取りかゝる。

四時五十分旅館を立出で東京灣汽船の棧橋へ行く。明治製菓賣店のロードスピیکا
ーからは

「一高三高の野球戦ボールカウントワン、ツウ、第四球目投げました、アウトコーナ
ーを流し過ぎたボールこれでカウントワンスリ ワワ……。」

サア乗船は菊丸か橋丸か、一昨日菊丸だから今日は菊丸らしい、何でもよい楽しい。
オヤア白波を蹴つて来たぞ〜。菊丸にあらずして、それは船體を傾けた橋丸だった。

船中も満員N君と一緒に船室は暑いから舳に近い甲板上に紙を敷いて陣取る、五時
四十分錨を捲上る音、黒煙り、保田を後に涼しく一路東京へ〜。

八時四十五分一同無事靈岸島へ歸着し、愉快な一日の「コース」を悦びながら解散し
た。此経費一人當り二圓四十錢。

相州三浦海邊の夕

期日 八月廿三日(第四日曜)

集合 第一班、廿二日午後二時廿二分東京驛。第二班、同日午後五時東京驛。

發車 第一班、二時五十二分(横須賀行) 第二班、五時廿二分(横須賀行)

行程 土曜日午後湘南電車終點或は省線逗子で下車自動車に接續油壺に到る。直ち
に油壺對岸濱諸磯出口幸吉宅に入る、先づ入口の海岸で一浴して汗を落し海岸の
松原の丘で太平洋の大海原を前にして一服し、歸つて夕食の仕度にかゝる。附近は
魚類野菜何れも豊富なれば各自好む儘に得意の材料を以て料理して御馳走を作る事
にする、初歩の方には七輪の火の起し方、米の炊ぎ方から始めます。

夜は田舎家の事故何も寝具は揃つて居ない、先づゴロ寝と心得て用意して來て貰ひ
度い、翌日は城島一周房州行、江の島往復等天候と各自の好みにより色々のコース
が作れる。

歸路 凡廿三日夕方東京歸着

用意 浴衣に敷布、嗜好品若干と海水浴用品

漫吟

峯凡生

車中にて

ふみきりに水瓜車の止りけり

鋸山にて

沙羅双樹に立札のあり蟬時雨
十州を見下す山や雲の峰

保田海岸

日歸の客はづかしき裸哉
夕焼やあすも暑いぞ濱風る

汽船の中にて

山雲と静に暮るゝ夏の海
落ちかゝる三日月淋し夏の海
涼しさや燈臺に火のともりけり

【九月之部】

佐渡ヶ島と上越新線沿道の探勝

期日 九月六日—八日

集合 五日午後八時上野驛

發車 八時五十分(金澤急行)

下車 寺泊驛六日朝

行程 「荒海や佐渡に横たふ天の川」初秋の佐渡は自然好愛者を魅了するに充分な力を持つてゐる。寺泊は和船時代の佐渡への要津で、順徳帝、冷泉爲兼、日蓮上人などの遺跡が多い。正午發の汽船で佐渡の小木に渡る。有名な溫柔郷で文豪紅葉が掩留歸るを忘れた所、そこから眞野の新町に行き附近の眞野山陵、國分寺其他の諸勝を訪ねて新町に一泊。翌日は河原田、澤根などの町々を過ぎて相川に入り有名な金

小河眞原
澤根野木

寺泊

上野驛

鑛でも見て宿泊。第三日は早朝相川町を發し、國中街道を経て兩津町に出る。途中で明治記念堂、黒木御所跡、二宮神社、妙照寺などの舊蹟を探る。かくて午後二時兩津町發の汽船で柳と橋の都新潟へ入る。
歸路 新潟驛同夜乗車出發翌朝歸京の豫定
天候 不論晴雨(荒天乗船中止)

佐渡遊記(紀行)

イーグル生

佐渡と云へば誰しも『四十九里波の上』日本海の荒海に横はる孤島を想像する『此世の地獄』の金山の所在地であり、舊幕時代には兇惡なる囚徒を流刑に處した荒涼たる海上の牢獄、と云ふ先入觀念に囚はれ勝の様であつたが、近來旅行趣味の普及するに連れて、佐渡の實狀も廣く知られる様になり、懷古の史蹟に富み、加ふるに天然の風光と豊富なる物資に恵まれたる樂土として、觀光の客が頗る多くなつた様である。

越後の直江津、寺泊又は新潟から孰れも海上約十二三里、航程三時間半乃至四時間である。おけさ節に唄はれた『四十九里波の上』とは昔の夢、それは能登の女が此島の男に對する戀の詠嘆であらうと云ふ事である。殊に夏の佐渡は、巖谷小波氏の一句『越後まで疊つゞきや夏座敷』日本海海波は極めて穩かである、以上頼まれもしない佐渡の提灯持は先づ此位で打切とする。

寺泊から佐渡へ

小松原氏をリーダーとする一行五名、自動車利用の旅には丁度好い頭數である。吉田常藏、大槻尹一兩氏の見送りを受けて九月五日午後九時二十分發信越廻りの新潟行に乗る。上越線列車の混雜に引換へ、信越廻りの緩行車は座席頗る悠々たるものであつた。六日朝九時柏崎にて越後線に乗換る、例の買収問題で疑獄事件を引起した越後鐵道會社線の後身である、柏崎を出ると間もなく線路の兩側、丘陵や田疇の間に油井を掘る櫓が無數に林立して居る、所謂西山油田である。車中に乗合した石油會社技師君の話に依れば、此あたり天然瓦斯の噴出多量にて附近都邑の燃料として各戸へ供給

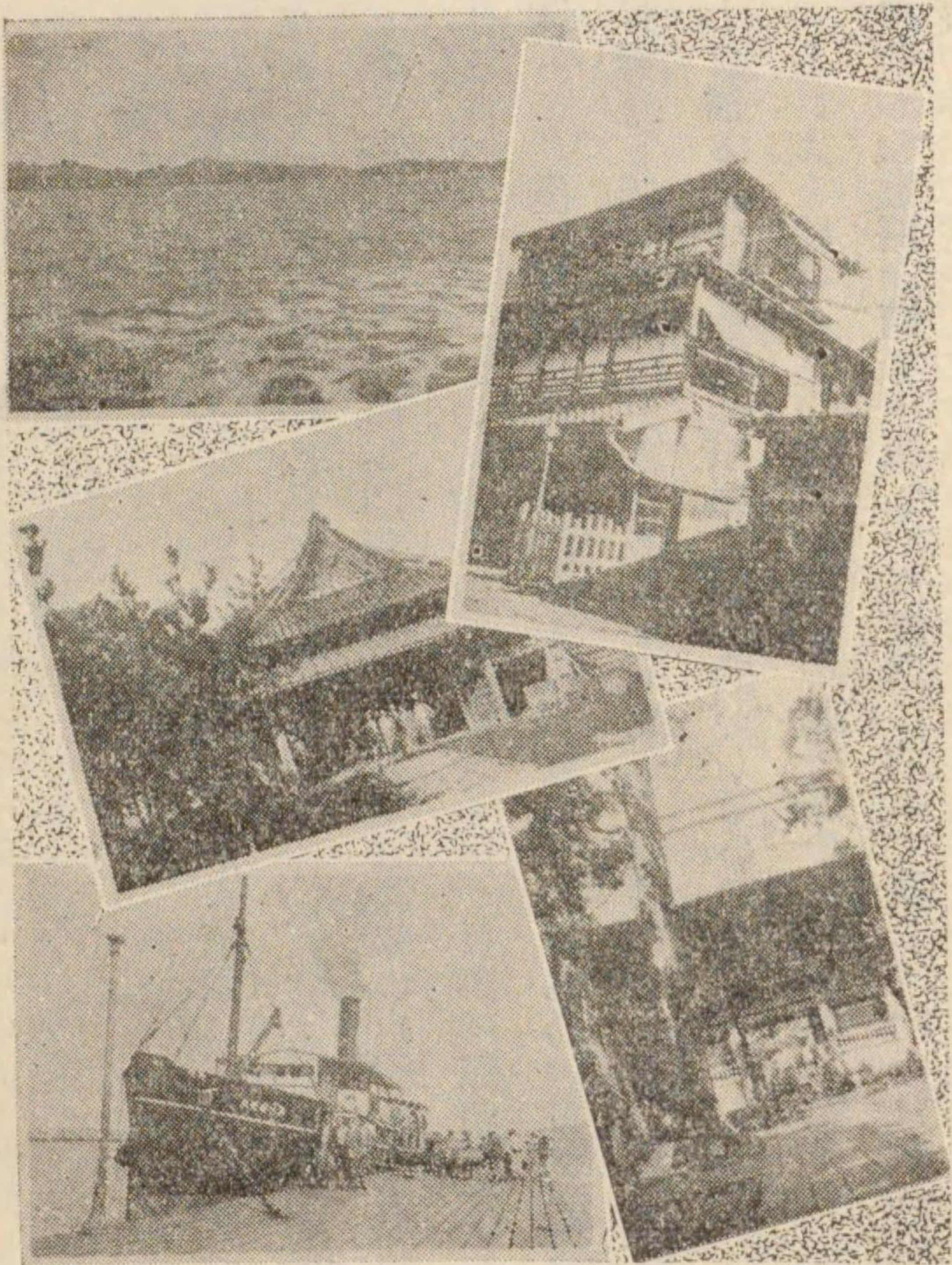
して居るが、石炭瓦斯に比し三倍の熱量を有すると云ふ、唯此天與の資源も何時止まるか知れぬと云ふ不安があるのが缺點である、此天然瓦斯研究の爲、理化學研究所の出張所が此附近に設けられて居ると云ふ。午前十一時大河津驛に下車、乗合自動車で寺泊に向ふ。大河津は信濃川放水路の基點で、大規模な閘門があるが、視察する時間の餘裕のなかつたのは遺憾であつた。寺泊の温泉に一浴する豫定であつたが、是も時間都合で割愛した、直に汽船發着所に至り、正午出帆の佐渡行汽船に乗込む。

小木から眞野へ

寺泊は順徳帝の御遷幸、日蓮上人の流適等、皆此地から佐渡へ渡航された處を見ると、かなり古くからの要津であつたと見える、丘陵と海岸に挟まれた細長い町で、如何にも裏日本の邊陲と云ふわびしい感じのする所である。船は百八十噸許りの小船ではあるが、割合に新しいので氣持がよい、時々雨が降つたが海上は穩かであつた、佐渡の赤泊に寄港して午後四時小木の港に着いた。

新潟と交通する東の兩津港を佐渡の表立關とすれば、南端小木港は裏口にあたるで

あらう。和船時代には北海の良港としてかなり繁昌した土地で、今でも狹斜の巷にだけは昔の名残を止めて居ると云ふ事である、明治文壇の雄紅葉山人の情話も『煙霞療



原塚 下右。館旅屋田高川相 上右
 門山の山
 島ヶ渡佐るた見りよ中船 上左
 所行奉山金渡佐舊 中左
 行一の頭埠港夷渡佐 下左

養』の旅枕に残された有名な話である。前途を急ぐので小木の情調を味ふ暇もなく、

直に自動車を駛て眞野に向ふ。

懐古の史蹟

路は丘陵の間を縫ふて、繁れる樹路の間から兩側に海を眺めつゝ緩傾斜を上る。廳て車は古刹蓮華峰寺の門前に停る。蓮華峰寺は小比叡山と號し、遠く皇城の東門を鎮護の爲、平城天皇の大同年間創建せられた千百餘年の由緒ある古刹であると云ふ比叡山に横して建てられたので當時の規模の大きかつた事は想像されるが、大部分は兵燹に罹りて、僅に残る金堂と弘法堂とは國寶として、此島の古き歴史を物語つて居る。老杉鬱蒼と茂つた丘の半腹にあつて幽邃なる境地である。恰も近畿地方の古社寺巡りをして居る様で、佐渡へ來たと云ふ感じがしない。

それより路は小さな山脈を越え、眞野灣の長汀曲浦を瞰下しながら、七曲りと云ふ曲折した崖路を巧に運轉しつゝ海岸に沿ふて駛る。此あたり海山の風光頗る佳、眞野灣を隔てゝ遙に金北山一帶の山巒を望む景觀は如何にも雄大で、益々島と云ふ感じは薄くなつて來る、眞野灣の奥、新町に近き戀ヶ浦は承久の昔、順徳上皇御遷幸の際、

御上陸あらせられた處で、海岸に記念碑が立つて居る。時は薄暮、先を急ぐので車中から瞥見して過ぎる。

いざさらば磯打つ浪に言問はん

沖の方には何事かある

隱岐の島に御遷幸あらせられし御父 後鳥羽上皇の御上を偲び給ひての御述懐、當時の御心情拜察し奉るもかしこし。

今上陛下、東宮にましませし御時、佐渡行啓の砌、特に此處から御上陸あらせられたと承る。承久の昔を偲ばせ給ふ大御心と拜察し奉る。

新町より右折して數町、眞野宮を拜す、順徳上皇の御神靈を奉祀し、菅原道眞、日野資朝の兩卿を併祀せる縣社である。それより爪先上りに登る事數町、小高き丘上に順徳上皇の御火葬所址がある、普通に眞野の御陵と稱せられて居るが、御陵は先年京都へ御遷座あらせられたので、今は御火葬所址と稱せられて居ると云ふ事である。亭々たる赤松の林に取圍まれた雑木の茂みの中に御門扉を拜しつゝ、遊子の思は遠く七百年の昔に馳せる。承久の御企空しく逆臣北條義時の爲に、畏くも至尊の御躬を以て

絶海の孤島に悶々の月日を送らせ給ふ事二十二年、都へ還らせ給ふ御望も絶て、寶算四十六にて崩御あらせらる。

思ひきや雲の果まで流れ来て

眞野の入江に朽ち果んとは

薄暮蕭條たる眞野の山里に、目のあたり御遺蹟を拜して、此御製を思へば感慨の殊に深きを覚える、附近には石抱の梅と云ふ老樹がある、上皇の御手植として傳へられて居る。

夫より車は田疇の間を駛し路傍左手に稍小高き臺地状をなした處がある、佐渡の豪族たりし本間氏の居館壇風城址である、日野阿新丸が父資朝を斬りたる本間三郎を打取りたるも茲であると云ふ。尙少し進むと路傍に、阿新が隠れて追兵を遁れたと云ふ阿新隠れ松の古株がある、ふと僕の頭には、少年時代に見たであらう歴史畫の或頁が浮んだ。茂つた竹藪と深い濠がある、稚兒鬚に結つた一少年が撓んだ竹の先に全身を託して、一躍濠を飛び越さうとしつゝある圖である。京都から父を尋ねて遙々此の島に渡つて來た、十三歳の勇敢なる阿新少年の事蹟を偲ぶ聯想を載せつゝ、車は馳て

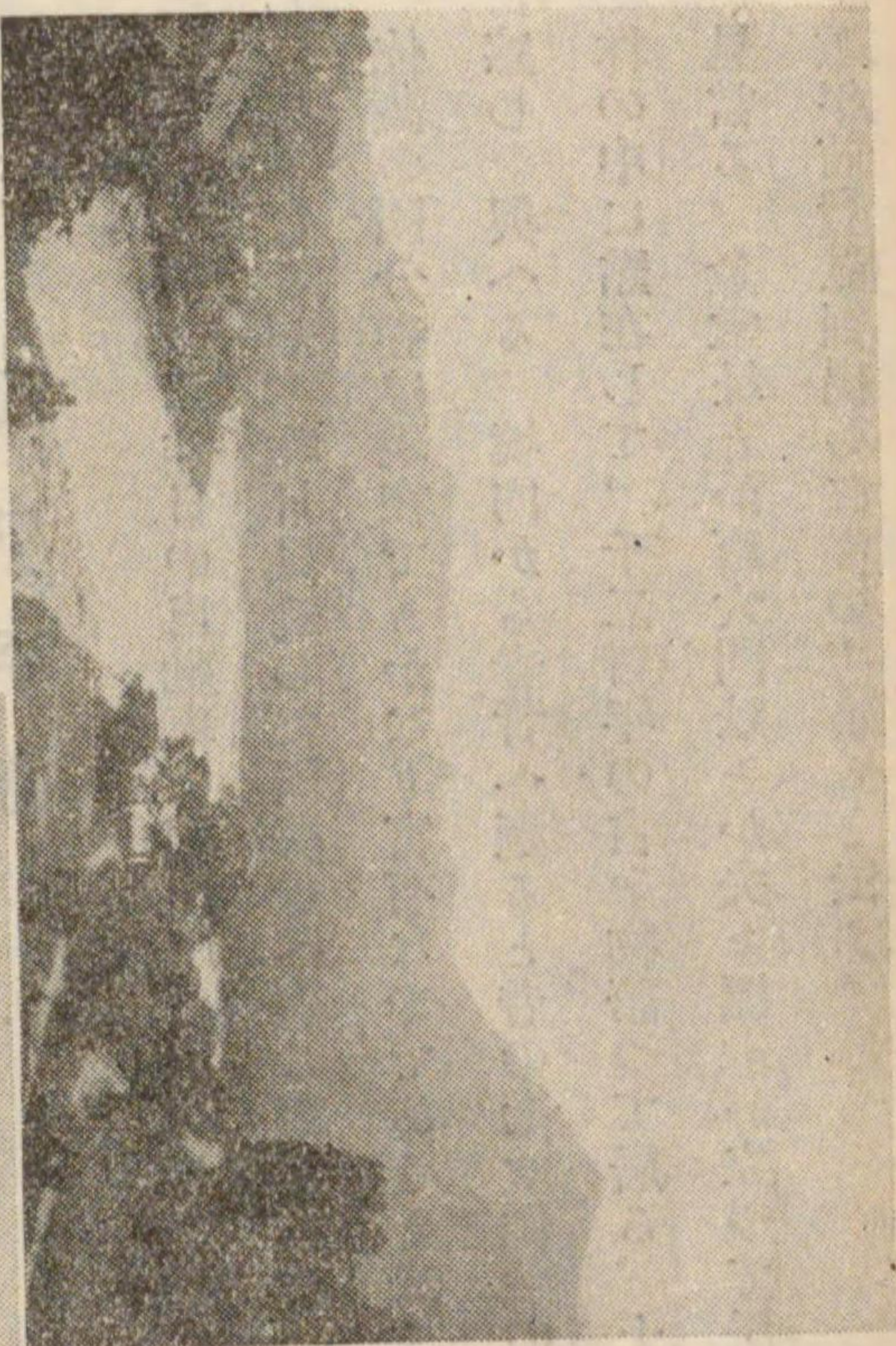
大きな寺の門前で停まつた、阿佛坊妙宣寺である、山門を入ると右手に大なる五重塔が聳つて居る、樹木鬱蒼幽邃なる境地である。此の寺は上皇に供奉した北面の武士遠藤爲盛が、他日日蓮上人に歸依した阿佛坊日得の開基で北陸地方に於ける法華宗の道場として有名な寺であると云ふ。境内の一隅に日野資朝卿の墳墓がある、老樹に覆はれつゝ六百餘年の風雨に苔蒸したるさゝやかなる五輪塔は座ろに懐古の情を唆るに充分である。愈々日が暮れたので近くにある國分寺は素通りして相川町に向ふ。自動車の運轉手君、車の操縦も上手だが、中々の物識りで名所舊蹟の案内や説明は頗る手に入つたものである。夫も其管哉、聞けば十五年前に佐渡で初めて自動車を運轉した開祖であると云ふ、其當時全島の交通を牛耳つて居たガタ馬車屋から、かなり迫害を受けた懐舊談などをして居た、前燈に暗を照して坦々たる縣道を快駛しつゝ河原田町を過ぎ、中山峠の隧道を抜けると相川の燈火が見えて來た、小木から相川迄四十餘キロを走破して旅舎高田屋に着いたのは午後八時に近かつた。

金山の相川町

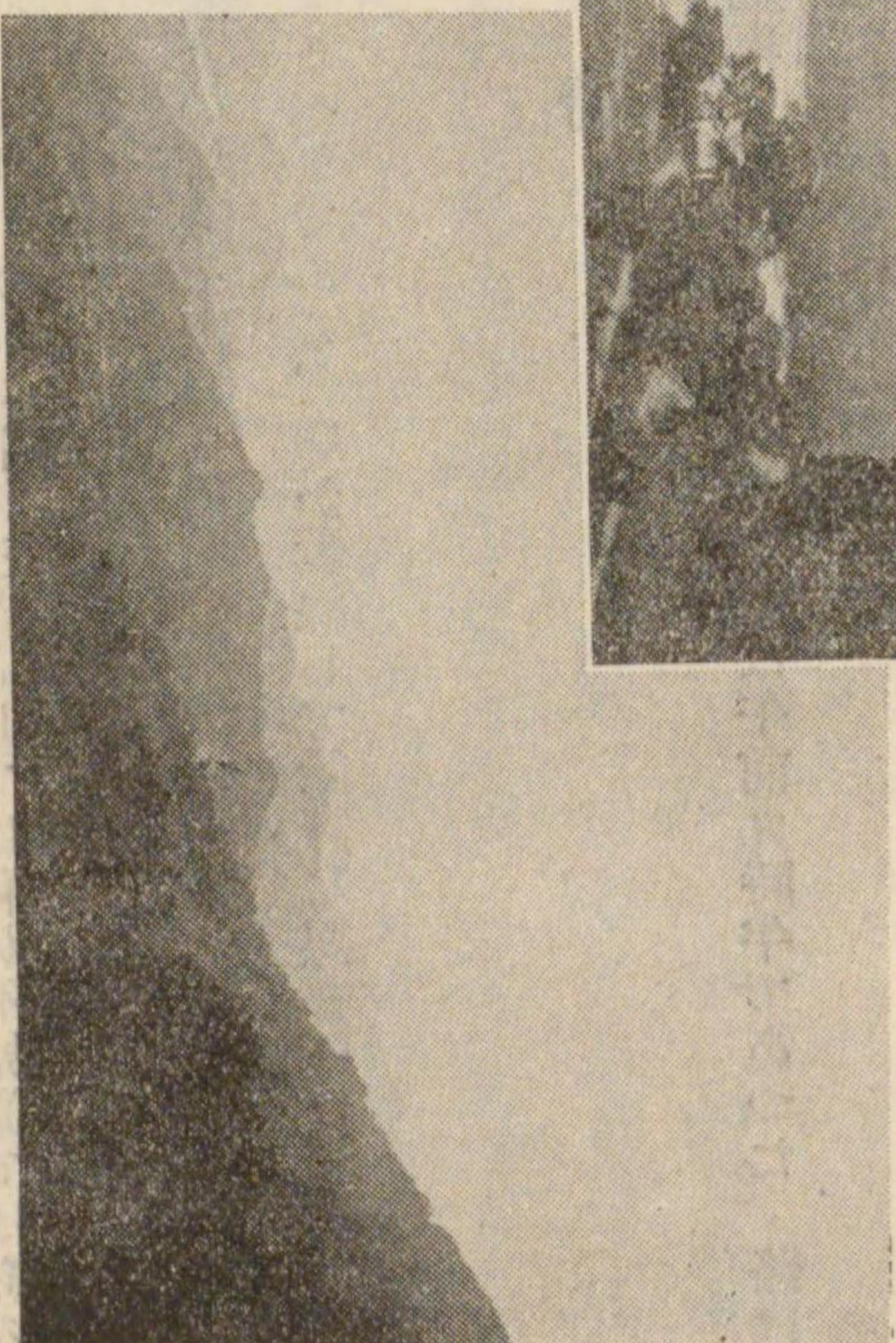
相川町は佐渡の主邑であり、民謡おけさ節の本場である。有名なる金山の所在地として古くから知られた土地で、往昔金山の隆昌であつた時代には、諸國から集まる人も多く、今日に數倍する殷盛を呈して居たと云ふが、元來地は偏陬、其運命は一に懸つて金山の盛衰にあるので其金山が既に衰境にある今日、産業的には最早發展の望は尠い様に思はれる。

靜かなる相川の宿に快眠して夜行汽車の寢不足を一掃した。七日快晴 出發前金山を見るべく事務所へ行く。金山見物は案内料として普通二十錢以上、特別は一圓以上を納める事になつて居る。特別と云ふのは坑内迄降つて案内するのであると云ふ、二十錢以上の普通組は構内の設備を見せるだけだと兼て聞いて居たので、大して見たいと云ふ興味もない。而も相當人數が集まる迄待合せねばならないので、前途を急ぐ吾々は金山見物を見合す事として退却した。

此金山は慶長五年の創業から三百餘年の間、幾多の盛衰變遷を経て、今では三菱礦業會社の經營である事は普く人の知る處である。三菱が其持山を見料を取つて見せると云ふのも變なものである。而も二十錢以上、一圓以上とした以上の二字が振つて居



富嶺泉温泉湯・上水
見りよ上樓ルテホ土
川根利るた



湯澤温泉のスロープ
左下の白きが鐵路に
て清水隧道に向ふ所

る。お寺の寶物拜觀ぢやあるまいし、天下の富豪三菱としては聊か不見識ではあるまいか、見物に来る人が多くて手数の掛るのを厭ふならば、特別の關係以外は斷然縦覽謝絶とするがよい。若又一般人の智識を廣める爲鑛山作業の状態を見せようと云ふならば、奉仕的に潔く無料とするべきである、聊か脱線して餘計な悪まれ口だが、大三菱王國の爲に苦言を呈する。

國中平野

約束して置いた昨日の自動車で相川町を出發したのは午前九時半であつた、路は少し迂廻となるが、昨日見殘した國分寺へ廻る事とした。

佐渡の國分寺は現在でもかなり富な寺であると云ふが、如何にも寺域清淨落付いた感じを與へる。境内から寺背へ廻ると昔の七堂伽藍の大きな礎石が、荒草離々たる松林の中に點在して、千二百年の古を物語つて居る、土石の中を探すと布目瓦の破片が見當る、金堂址とか南大門址とか夫々標木が立つて居る、全體土に覆はれて居たのを數年前發見掘出したものであると云ふ。

黒木の御所址は、河原田町から西へ約一里許、縣道から數町を隔てた田疇の間にあり、順徳上皇御在島中、長い間の憂き年月を送られた假宮の跡である。近くに在る本光寺には上皇の守本尊たりし觀音像が、國寶として保存されて居る、車は聽て黄金色した稻穂の實る沃野を貫いて快駛する。

北は大佐渡南は小佐渡

あいの國中米どころ

聊か地理の講釋めくが、地圖を展べて佐渡の地形を按ずると、二條の山脈が南北に相對しつゝ斜に平行して、其中間に國中平野を過ぎ、東西は深く灣入して宛然分銅の如き形狀をなして居る、其北部が所謂大佐渡で南部が即小佐渡である。我等は今其中間の國中平野を駛りつゝある、一望平蕪の盡くる處、遙に佐渡の名山金北山を盟主とする大佐渡の山脈連亘して景觀雄大、又しても佐渡は大きいなと感ぜざるを得ない。車は進んで新穂の町に近き塚原山根本寺に着く、日蓮上人が配流最初の草庵の跡である。

本間六郎左衛門の家のうしろ塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮臺野の様に死人を捨

つる處、一間四面なる堂の上は柱間あはす四壁あらはに(中略)敷物なければ敷皮打敷、簀打被つて夜を明し日を暮す、夜は雪雹ひまなし、晝は日の光もさゝす、心細かるべき住居なり

かゝる悲惨なる迫害にも屈せず遂に法敵を折伏したる豪僧日蓮一代の由緒ある遺蹟である、門前左方にある三昧堂の傍、小高い戒壇塚は其舊蹟であると云ふ、樹木鬱蒼たる境内には祖師堂其他の大伽藍がある、祖師堂背後の竹林は頗る見事なものであつた。

兩津から新潟へ

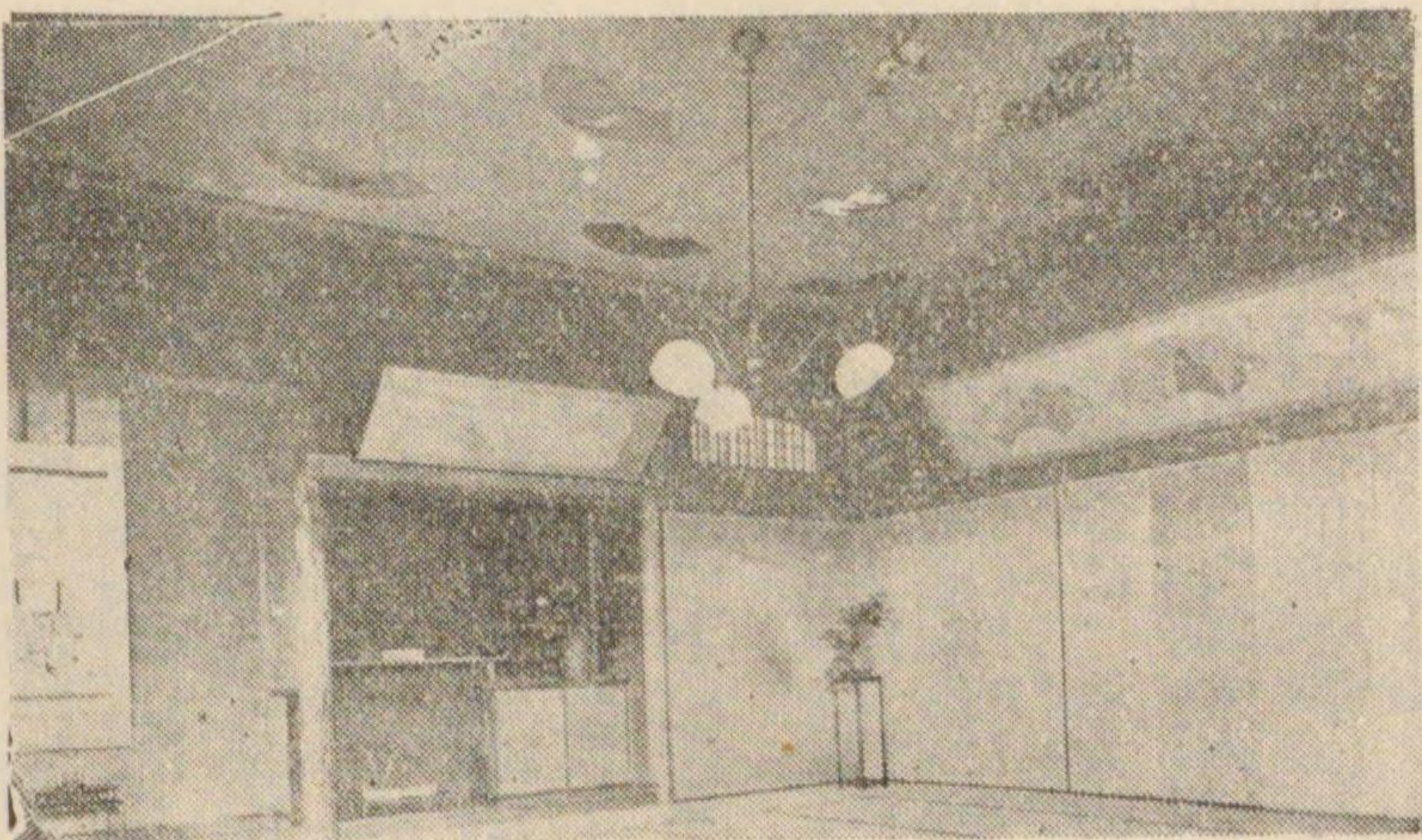
新穂の町を過ぎ、金北山を正面に眺めつゝ進む事少許、路の左方に加茂湖があらはれた、東西約十八町、南北約一里半と云ふ大湖で、兩津から日本海に續く所謂潮入湖である。湖畔に沿ふ美しい風光を眺めつゝ快駛して、聽て兩津の町に着き夷町の丸金旅館に午餐のため入つたのは正午であつた、港町と夷町とが橋に依つて接續して兩津町をなして居る、佐渡ヶ島の表玄關である。

我等は時間と行程との許す範圍で佐渡の風光と史蹟とを探つたが、具に『風光の佐

渡』と『史蹟の佐渡』とを觀るには旬日の旅程を要するであらう。佐渡は周圍五十三

里、人口約十二萬を包容して、而も物資豊富、就中米は島内の需要を満して尙且輸出の餘裕ありと云ふ、沿道一瞥の管見に過ぎないが、村落都邑共に何となく豊かに見受けられる、眞に恵まれたる樂土と云ふべきであらう。

新潟行の汽船は午後二時出帆した。埠頭を離れて遠ざかり行く佐渡の島山に淡き名残を惜しみつゝ、聽て姫崎の燈臺を過ると、對岸越後平野の果に小高く盛上つた彌彦山や、少し隔て、米山山脈の翠微が右舷の海上遙に望まれる、平穩疊の如き海路約四時間にして、信濃川の河口なる新潟築港の沼垂埠頭に着、直に上陸して篠



新 潟 市 鍋 茶 屋 扇 之 間

田旅館に入る、新潟名所萬代橋は、以前の特徴ある長い木橋が、コンクリートの堂々

たる近代式橋梁と變り、信濃川の河岸には大分埋立地が出来て居り、河口には相當大規模の築港も完成し、道路は立派に舗装されて居るなど、會遊の時に比し面目一新の觀があつたが、例の川端に沿ふ柳並木と橋と美人とに依つて醸し出される新潟獨特の情調は依然として、遊子の心を蕩然たらしむるに充分であらう。當市在住のクラブ會員溝口俊一氏から、此夜一行は鍋茶屋に招ぜられて御深切なる接待を受け、圖らずも新潟情調を満喫する機會を得た、茲に記して同氏の御厚情を謝す。

清水トンネル

八日快晴、友誼厚き溝口氏の御見送を受け、午前七時五分新潟發上越線の列車に乗る。今日は此行第二の目的たる清水トンネル通過の豫定である。長岡市に於ける上越線開通記念の博覽會は、地方的に大分人氣のある様に見受けられた、停車場の大混雑を車窓より眺めつゝ次驛宮内より上越線に入る。馳て線路は魚野川に沿ふて溯り、次第に平野を離れて山嶺地帯に入る、十一時半上越國境に近き越後湯澤に下車して湯澤温泉に一浴を試る。温泉は三國街道の古驛なる湯澤の宿を出外れて數町の丘の半腹に

ある、前面魚野川の溪を隔て、上越國境の山々を望み展望は一寸勝れて居る、地形の模様ではスキーの好適地であるらしい。温泉の東方上田富士と稱せらるゝ飯士山の裾野には、特に見事なるスロープが展開して居る、温泉としては大したものではないが上越線の開通に依つて、東京に近きスキー場としては大に有望な温泉場である。

午後一時五十二分湯澤發に乗る。線路は魚野川に沿ふて前面に迫る重疊たる國境山脈に向つて進む、越後中里驛を出ると間もくループ隧道を一巡して愈々清水トンネルに入る。海拔千九百七十八米の茂倉山直下を貫いて延長九キロメートル七、通過十三分を要した、約九ヶ年の歳月と千百七十餘萬圓の巨費を投じ、鐵道土木工學上の最高技術と、延人員三百九十餘萬人の勞力とを以て完成せる東洋第一の大トンネルは、表裏日本の交通系統に一大變革を興ふるものである。旅客は座ながらにして僅々十數分を以て、上越國境の難關を通過し得るに付けても、往昔此國境の難路なる三國峠の雪路に悩める旅人の苦艱を想へば、近代文明の恩澤に浴する現代人の幸福を痛感する。我等は列車の最後部車室に乗つて居たので、一直線のトンネルは入口の孔が、暫くの間段々小さくなりつゝ見えて居たが、中程から上州側に向つて降り勾配となりトンネ

ルを出ると更に又二つの小トンネルを潜りて湯檜會驛に入る、眼下の谷底に湯檜會温泉の部落が見える。それより再びループ線を一巡して湯檜會川に沿ふて降り、更に利根川に沿ふて水上驛に入る。午後二時半であつた。水上驛に下車して湯原温泉の菊富士ホテルに入り、一浴旅塵を洗ふて晚餐の後、同夜歸京の事として愉快なりし此行を了る。此經費一人當り二十七圓五十二錢。

秋天高き時高層氣象臺見學

期日 九月六日(第一日曜日)

集合 午前八時上野驛第十一出札口前

發車 午前八時廿分(青森行)

下車 荒川沖驛午前十一時一分

行程 春秋多佳日とか高天肥馬とか秋は實に行樂の好シーズンである。就中天高く氣澄みて、清明九月は太空を仰ぎ見てその宏大無邊に同化し、無量の慈光に浴する

荒川沖驛

上野驛

に最適である。同時に氣象の變化を示現することも亦秋を以てその尤とする。この意味に於て此行程は最も興味に富み、且見學として意義ありと信ずる。荒川沖の宿驛から雜木林や秋草の花色とりどりの野道を行く、約六軒にして小野川村館野の高層氣象臺に着く。文部省の直轄で、高層の氣壓、氣温、濕度、風力、風向、雲形、雲量等の測候を行つてゐる。之を見學する吾等は全く未知の國に遊ぶの感があらう。歸途餘裕あれば牛久沼邊の水郷の秋色でも探ることにせう。

歸路 午後四時五十分荒川沖發午後六時廿五分上野驛歸着

天候 雨天中止

地圖 土浦(五萬分ノ一)

用意 辨當、水筒等

高層氣象臺を觀るの記(紀行)

はなぶね

「此の頃の様には世界各國から飛行機で飛んで来る様になると、クラブのコースも一ツ空中旅行と行き度いものだね、今日行く處も航空の爲めの觀測をするのだらう、霞ヶ浦の近くだから」

(イヤ航空専門ぢやない、文部省の管轄で一般高層氣象の研究をする所さ)

「それでは近頃新聞や雑誌に見受ける、ソレ何とか云つたけな浪花節語りの名の様な」

(ア、對流圏かい)

「うんそれ／＼夫れを研究するのだね」

(そうだ、吾々が登山しても分る様に登るに従つて溫度も氣壓も降下して夫れが、富士山の四倍位の高さでは氣壓は地上の十分の一の五十六糎又溫度は氷點下五十度位迄降るのだが、夫れから上は殆んど差が無くなるのだ、其の界迄を對流圏と云つて其の上の變化の無い部分を成層圏と云ふのだ相だ、雲や雨雪霧雷等は非常に高い所で起る様に考へられるが、其の對流圏の極低い二、三千米の處に起る現象で、丁度海面は浪立つが深海は靜かなのと同じ理窟だらうな)

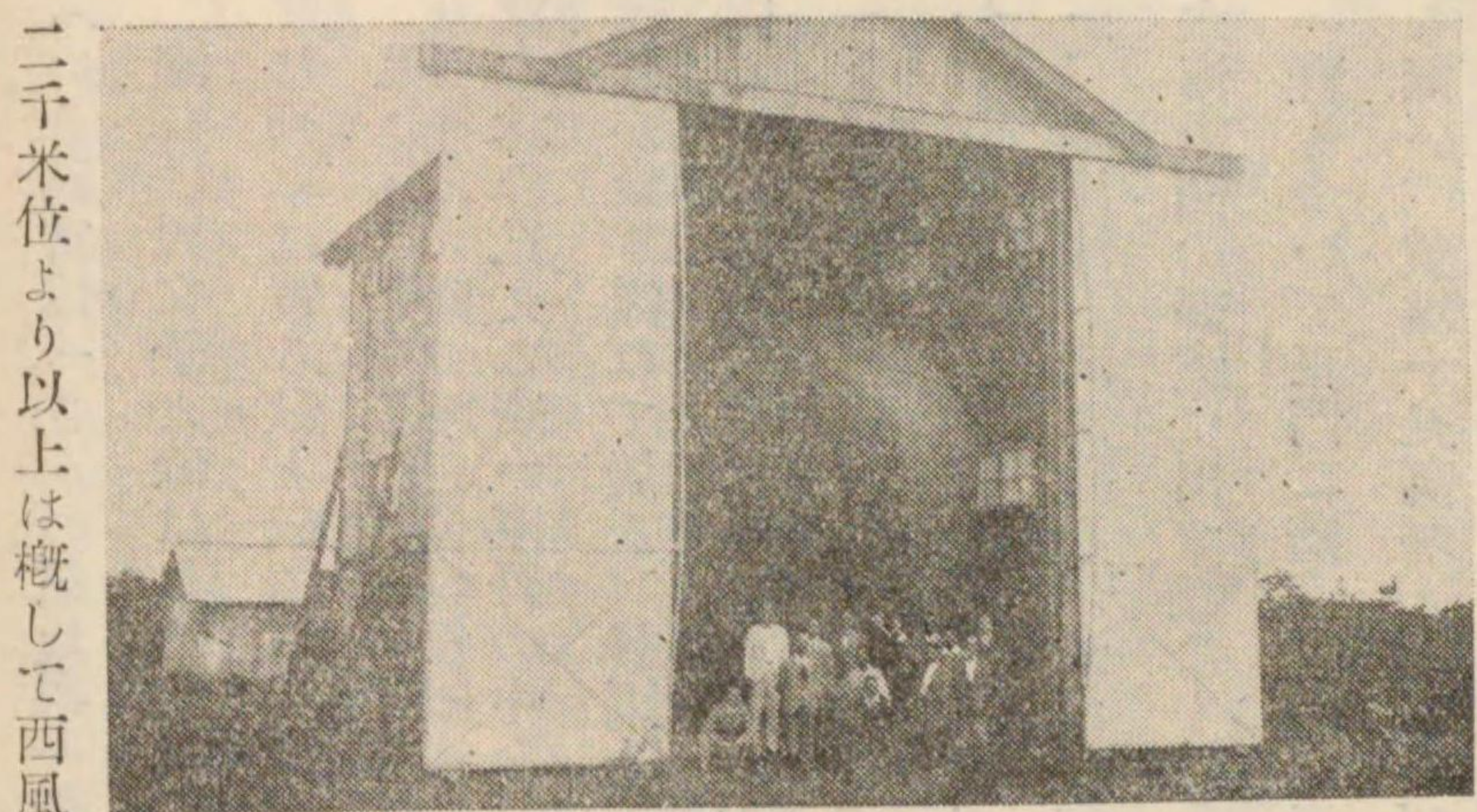
「君は中々精しいね」

(いや國富信一さんの氣象學一班で研究したのだよ)

流石は天文子と云はれる丈けあつて石井君車中で豫備智識を授けて居る、一行を乗せた列車は實る秋と云ふ程出來榮えのせぬ田畑の中を走つて十時荒川沖驛に着いた。

驛を出で濱街道を横切り西の方館野に向ふ、十分も歩かぬ内早や人里を離れ所々に雑木林の見える廣い原野の中を行く。あたりは飽くまで靜寂で女郎花、われもかう等秋草が咲き亂れて居る、曇天とて涼しく恰も北海道を旅行して居る様な氣分、今にも向ふから鈴を付けた驛遞の馬がやつて來さうな光景だ。三軒程も行った頃、村人に教へられて近道に這入れば諸處に濕原がある、降雨の度に沼となり排水の方法も無いのか、萱原の儘に放棄されてある、往時は此の邊迄霞ヶ浦が擴つて居たのではあるまいか、荒川沖と云ふ地名が夫れを證明して居る様だ。驛から一時間程歩いて漸く土浦、水海道間の縣道に出で程なく道の傍に高層氣象臺入口の標杭を發見したが中々に遠く一軒も歩いて正門に着く、門と云ふてもセメントで丸石を固めた門柱丈けで門扉も垣も無い。敷地十五萬坪と云ふのだから代々木練兵場位の廣さ、従つて周圍は一里もあらうから一寸は出來まいし、又必要も無いのであらう。刺を通すれば應接室に招ぜら

れ、待つ間程なく内田泰君が官舎から來られた。同氏は新進の理學士で旅行趣味に富まるゝ方なので今日の見學を申込んだ處、臺員一同との鹿島詣を割愛してまで吾々を待ち受けられた由誠に恐縮した次第である。



氣球格納庫

二千位以上は概して西風が吹いて居るので此の風を利用する爲め太平洋横斷飛

此の氣象臺は大正十年の開設で、本邦唯一の高層氣象臺であるので日本の代表的氣象を研究せんが爲め成る丈け山岳、海洋等の影響の少い所を調査の結果、此處に農林省の土地が有つたので設置した譯である。觀測の一は風船を飛ばして地上二ヶ所より望遠鏡に依りて一分隔に其位置を觀測し、地上より順次に高層迄の風位及風速を調べる事で模型によりて説明を受けたので充分理解する事が出來た。之れに依れば地上

行は日本を出發地とする理由も領かれた。次に溫度及濕度は毎日六時、十時、十四時(午後二時の事)の三回に風及氣球を揚げて觀測する等一通り説明を聽いてから見學に出掛ける。

先づ風力計等の取付けてある屋上に登れば其眼界の廣いのに驚く、一面の萱原と樹海の連続で遠く筑波山、近くは獨逸から分捕つた小山の様なツェペリン格納庫が見える。

事務所を出で繫留氣球格納庫を見る、入口に見付けぬ歐文が書いてある、聞けば之れはエスペラント語だ相で、臺長大泉氏は熱心なエス語學者で、總ての名標をエス語で書かれて只管同語の普及に熱中されて居らるゝ由、氣球は挿畫で御覽の通り陸軍の標的觀測用のと略同型で二三千米も飛揚するので其繫索の重量(百米で約五疋)の爲、人間を搭乘させる餘裕なく自記觀測器に依つて觀測するのである。

次に氣球及風を揚げる器械室を觀る、五六坪の八角堂に似た建物で一方だけが開き中央に〇、七種のピアノ線を卷付けた捲揚機が据付けてある、何れの方位にも飛揚せしめねばならぬので、此の建物全體が三百六十度グル／＼回轉する様設計されてある。

尙風は坊間販賣する飛行機風と同型で其中央に高度、溫度、濕度を同一のドラムに自記する頗る簡單なる觀測器を懸垂して揚げる、大きさは六尺四寸もあるが頗る安定が善い相だ、生憎雨模様为天候で揚げる所を見られなかつたのは遺憾であつた。

見學を終り應接室に戻り辨當を濟せてから毎日ラヂオの天氣豫報で御馴染の不連續線や先般金屬製のゴンドラに乗りて成層圏迄昇つたピカード教授の話等有益な御話を伺つたが餘り専門に渉るから此處には省略する。

此の氣象臺も一ヶ所丈では如何とも成績を擧げる事が出来ない。と云ふて現今の財政では増設は到底覺束ない故、各地の飛行場で一定の時間に飛行機に依りて觀測をなし其結果を集むれば簡單ながら高層氣象圖も出来る譯、さすれば地上の天氣豫報も一層精確となり第一航空方面も其恩恵を蒙る譯ではあるまいか。陸海軍、文部と協議したら此の位の事は出來相に思はれるが如何なものか、實現さしてほしきものである。兎に角燈臺守同様、人里離れた原中に御不自由な生活をされ總てを捨て、研究に従事さるゝ臺員諸君には萬腔の敬意を表する所である。

歸途牛久あたり迄散策する豫定であつたが曇後雨と觀測されるので内田氏に厚く禮を述べて辭し、自動車にて土浦に向へば程なく濱街道に出で仙臺様が御通りの頃から生えて居た様な枝振りの好い老松の並木道を通り、櫻川を渡れば土浦の町、想像以上に繁華なるに驚き驛に着けば丁度二時二十六分發車に間に合ひ、豫定より二列車早く四時十一分上野驛に歸着す。此經費一人當り二圓十五錢。

中山道六十九次驛路の旅 (第三回)

期日 九月十三日(第一日曜)

集合 午前六時四十分上野驛第十四出札口前

發車 午前七時五分(新潟行)

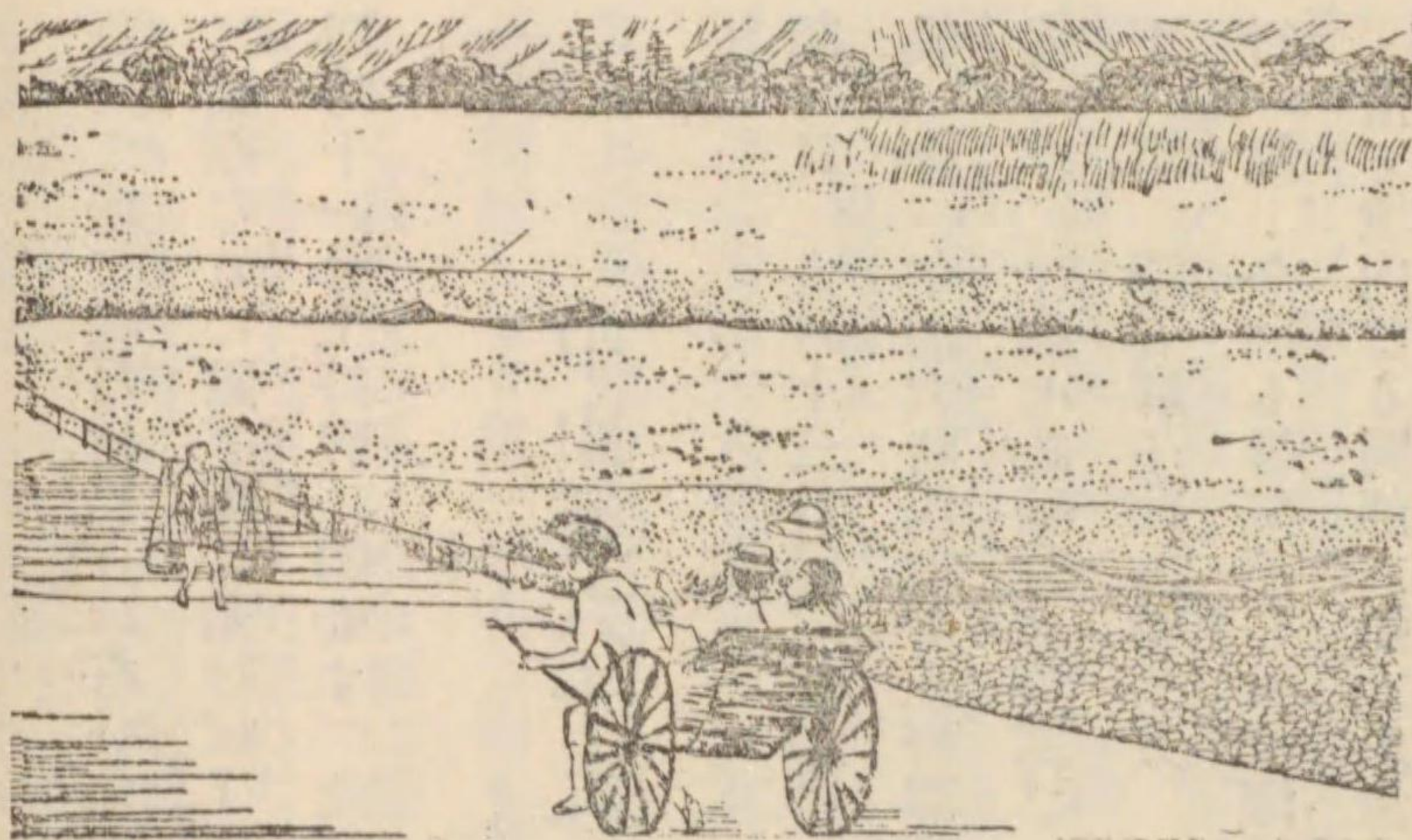
下車 深谷驛午前九時三分

行程 今回も暑氣烈しき故深谷驛より直ちに乗合自動車に搭乘、普濟寺前にて車を捨て境内なる岡部六彌太忠澄の墓に詣でる。六彌太は人も知る如く源平の戰に薩摩守忠度を討つたる猛者なり。附近なる清心寺に忠度の塚、忠度櫻あり、旅行者に忠

本庄 神流川 新賀野町 高崎 磯安部

九月

度は縁故なきにしもあらず依つて訪ね見んに前進して本庄宿に郵便局を煩し、更



明治初年の神流川

に進んで武藏上野の國境なる神流川を渡り、新町に入り又倉賀野に到り、何れも局を惱ますべし。萬葉集等によめる佐野の船橋は此邊りなり。謡曲鉢の木佐野源左衛門は此地に附會せしなり。かくて高崎に入り名所を巡覽し、あはよくば安中より磯部で一風呂の計畫なり。随つて乗るも歩くも其時々の相談に任せ、行けるだけ行き其日の内に歸京す。

天候 不拘晴雨

地圖 二十萬、宇都宮、長野、五萬、深谷、

高崎、榛名山、富岡

用意 辨當、水筒、雨具等

三一六

中山道六十九次驛路の旅（紀行）

第三回

喜 多 八

汽車の都合で本庄驛迄直行した。赤羽驛で桃太郎ちゃんと吉川氏が乗り込む。決死隊は六名と相場が極まつたり。例の通り郵便局でスタンプを頼み、今年の六月十五日から開通した伊勢崎街道へ行く途中の坂東大橋を見るべく、町の中途から右に曲り、不圖左を見ると鬱葱とした森があるから、石段を登ると、阿夫利天神社と云ふがある。天の字丈け餘計な氣がして、拜殿を覗くと、阿夫利神社と天満宮を合祠した爲めの新命名らしい。川崎第百銀行の口で、少々擦ぐつたい、菅公も微笑して居られる事だらう。其森の樹間から大橋は能く見えた。

一體、阿夫利神社とは、相摸の大山の阿夫利神社で、昔は中々盛んだつたので、各

九月

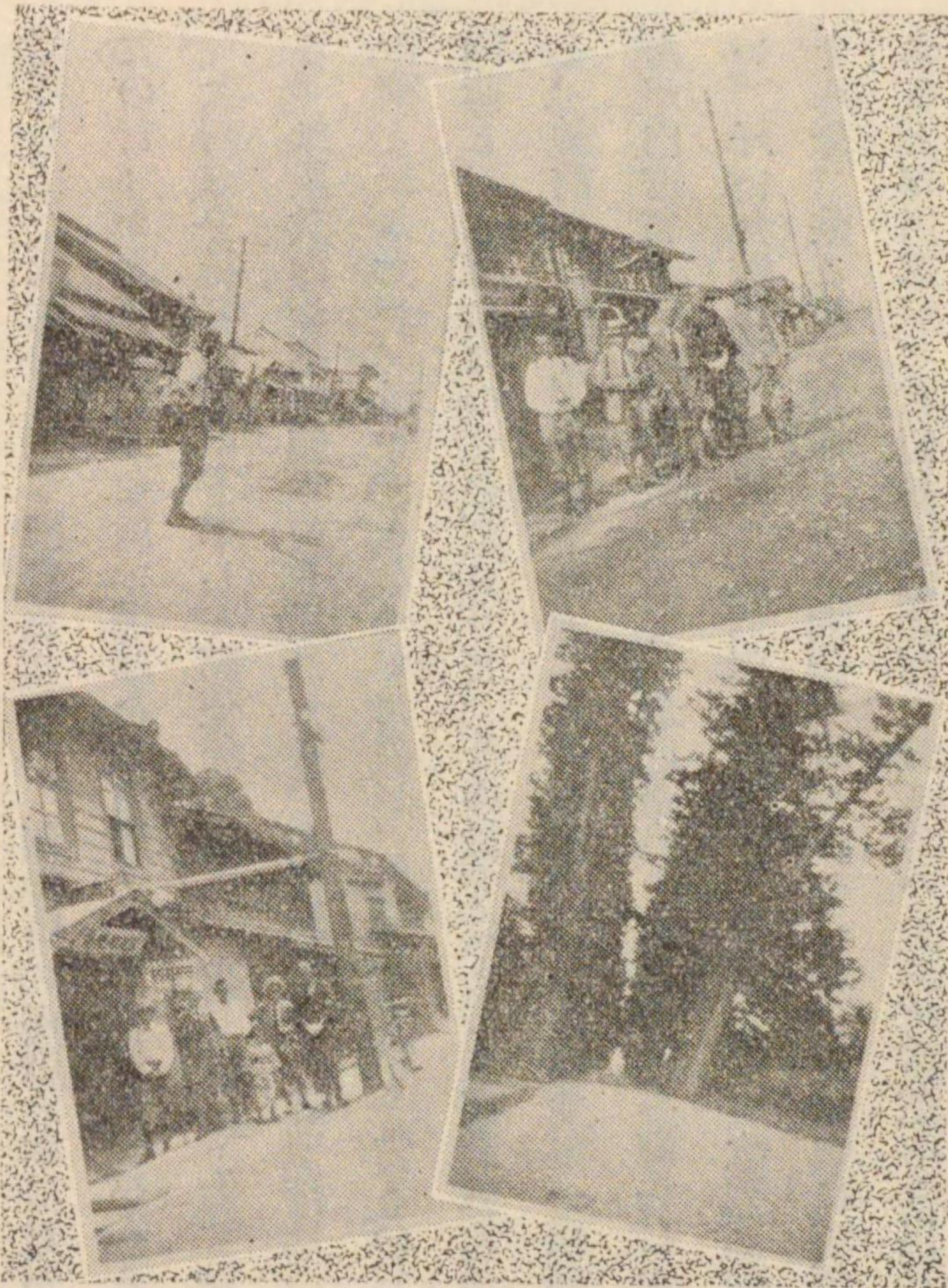
三一七

所で勸請して祀つたのが、茲處にも在るのだらう。昔の髮結床の符牒にセキソンといふ言葉がある、それは盆山と稱して、大山石尊大権現へ出掛ける人の仕事が多數なので丁寧にして居られず、ぞんざいにするので、遂には、好い加減な、所謂なぐり仕事をするのを、オイせきそんでやれと下剋に親方が言ひ付けたものだ、其位石尊参りが流行してた。が此石尊、即ち石が尊といふ事がわからない。大山の御神體は神祇志料に「祭神、大山祇命」沿革、後村上天皇正平元年六月社司に中祓を科す、木社の祟あるを以てなり云々」とあるが、之は、大山といふ言葉に誤られたので、大山といふ名の山は、各所にある、其近所で一番大きな山だから、大山と付けたのさ、併し、石が本體だといふ説もある、「式内阿部利神社、祭神、烏石楠船尊、天平勝寶七年、良辨僧正の開闢」と或る書にある。段々調べて見ると、輟耕錄卷四十四に「蒙古人之禱雨者、非若方士然、至於印令旗劍符圖氣訣之類、一無所用、惟取淨水一盆浸石子數枚而已、其大者若鷄卵小者不等、然後默持密呪、將石子淘漉玩弄、如此良久輒有雨、云々、石子名曰鮮答、乃走獸腹中所產、獨牛馬者最妙、恐亦是牛黃狗寶之屬耳」とあつた。此石は、俗は「ムマノタマ」又「セキソン」或は「ヘイサラバサラ」と云ふ者で、此文の如く

雨乞に用ゐたものだ。大山を雨降山と云ひ、神體が石だと云ひ、石尊しと云ふも、此蒙古の風俗が日本に来て、御神禮の石、即ち鮮答に雨を禱るに、國の中の大きな山を崇拜して、此大山に来て雨乞したのが、何時頃から雨降木などが出来て、自他混淆したのだ。オヤ／＼こんな所で道草をして居ては、さきがつかへる。急げ／＼。

次列車で新町に途中下車して郵便局を襲ひ、少し後戻りしてお菊稻荷大明神に詣でる。皿屋敷のお菊の親類かと思つたら、左に非ずで、昔、伏見のお稻荷様を勸請し、お菊と云ふ女が、社守りとなつてたのが、豫言者で中々當るので、誰云ふとなくお菊稻荷と云ふ様になつたのださうだ。今の社守はとても商賣氣たつぷりで集印連が頼むと、神前へ供へて、ドンドコ／＼太鼓を叩き始めたので、一同顔を見合せた。子息さんが内務省の神社局に長く居て、最近奈良の春日神社へ轉任になつたのが御自慢らしい。好い加減に引下つて、次列車で倉賀野に車を捨て、次列車の時間を見ると、零時十八分、乗るか。歩くか。大分争議があつたが、兎に角に郵便局へといふので前進すると吉川君が、郵便局は直きだと云ふ。ハテ未だ街道へも出ないのにと云へば、イヤ電話のケーブルが這入つて居るからと云ふ、成る程直ぐだつた、局で乗合の時間

を聞く弱虫もあつたが、桃太郎氏逸早く外へ出て橋の袂の別嬪を捕へて、自動車の停



上右 本庄町市街 上左 問ふて居る桃ちやん
下右 安中の 下左 覗いてるモシモシ

留場を聞いてゐるのを、彌次さん後からパチン。御覧じろ此寫眞を。

街道へ出て乗合の來るのを待つてるとハイヤーが來たので、談判して一同乗り込む。

安くしなきや後から首を締めるなんて物騒な口の達者な連中許りなので、運轉手君ビツクリする。高崎では大信寺より外に無いからと、運轉手君に命じた處が、此運轉手君よく知らない。其處は駿河大納言のお寺だよ、今日は御葬式で僕達は東京から來たのだと桃ちやんの茶目に、運君イヨ／＼面喰つてお寺を間違へ本願寺へ横附けにされぐる／＼廻つてヤット大信寺に着いた。忠長は御承知の家光の弟で、政策上から此處で詰腹を切らされ二十八歳を一期にあえなき最期を遂げた氣の毒な人だ。年に一度より明けぬといふ唐門を明けて貰ひ墓前に記念撮影して印を押捺して貰つた。丁度縣會議員の選舉の支度で、大きな本堂は宣傳ビラで一杯だ。寺を辭し郵便局から停車場前へ來て蕎麥屋へ飛び込んで晝飯とした。腹も出來たので前進／＼と云へど、一同前回の乗り癖がついて、どうも歩行き濫り頭ハイヤーを交拂して安中へ駛走する事となる。ドウモあるくよりは樂ですな。オヤ／＼貴公は此年になつてヤットそんな事がお分りか。彌次公憤激して曰く、ドウモ怪しからん、コレカラ自動車に乗らうと云つたり、それに賛成した奴から五十錢宛罰金をとるぞと、初めて罰金制を設置せられたり。皆揃つて罰金を出したら其金は何になるだらう、此金の行衛は餘程詮議をせねばなら

ぬ問題である。そんな事には貪着なく車は進んで板鼻より安中に着く、郵便局を煩は

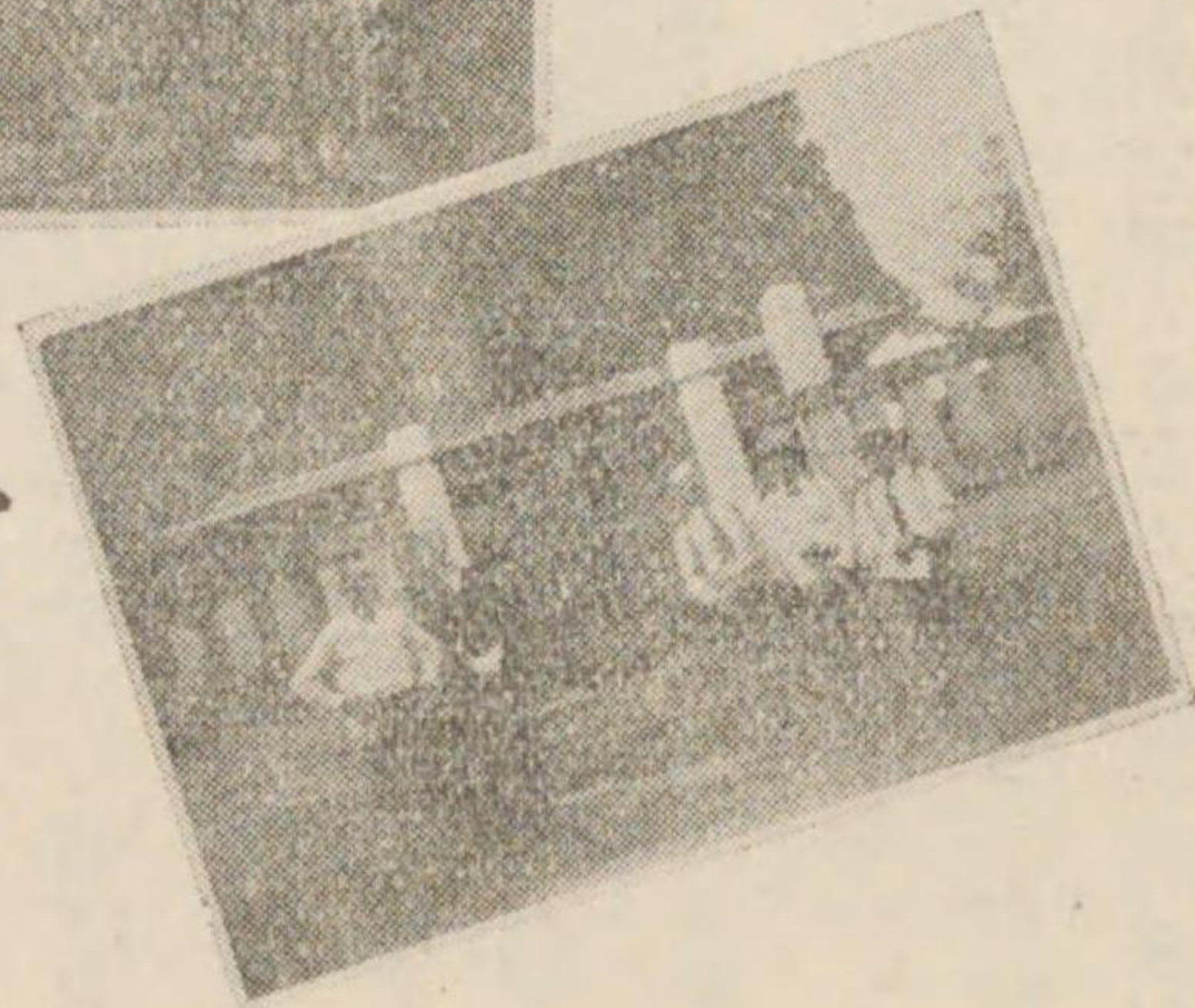
し更に進んで街道の並木を見る、實に立派なものなり廻れ右して今度は板鼻の郵便局。此處は無集配三等局故、日曜の午後は休みなれど、局長に依頼してスタンブを頼めば、老局長快く應じて呉れ



新町のお菊稻荷大明神祠



駿大河納言の墓



岡部普濟寺
六彌太の墓

たのに感謝して車を進める。

オイ喜多公、何を考へこんでるよ。

ナアニサ、阿佛尼の十六夜日記は和歌で持ちきり、芭蕉の奥の細道は俳諧で通ほし一九の膝栗毛は狂歌づくめだから、此木會驛路の旅は川柳でいかうと色々やつたがこればかりではお慰が薄いから、あすこの山の頂に、たつた二本残つてる松の大木で、五言をやらうと思つてよ。

ナニ、午夢が食ひたい。

アツア、町人は情けない、直ぐ喰ひ物にこだはる。五言だよ、五言絶句だよ。詩だよ。

亨々雲際聳 高翠幾千年

雙鶴栖來久 時鳴聖代縁

ウフ、。白髪三千丈が聞いて呆れらア。幾千年なんて、さつきの大信寺の松だつて三百年だつてぢやないか。

ソレがソレ繪そら事よ。

何んだか變な言ひ譯だな、そして鶴なんか居ないぢやないか。

松に鶴はつきものだ、マア己れの首が長いから、ソレデ間に合はしとくさ。

先月は馬の面と比べつこをして、今月は鶴の首か。
鳴く聲鶴に似たりけり。

丸で動物園だ。アハ、ハ、ハ、

車は遠慮なく高崎驛に戻る。

三時十二分高崎を出發し、四時八分岡部下車、六彌太忠澄の墓に詣でる。驛より約十町にて、玉龍山普濟寺門前に着、寺背の桑畑を二町餘り行くと、二基の墓あり、石の玉垣を廻らして、嚴重に圍ひあり、後ろに樹てる杉の大木は由緒ありげに見ゆ。辭して、深谷驛近くの石流山清心寺に、薩摩守平忠度卿の墓を弔ふ。五輪塔あり、並びて青石の板碑の上部の缺けたるあり。阿字の梵字と下部の、光明遍照の四句の偈を讀み得。全くの供養塔なり。忠度櫻は、植繼ぎした者と見えて、未だ若木なり、是ではたゞの櫻といふべきか。時に薄暮となりたれば急ぎ深谷驛に至り、六時十七分六三四列車中の人となる。此經費一人當り三圓六十八錢。

多摩川の梨ちぎりと川遊び

期日 九月廿日(第三日曜日)

集合 八時半新宿京王電車

發車 午前九時頃

下車 多摩川原終點

行程 春の櫻花の稻田堤は秋は甘い梨が實り稻毛、長沼の梨として東京市場で有名だ。多摩川原より京王閣の前の矢野口の渡しを渡り一キロ程歩き丘陵の見晴し臺八州園に上る、實る稻田の中央を多摩川は流れ下には無數の梨園がある、正面雲間に日光那須筑波が現れる時がある。西に大菩薩連嶺より以東の秩父奥多摩の山々も澄み渡つた空氣に浮び出て居る。餘り知る人もないがよい眺である。それより丘を下り押立の土方氏の梨園につく、樹よりちぎりと新鮮の梨を餉食し、やがて多摩川の流れに來り水邊で中食をとる。

稻田堤
矢野口

押立

多摩川畔は武藏野と共に秋が一番よい、堤防のすゝきと虫の音楽は是非都會の人に
見せ又聞かせ度い。川ではもう鮎も色が濃くなり下り始める。
水も清く澄んで居るから日が照れば泳ぐのもよからう。

歸路 多摩川原、或は飛田給驛

天候 雨天中止

用意 辨當

とてもおいしかった多摩川の
梨ちぎり(紀行)

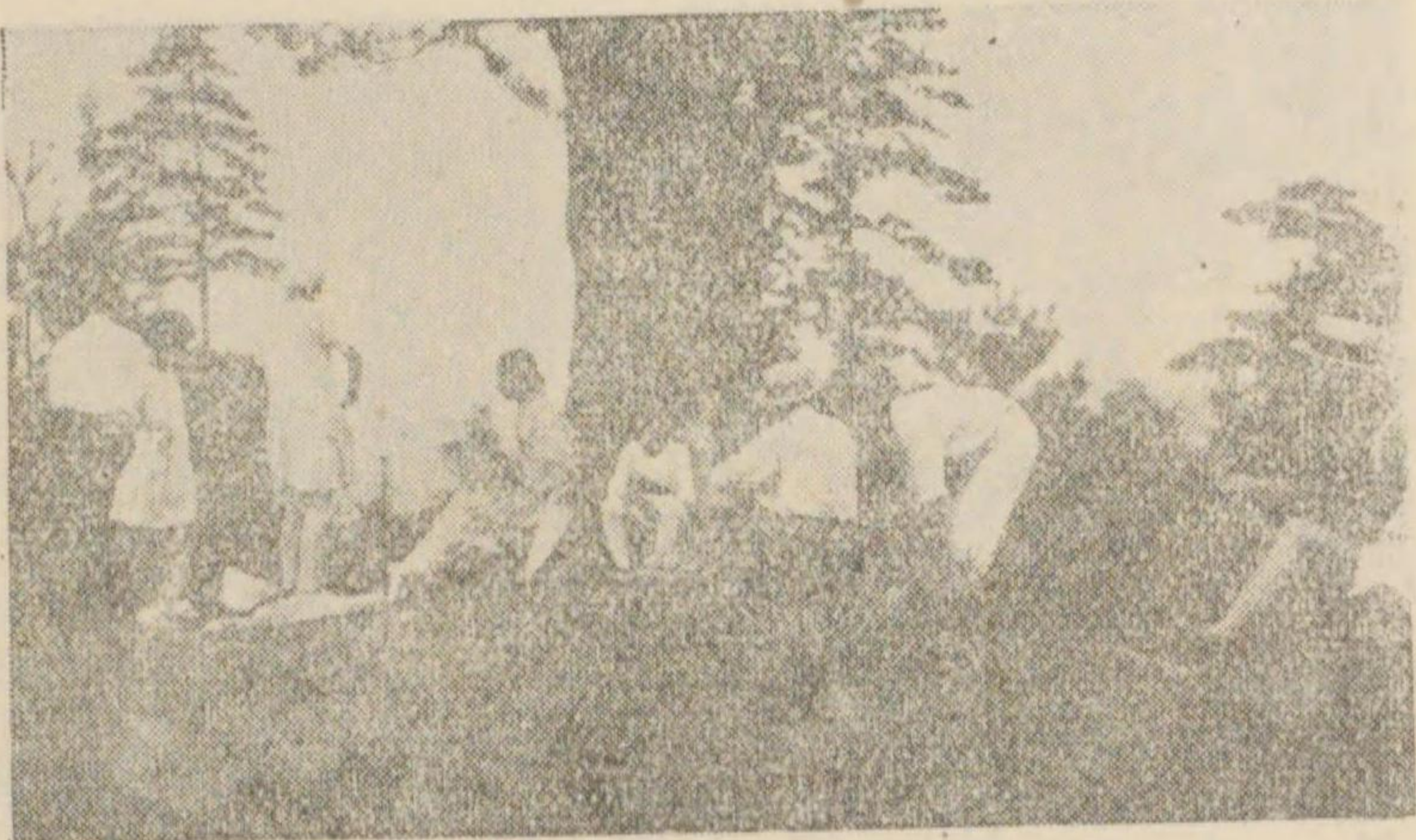
K Y 生

JOAK 「明日は秋晴れで温度昇るでせう」

アシタテンキニナール

夜が明けた、珍しい上天気だ萬事OK。新宿に行けば既に幹旋主任石井氏の顔が

八州園の丘上にて



師。ボートに興する若き男女。何だか泳ぎたくなつた。多摩川は何時見ても氣持が良



さよの味たつが下とリラブ

を開く。「おゝ素晴らしき展望」時正に十一時半、小松原氏用事の爲、同所より歸らる。

末廣に猶もあふげる大江戸の
水のかなめやたま川のさと
多摩川に家を持たれる石井氏は幸福だ。東京の塵に染まず、新鮮な空気を吸ひ清らかな水を飲んで吞気に暮して居らる。だからあんなに大きな身體になられたのだらう。

菅の渡を渡り、右へ稲田堤の葉櫻の下を行く、自轉車に乗つて來られた半田氏の弟さんに出會ふ。約一時間にして八州園に着く、急な細道を登り、見晴臺に出れば、頭上に塚らしき物あり多分何人かの墳墓ならん、祠に萬延元年庚申六月の刻あり。眼下に武藏野を見下しながら晝飯

少憩の後、山を下り、火の見櫓を目當てに、左へくと歩む、稲は黄金の波をなびかせ、無数の梨園には美味さうな、熟した梨が賣られる日を待つて居る。

あゝ美味さうだ、腹の虫が承知しない、早く喰べたい、誰の顔も皆欲しさうな顔に見える、おや誰か涎を垂して居る。間もなく、目的地の土方氏宅に着く、此邊は府下北多摩郡多摩村押立との事、待兼ねた一同は梨棚を目懸けて突撃を開始する、ナイフの閃き、手の動き、忽ち残骸は此處彼處に山積す、ちぎりたての梨はとても美味い、梨は日没が一番美味いさうだ。一氣に三箇平げた、大きな口をあいて嚙る人、小さい口して喰べる人、此所口の展覽會だ、撮影子は絶好のチャンスと撮影に懸命だ、あまり熱心すぎてアツ蓋のまゝパチリ。

飽食後梨籠を土産に、二時半散會。南部電車矢野口へ出て、登戸乗替へ歸途に就く矢ノ口は新田義興戦死の場所と、眞偽不明。坊ちゃん嬢ちゃん、又來月も愉快に遊びませう。

秋冷の氣漲る上高地へ附白骨温泉の入浴

期日 九月廿四、五日

集合 廿三日午後九時卅分飯田町驛

發車 午後十時二十五分

下車 廿四日午前八時島島驛

行程 直ちに自動車にて梓川に沿ふて中ノ湯迄上る。此處から徒歩で上高地まで平易な川沿上り二軒と坦道が四軒で途中大正池と田代池を見て正午には旅舎に着く。晝食後散歩に出掛ける。夏期混雜するキャンプ指定地の小梨平も今は清掃されて穂高連峯が秋空に浮き出して居る。自樺林や山毛櫸林の森林帯を逍遙して明神池に至れば、水は紺碧で岩魚が悠々として浮遊する處は全く一幅の南畫である。翌日は、白骨温泉へ廻つて乗鞍岳へ登山するも、徳本峠を越えて淺間温泉に一浴して歸るも自由である。

飯田町驛
島島驛
梓川
中ノ湯
大正池
田代池
小梨平
穂高池
明神池
白骨温泉
乗鞍岳
徳本峠
淺間温泉

松本驛

歸路 廿五日午後七時四分松本驛發翌午前五時二十五分飯田町驛着解散

天候 不拘晴雨(荒天の場合は行程一部變更の筈)

用意 輕裝(登山の方は普通登山の仕度)

新秋の上高地(紀行)

天 楓 生

国立公園の候補地として、先づ指を屈せらるゝ上高地の新秋を訪ねんとする一行五名。飯田町驛へ集合したのは九月廿三日の夜。登山服姿の元氣な人達で驛頭は可成りの賑かきを見せて居た。神田氏、河村氏などは既に先着で「遅いですね」など、先づ一本參る。

松本驛へ下車したのは翌午前七時十二分。豫定では島々迄筑摩電鐵に依り、それから自動車で、となつて居るが、寧ろ松本から直ちに自動車に乗るが便利ですよ、K君から注意されて居たので、驛前の「上高地方面行」と大看板の出で居るバスの客と

なる。机上の旅行案で考へると島々まで電車、之から自動車と立案するが至當の様に思ふが、島々まで電鐵に依つても同所から矢張り、松本を發したバスに乗り移るのであるから、最初からバスを選ぶ方が適當なやり方であると思ふ。白骨温泉へ立寄りたいたので、切符を澤渡まで買ふ。

島々で、なつかしい梓川に始めて出逢ふ、何となく舊知に邂逅の感が起らないでもない。これまでは平凡の島路も、川沿ひとなつてからは風物頓に一變し溪流の美しさを味ひながら進むのである。奈川渡からは路幅が狭いので、小形の自動車に乗り換へることとなる。切符は共通で差支へないのであるが、會社は變るのだ。前川渡を経て澤渡へ着く、一寸した立場茶屋がある。白骨へはこゝから左折して行くのが本道であるが、更に十丁程先の湯川渡まで乗れば徒歩行程が幾分なり減ります、と運轉手の厚意に従ひ、湯川渡で下車、茶店に小憩して、白骨温泉行の小徑を、湯川の清流に沿ふて登る。

登ること一里、約一時間半を費して白骨温泉着、湯元齋藤旅館に入る。この温泉は乗鞍火山群十石ヶ嶽の東麓に位し、海拔四千二百尺、山懷であるから大した眺望はな

いが、極めて原始的な、趣の深い温泉場である、昔は白船温泉と稱したのであるが、何時の間にか之が轉化して白骨(シラボネ)となつたとも云ひ。泉質が硫黄泉なので、浴槽等總てが眞白くなつて居るので其様子から出た言葉であるとも云ふ。旅舎も四軒程あり、中にも湯元齋藤の如き、客室百餘の廣大なるもので、當日の如き六十餘人の滞在客ありと、湯量も豊富にして、胃腸病に効ありと。山間の温泉としては盛んなる方なるべし。

晝食、入浴、小憩の後宿を出て、元の路を湯川渡さして一氣に下る。下りは早し、約一時間にして湯川渡の茶屋に着き午後二時四十分發中の湯行き自動車に乗れた。これより谷は餘り深からざるも、山は益々狹まり、路も之に伴ひて狭く、辛うじてハイヤーを通するのみ。進むに従ひ、溪流の美、奇岩怪石の妙擧げて數ふべからず。梓川は單に夫れ自身の溪谷美としても立派な存在である。Y君の如き、耶馬溪以上だと賞讃の辭を發する、敢て過褒ではあるまい。自動車終點中の湯着三時十分、旅舎五千尺から出迎への若者に、リュックを託し一同身輕と爲つて河畔を進む。

中の湯は従前は單に湯の沸き出るに任せ旅館はなかつた。現在の中の湯旅館は大正

十三年の新設なので總てがまだ新らしい氣持の良い現代式旅館で、此家一軒きりであ

る。中の湯を出て

行くこと數丁、有

名な釜隧道がある

長さ約四丁、非常

なる昇り勾配であ

ること、途中で著

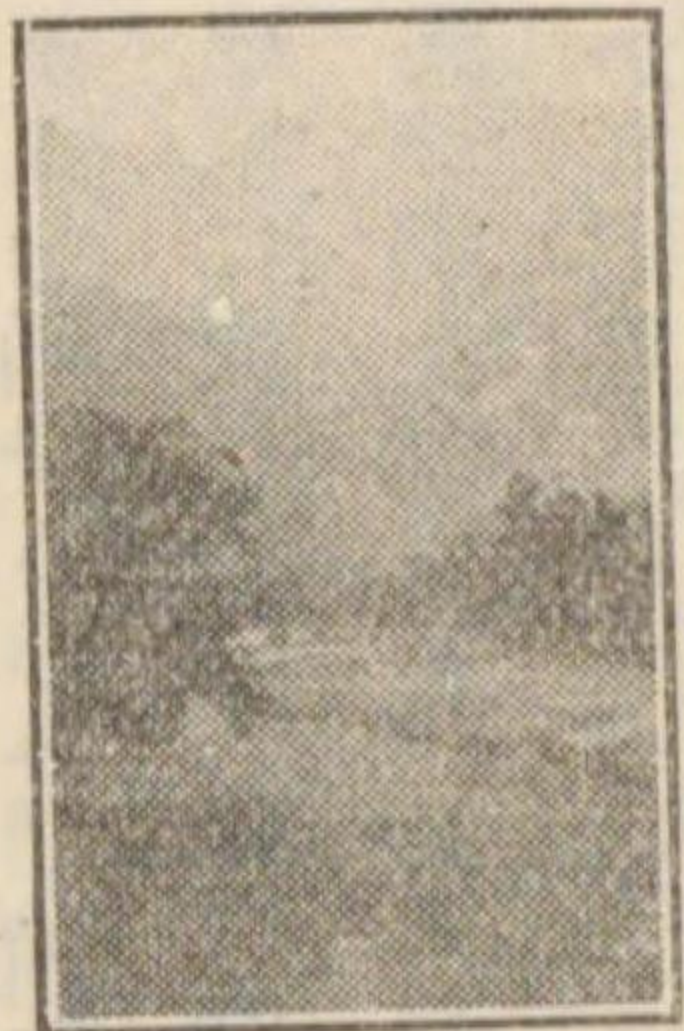
るしくカーブして

居ることゝを以て

著はれて居る。こ

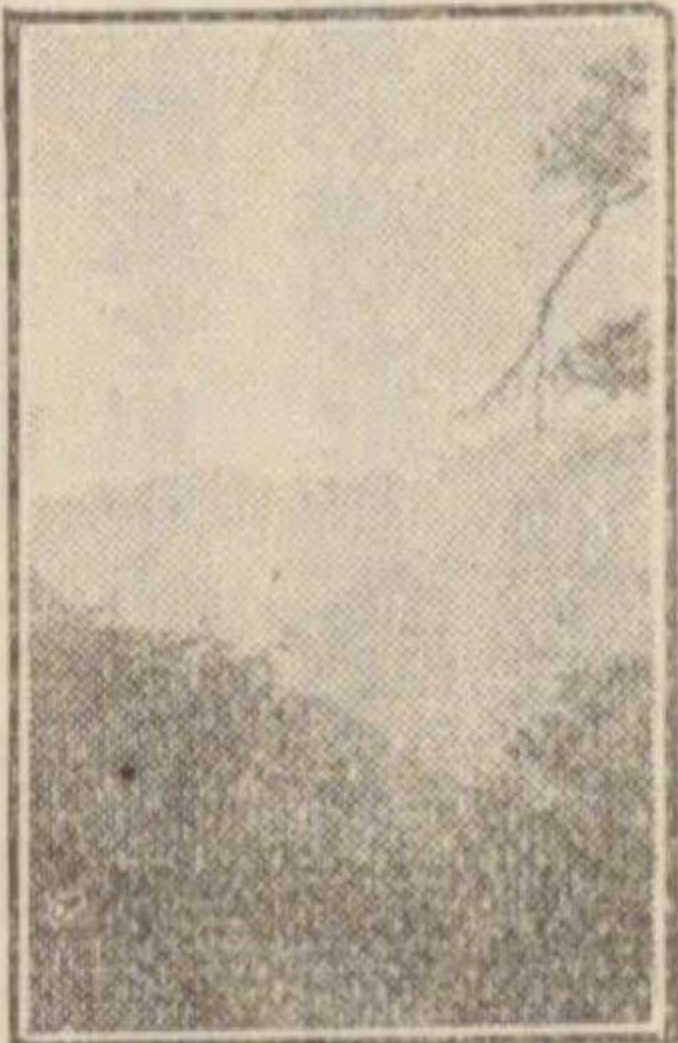
れを越えると俄然

噴炎すさまじき燒



→ 河童橋より

穂高の雪
溪を望む



← 徳本峠
よりの穂高
の偉容



→ 徳本峠頂上

← 大正池



↑ 白骨温泉
への岐路



嶽の荒れ姿が先づ眼を遮ぎる。更に數丁を進むと優しくも又奇觀を呈する大正池が左手に姿を現はす、既に身は上高地の人となつて居るのである。

大正池は、上高地最大の池であつて大正四年六月、燒ヶ嶽の爆發により溶岩の流れが梓川を堰き止めて現出したものである、即ち一夜にして針葉樹や、白樺の原始林であつた處が、長軸一六六〇米突餘の湖沼と爲つたわけである。然も今尙、或は向後相當期間、水中に枯死した喬木が其まゝに残つて、一種の奇觀を呈して居る。他の湖沼に全く類の無い現象である。更に進んで右折すれば田代池、左折して梓川を渡ると上高地温泉ホテルに達する。私達は若者に案内されて熊笹繁る中の小徑を尙進むのであるが、右方に峨々として聳ゆる霞澤嶽、續いて奇巖疊々たる六百山、前方に奥穂高、前穂高、西穂高の偉容が眉を壓する。燒嶽は既に背後のものと爲り、梓川の清流は脚下に淙々の聲を立て、居る。我等一行は上高地の天地に完全に包圍されたのである。薄暮、旅舎五千尺の玄關に立つ。

上高地、往昔は神河内の字を以て呼ばれて居た。現代的な上高地よりは、何となく神秘的な感じのする神河内の方が相應しいやうに思はれる。此地海拔五千尺、東西四里、南北二十丁、中央を日本アルプスの精を集めし梓川が貫流し、千古斧鉞を入れぬ處女林は白樺を交へて美しき林相を呈し、大正池の妖艶、田代池、明神池の神秘、他

に類を見ぬ河畔の化粧柳、とかう部分的に見るより、河童橋の中央に立つて四邊を展望した大景觀、天地の間にかゝる大自然の莊嚴を見得る喜び、私達は之等の總てを筆に盡し得ないを只々遺憾とするのである。

紅葉の上高地は十月十日頃を以て最とする、夏は混雜するので氣分が良くない、新緑の初夏は又捨て難い趣がある。上高地はアルプス登山の玄關口であると共に單獨の遊行地としても旅人の一訪を要する處である。翌早朝五千尺旅舎を出發、海拔七千尺の徳本峠を越え、島々着午後三時半、自動車にて淺間溫泉富貴の湯に一浴、旅塵を洗ひ神心共に爽快を覺えたり、松本發午後九時五十六分、新宿驛着午前六時十二分歸京解散、此經費一人當り十六圓三十錢。

川治溫泉に名月を賞し高原山を越えて鹽原へ

淺草雷門驛

期日 九月廿七日(第四日曜)
集合 二十六日午後一時半東武淺草雷門驛

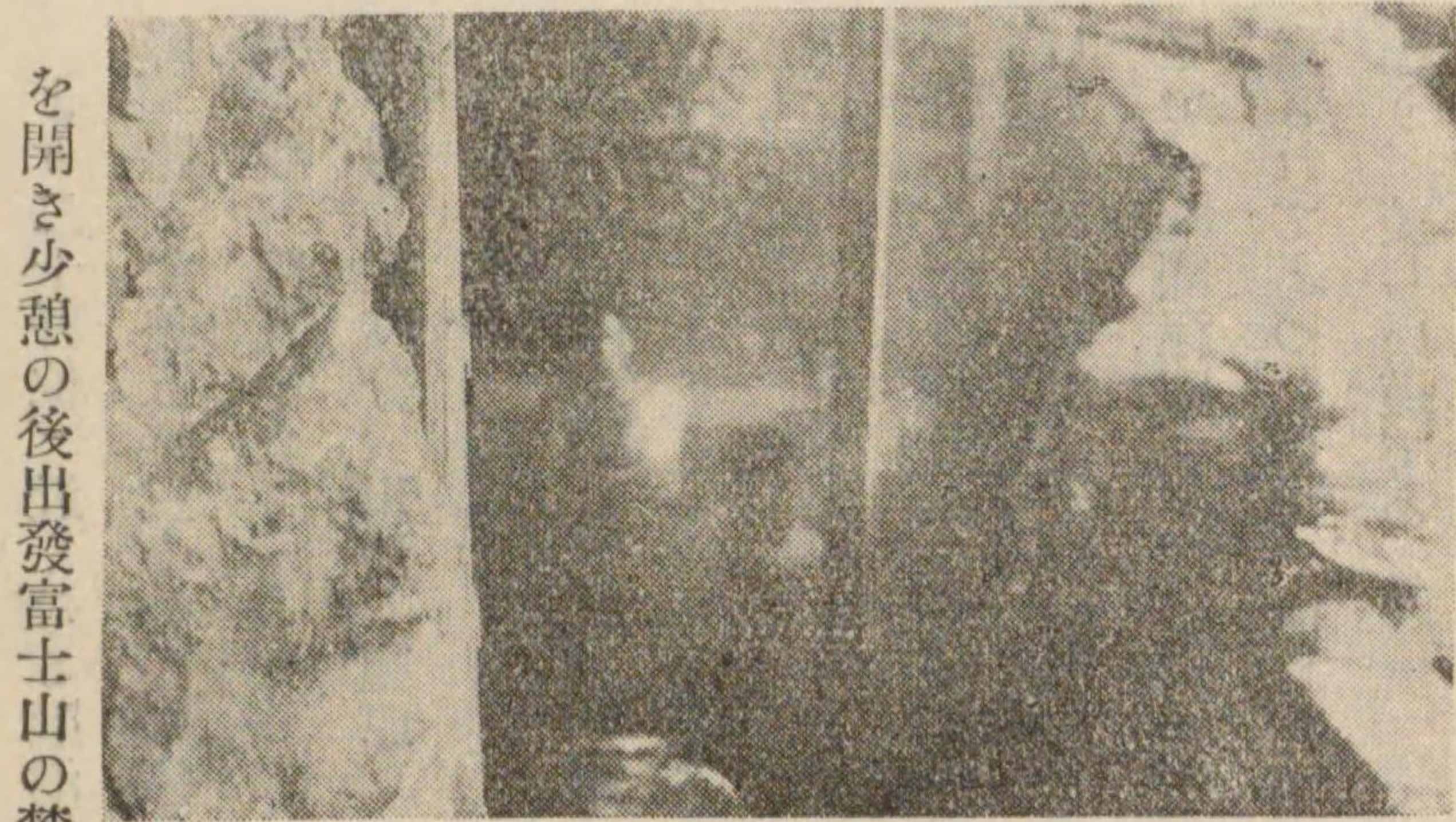
發車 午後二時

今市

下車 今市驛午後四時卅二分

行程 驛前より自動車にて六時頃川治溫泉に着直に川岸の岩壁を穿つた自然味豊かな溫泉に飛び込みゆつくり伸びながら、川向ふの山から昇る中秋名月を觀賞する、何と詩興の深い事ではあるまいか。

翌早朝出發直に高原山越えにかゝる川治村の祖先の住居跡を探り秋草妍を競ふ山路を行けば一時半程で鶏頂神社の石の鳥居に着く(一二三二米)程なく降り路となり檜、栃、栗等茂る鬱蒼たる原始林を通りて十一時頃鹽原溫泉の湯元なる新湯に着く、入湯、持參の辨當



川治溫泉の天然浴槽

を開き少憩の後出發富士山の麓を廻り幽邃な大沼を過ぎ二時頃鹽の湯に着く(川治

高原山
鶏頂神社
鹽原
新湯
大沼

より二十粒位) 近くなる鹽湧橋より自動車にて西那須野へ。

歸路 午後五時三十分西那須野驛發八時十分上野驛歸着

天候 雨天中止

地圖 五萬分、川治、鹽原

川治と鬼怒川温泉に悠浴の記(紀行)

成 嘉 生

朝から大雨沛然として降り出して、午後に至るも歇まない。會報には雨天中止と記してあるが鷺田、松山、豊間根三氏の熱望で決行する事にした。大雨とて電車もがら空きで一時間程眠つて行つた。下今市に下車すると渡邊旅客係長の御配慮で自動車が用意されてあつたので、直ちに川治へと會津街道を直行する、途中松並木が蒼鬱として茂り、美しい道である。

三百年前、松平正綱公日光廟工事を督せる折遠大なる計畫の下に植付けたものであ

る。午後七時に川治温泉へ着いたが、雨は少しも小降りにならない。早速階段を三十程降りて、川岸に穿た浴槽に飛び込む。平地から三十尺も下つた川岸に湧き出る湯をそのまゝ自然石を浴槽としてトタン板の雨覆があるだけで、男鹿川の水勢物凄く、餘りに原始的に過ぎて、少々氣味が悪い、薄暗い提灯の光では、お互の顔は勿論、御婦人の聲はするが何處に居られるかそれすら判らない、提灯が故障で時々消えるし、湯はぬるいし、出るに出不れず少時浴槽儲めになつた。後で聞くと湯の廻りに猪が徘徊して居るので退治せんとした勇士(?)もあつたとか。生憎名物ツグミの御馳走が喰べられなかつたが他に海の物山の物がたくさんあつて、其でも足りないで十五夜のお供物まで失敬して、大分メートルを上げる、イーグル氏が明日は、山登りですよと心配すると、明日は高原山の巻狩りをするとして、SさんTさん大元氣である。

雨は夜通し降り續いて朝になつても歇まない。男鹿川の水量が大分増して、自然の浴槽の中へ水が入り始めたので、ぬるくて入浴出来なくなつた。川治温泉は仙巖岳の山麓男鹿川の溪流に沿ふて居つて、僅か下ると鬼怒川の本流に出る。會津街道の要路で川俣温泉への分岐點に當る、三、四年前までは山奥に隠れた湯の村として吾々旅人

の懐しい處であつたが、近年急に開けて、今ではカフェー、藝妓家まで出來たには驚いた次第である。これも鬼怒川温泉發展の影響である。川俣から鬼怒川溪谷に沿ふて平家塚等を探勝して來る人、山王峠を越えて昔の儘の會津街道の宿場を訪れて來る旅人は餘りに開けた川治に失望するであらう。近江屋旅館も、以前は入口の土間に、リュークサク、草鞋藁等が積まれて、夕方になると盥で重さうな足を洗つて居る旅人を、好く見かけたが今では若い艶い女達が、づらつと並んで旅人を歓迎(?)して呉れる。筆者は、川治から會津街道を途中田舎宿に一泊して山王峠を越えて田島町まで、お歩きになる事を希望する。自動車も通らない靜かな山道である。田島から若松の間には至る處野趣に富んだ出湯の村があつて旅人を慰めてくれる、雨が少しも歇まないので高原行は中止として鬼怒川ホテル悠浴と決定して、自動車にて鬼怒の碧流に沿ふて下る。途中出士の瀧、逆川の瀧岩削橋、濱子の中島、御光岩、兎跳等の景勝があつて溪谷も深く、萬山錦繡の壯美は鹽原より遙に勝れて居る。特に藤原附近には山藤多く六月頃は美しく咲き揃ふて新緑の美と共に充分探勝に價する。約三十分程でホテル着、雨中に拘らず満員の盛況で、吾々は特に廣い洋間に納まつた。眺望も中々好く、設備

も近代式で、洋間と日本間とあり、殊に浴場は廣く大小數種あつて他に社交室、娛樂室、談話室等もあり都人士には適する。只食事、飲物等高價の割に粗末で我々下戸黨には少々不十分である。附近關東の耶馬溪と稱して居るが、川治まで行かなければ充分探勝は出來ない。此地も日光に接近して居る關係、一方東武鐵道の宣傳の結果、非常な發展振りでホテルも目下増築の豫定とは驚き入つた次第である。交通の便と宣傳と賃金割引の三つが齎した結果であると信ずる。歸途省線今市驛までドライブして歸途に就く、此驛も近年淋びれて田舎の小驛になつてしまつた。プラットホームにある名勝案内札には二宮尊徳翁の舊跡と鬼怒川發電所のみ掲げられ、現在多くの人達の訪ねる名勝地の案内は見當らない。是では日光行の準備をわざと往復停車させる鐵道省の深切なるものが吾々には判らない。此經費一人當り金十三圓五錢。

三ツ峠山と河口湖

期日 九月二十八日

九 月

飯田町驛

小沼驛

下暮地

達磨石

大曲止

馬止

八十八大

河口湖

富士吉田驛

九月

集合 廿七日夜十一時飯田町驛

發車 飯田町驛十一時卅五分

下車 小沼驛午前四時

行程 驛前が直ぐ登山口で右折して下暮地を過ぎ、山の神邊で少憩の後、登り始め

達磨石、大曲、馬止を経て石割權現に出で、八十八大師を過ぎ、直下百米突に及ぶ

屏風岩に着く、其懸崖に不動の瀧が珊々として懸るあたり、何人も歡呼の聲を揚げ

ざるを得まい。更に進めば目指す三峠山(一七八五米突)に達する。頂上の眺望は壯

大無比、全く申分無い富士の展望臺である。三峠の特色は岩山の奇、富岳の美、而

して之れに加ふるに河口湖及西湖の麗にある。

歸路は一氣に約六軒の坂道を河口村に降り、モーター船で河口湖を渡りて船津に上

陸、自動車にて、吉田の聚落に出る。此の間の旅路亦格別であらう。

歸路 富士吉田驛午後一時十七分發五時四十三分新宿驛着

用意 辨當二食分水筒

天候 雨天中止、但少雨の時は出發

三四二

地圖 五萬、谷村、廿萬、甲府

秋の三ツ峠より河口へ

石 健 生

旅程時間 飯田町驛午後十一時卅五分、大月驛午前二時四十七分、小沼三時四十五分

下暮地四時、大山祇社四時廿分、休憩四十分、達磨石六時、縁結松七時、愛染明王

石七時十分、八十八大師七時五十分、第一の水八時、夫婦岩八時十五分、權現社八

時廿分、屏風岩八時四十五分、山茶屋九時、頂上九時廿分、休憩一時間、頂上發十

時廿分、母ノ白瀧十一時四十分、河口十二時廿分、吉田一時四十五分、大月三時十

分、新宿五時四十三分着。

十年前に高尾山や武州御嶽が山遊びをする人々に考へられて居たやうな風に此三ツ峠
山は今日の東京の山黨に登られて居る。セルの單衣に下駄履で婦人連が吾々の後から
來ると例の口のよい連中は、そんな道連も同行で豫定の時間に遅れる積りかと憤慨す

九月

三四三

る。然し道路はよし僅か四五時間の山なれば、此頃の活潑な婦人連には心配無用である。樂々と吾々と共に頂上へ達して皆元氣であつた。

山行の盛んになるに従つて飯田町驛土曜日終列車は満員である。日本アルプス、秩父行の連中は翌日の勞苦を考へて靜かに眠らんとし、近くの山行連は大にメートルを上げる、この日の吾々は何だか後者の氣分であつた。色々面白い話もつきない中に汽車は猿橋を過ぎ、大月となる。直に富士山麓へ乗換へて小沼驛で下車したのが三時半中々冷氣を感じるの各各自外套を着る。驛で三ツ峠保勝會の平面略圖を貰つたから道も分らうと思つて案内は斷る。八號國道を左へ入り線路を越えたと下暮地に入る。天には冬の星賑々しく路傍には虫の聲いとも寂しい、鷓鳴は聞ゆるが下暮地の村落はまだ眞夜中の夢である。下暮地から大山祇社へ行く小徑は雨上りのためか、小石が流れにゴロ／＼して暗い足元には歩き難い。皆膝から下を濡らして四時廿分大山祇社着。夜明けの寒さ身にしみて婦人連は社の中に焚火を中心に朝食をとる、食物と火で元氣づき五時夜も明けたので出發す。もう行く手には三ツ峠山の岩壁が高く現れてゐる。露多い秋の山道をゆつくりと登る事約一時間にして達磨石へ着、夜も全く明け山の端

には朝日が達し吾々のねむ氣も薄らいだ様だ。



三ツ峠山頂に於ける一行

これから漸く山らしく登りになる、道の兩側は松茸でも生えて居さうな松並木に秋草が繁つて居る。暫すると先へ行く者が富士が見へると振り返つて叫んで喜ぶ、こんな大きな富士の姿に接した事は全く珍しいためか、その内に桂川の谷には朝霧が雲の如く谷村の方へ流れて行く裾野の水田は黄金色に實つて見える。七時頃三ツ峠山一帯に朝日があたる時には山道に岩場も現はれ婦人連中には一寸困難に見えた。そこで羽織をぬぎ深切な人の背囊へ入れて貰ひ着物も腰にからげて進めば元氣もつき歩調も捗り大曲馬返し、縁結松などを難なく過ぎて八時には八

十八大師の石像の列ぶ所を越し道も急攀でなくなる。

これからは三ツ峠山の岩壁の下を左へ廻る道となり、右側には幾多の清水が谷間から湧出で、湯を醫するによく、草木も高山地帯のものとなる。紅葉も亦此邊から上は岩間に色づき、時には霧も谷間をうづめ小さいながら中々幽邃な山の趣がある。それより夫婦岩、権現社、屏風岩等を経て山上の茶店の見ゆる所へ達す。見上げる岩石は所謂第三紀層御坂山層の山骨巍峨たるもので岩登り連中にはその硬質が喜ばれるさうだ。此岩の終る所から近道を右にとり茶店の處へ登る。九時、四時樂園と記した店へ着す。一同大いに喜び一息いれて九時半頂上の眺望に向ふ。

三ツ峠山は展望がよい點で白眉と稱せられて居るから、快晴なればすばらしいパノラマが得られる筈なるが秋の日は雲足が早い。晴れたかと思へば曇り、曇つたかと思へば晴れる、男心か女心か知れないが實に變化が多い。そこに又秋の山の味があるのかも知れない。

先づ目標となる富士は黄金色の田畑のなだに大きな裾を引き山中湖は籠坂峠の下に鏡の如く映る、道志山塊から相摸野關東平野、奥多摩方面は雲が重くはつきりせず、東より稍北に廻れば瀧子山最も近く、大菩薩連嶺が蜿蜒として雁の腹摺山、黒岳

などはさすがに大きい。

北には奥秩父の破不、甲武信金峯の大山塊が高く見える、西に寄つて奇峰を現してゐるのが八ヶ岳である。西方は此三ツ峠山の最もよい眺望である。近くに御坂山脈の黒岳、節刀岳、十二ヶ岳等何れも黒い岩石を頂上に露出して河口湖、西湖に倒寫して居る、その遙か向ふには南アルプスの諸峰が雲表に高く聳え白峰三山から駒ヶ岳迄よく見える。

頂上は冷氣も強いので十分ばかりで下山、一時間半程休み十時半河口湖へ向つて出發す。中腹の茅場にはよい通路があり、秋草一面に咲き亂れて虫の聲も愛らしい、晩春から夏期は此草叢は通るべき處でない。秋より冬にかけては、のんびりとしたよい傾斜である。此だら／＼下りを四五十分下ると落葉松とエゾ松の多い林の中に母の白瀧河口へ近道と云ふ立札を見る、四五丁下の白瀧は雑木林を越えて大きな松の森の中に落ちて居る、この松林を通り正午過ぎに河口へ着いた。稍空腹を感じたが何も食べる物を賣つて居ない、こゝに卅分程遅れた高島老を待つ間に小松原君は舟と自動車に有利な交渉をしたものらしい。一時十分モーターボートは動き出す、後に聳ゆる黒岳

十二ヶ岳の奇岩は優美な裾を引く富士とよい對照である。前夜の睡眠不足は忽ち船へ入ると現れて夢となる、よだれを出してゐる間に船は船津着、それより自動車で吉田へ向ひ二時十分發大月驛へ三時着、五時三十分には再び雜沓の新宿へ歸る。

婦人子供連れ山の旅をかいた序に和服の婦人の登山する時の注意を附加へておきます。

雨 傘(日傘はだめ)

足 袋(履き代二三足)

毛メリヤス靴下或はメリヤス

キャハン、油紙

手拭二三本

防水コート

モスカセルの着物(山へ入つてからの着物として)

此經費一人當り四圓十八錢。

三峠の八十八大師

半 英 生

本クラブ第一回の旅行地であつた三峠の中腹にある俗に八十八大師と稱する地藏尊(實數は五十八體だ相だが)の縁起に就いては餘り世人に知られて居ない様だが、最近某女學校の校友會誌に一女性の書かれた『三峠に登る』と云ふ紀行文の中に次の様な興味ある記事があつたから茲に轉載する。

『時は物情騒然たる幕末、京洛の地も江戸も血なまぐさい風が吹きまいてゐる頃、河口湖畔吉田の宿に一人の虚無僧が現れた、若鮎をどる桂川のほとりに、さゝやかな庵を結んだ彼は湖畔の宿場を尺八を吹きながら、時折は谷村の町にも托鉢の姿を現した、武藏と山一重、平和な岳麓の村落では風の様には去來する虚無僧の存在に深い注意を拂ふものもなかつたが、彼こそは元治元年三月、水戸の藤田小四郎が長州の桂小五郎と氣脈を通じて筑波山に兵を擧げた天狗黨の殘黨長州浪人井上主馬、北辰一刀流の使ひ手、幕吏の目を逃れる爲にこの湖畔の宿場に現れたといふ、かつて殺陣血風をま

き起した彼は平和な岳麓と大自然のふところに抱かれてゐる中に人生観が一變した、尊王攘夷、佐幕、公武合體等々、志士浪士幕吏との血のにじむやうな人間争鬭史をもう迎へる氣になれなくなつたと同時に、彼は富士の自然に強い愛着を感じた、吉田の宿から風の様が消えた主馬の姿は間もなく富士の展望臺三峠の頂上。弘法大師の修驗場に現れた『一切無』を悟つた彼には大きな佛の慈悲があるばかりであつた、讀經三昧にひたつてゐる彼の姿を村人はよく見たと云ふ、劍を捨てた手には鑿があつた、無念無想の心境でコックと御坂石に地藏尊を刻んだ、折に下山して占易をしながら幾年か斯うした生活が続いた、刻まれた地藏尊は南向のお花畑の中に一つく並べられた、五十八體を刻んだ時主馬は飄然と托鉢の旅に出てしまつたと云ふのである』

と云ふ傳説があると書いてあるのですが、私は之れを事實であり度く思ふ、全く三峠に登つての秀麗な富士を眺めた時、何者も金も名譽も戀？も忘れ得ない者が有らうか、私は此意味に於て靜かなる山の旅、殊に三峠の登山を御奨めしたい、宜哉、最近云ひ傳へ語り傳へて登山する者陸續として絶へず、其狀恰も蟻の甘きに付く如し、これでは三峠ではなくて蜜峠か。

【十月之部】

家族連で芋掘に

期日 十月十二日

集合 午前九時 東京驛

發車 九時廿二分横須賀行

下車 保土谷驛九時五十四分

行程 驛から國道を約一軒半行つて松並木の續く舊道に入る權太坂を登つた處を境木と云ひ、武相の國境で有名な不動堂がある。此處から半軒で横濱市兒童遊園に着く、廣さ四萬坪、高低ある地形を巧に利用して設計された公園で二階建の兒童集會所、二千三百坪のトラック、廿五米のプールあり、清水を湛へた五百坪程の池もある。其周圍の高地は天然林を修飾して遊歩道を設け、廣場には各種の運動具を据付

東京驛

横須賀

權太坂

境木

圓海山
湘南電車
弘明寺

けてある。充分遊んでから芝生に腰を下して持參の辨當を開く。午後は近くの畑で芋掘をやる、味自慢の金時芋、背負ひきれぬ程御土産を持つて静な山道を歸る。途中九二米の三角點邊から遙に圓海山の峯の松並木が見える。約一秆半で湘南電車の弘明寺驛に出て四時頃解散。

徒歩距離全部で約六秆
用意 風呂敷、辨當及水筒。

家族連れで横濱西郊散策（紀行）

はなぶさ

八時半東京驛に行つて見れば高橋君と成島君が新調の會旗を立て待つて居られる、奥村君は好きな野球リーグ戦を割愛して御老母令妹等を伴はれて参加される、九時廿二分の電車で出發、品川から小松原君の御家族十餘名乗込まれたので總計四十二名、家族連れとて車中賑かに保土ヶ谷に下車、多數の御婦人を交へた事とて千紫萬

紅、他の會では見られぬ色彩に富んだ列を作つて國道を戸塚に向ふ。

二秆程で右の舊東海道に入る今は通行人も稀な淋しい坂道、枝振りの好い松並木が續き、遠く丹澤の山々が浮き出した様に見えて居る、ダラ／＼登りの權太坂を登つて境木と云ふ所に着く、此處は武藏と相摸の國境で元は立派な不動堂が有り、傍の樺の大木と共に風土記の挿畫に掲載されて居る程名高い所であつたが、今は參詣者も少いのか震災後未だに再建が出来ずに居る、此附近は神奈川縣下第一にオゾンの多い健康地で、昔から脚氣患者の療養に適するとて、數年前迄は二階建の宿屋が二三軒も營業して居つた程である。

御堂前の茶店で暫く休んでから出發、秋草茂る小徑を降り、國道を横切つて、目的の横濱市兒童遊園に着いたのは丁度十二時であつた。

萬國旗に飾られた中央の運動場では、オール程ヶ谷小學校聯合運動會が賑かに催され、元氣の好い第二の國民が飛び跳ねて居る、見物は後廻しにして先づ池を見下す傾斜の芝生に腰を下して携帶の辨當を開く、飽く迄澄んだ青空、紫外線に富んだ日光、生々した樹林は連日煤烟と塵芥に汚れた心身を清淨するに充分であつた。

此遊園設置の動機は、去る大正十一年、學制頒布五十年に際し、横濱市の小學校長

が審議の結果、其記念事業として、都市兒童の體育の缺陷と、自然物接觸の機會の不足とを救濟する目的を以て、一大記念遊園を設置する事を決議し、此地に約四萬坪の土地を買収したのだが有志者の醸金意の如く集まらず爲めに暫く草木の繁茂に委せ、一時は自然の儘に放任するの止むなき窮狀に陥つたが、偶昭和三年五月公園復興豫算費中より、工事費を得らるゝ事となり、同年九月工事に着手し爾來官民の努力により、漸く四年十月六日完成開園式を擧げたのである。

今其概要を述べれば、高低ある地形を巧に利用して設計された遊園で、中段に百五十坪二階



芋 掘 の 一 行

建の兒童集合所があり、其前面低地を地均して二千三百坪の運動場を設け、夫れに續いて長サ廿五米幅十五米のプール（脱衣所附屬）を設置し、其下流には清水を湛へた約五百坪の池を穿つてある、尙延長一里半に及ぶ散歩道を設け、所々に廣場や休憩所を設置して各種の運動具を据付けてある。

殊に本園の最も特色とする所は元檜、樺、栗等の繁茂せる雜木林であつたのを、巧に間伐整理して修飾を加へ、或は廣闊たる芝生を造り、或は櫻楓を補植したる等造園工事は施されてあるが、自然の野趣は遺憾なく保たれ人工の跡を見せぬ様努めた點である、園内に植付けられた一萬本の櫻樹は、現在遊んで居る兒童が他日成長して、横濱市の中堅として活動するの秋、本園に一異彩を放つ事であらう、後の方で聞いて居ると、コンナ會話が交換されて居る。

「全く善い公園だな、井の頭もいゝが、高低が無いから、變化が少くてネ！」

（ソレニ上水道が通つて居ますから、子供を連れて行くと目が離されませんですわ）

「ソコへ行くと此處は絶對安全だ、何の心配も無く子供を遊ばせて置いて、夫れを見ながら散歩も出来ればダンスでも……………」

(東京にも一ツ欲しいわネ)

「全くだ、横濱ばかりでは無い、大阪には今度佳の江公園と云ふ東洋一の大運動公園が出来たのだ」

(何ですか、ほかの方に追ひ越された様ですわネ！)

「イクラ威張つても、東京は駄目だな」

集まつて居る内にと記念撮影をする、百花爛漫たる光景にピントが合はず、乾板迄も浮れ出したか取枠の蓋がしまらず、成島技師大まごつきは滑稽だった。

食後辨當鼓や新聞紙等は一ヶ所に集めて片付ける、一時間程して復此處に集まつて頂きますと云へば、二時には間違ひ無く集合される、行儀の善い事、規律の正しい事、團體行動に訓練されて居らるゝは心地善かった。

遊園を出て豫て打合せて置いた程近い畑に行つて、愈々芋掘を始める、芋畑の周囲を取巻いた一行ビリ／＼の呼子を合圖に掘り初める「コンナ大きなの」マダ繫つて居るわ」と子供は勿論大供も夢中になつて掘る程に、採れるは／＼、芋は自慢の金時芋、土も柔かなれば小さな方でも樂に掘れる、掘れば際限は無いが持ち切れなからう

と、イ、加減に切り揚げ、荷造へして見るとトテモ重いが、好きなおサツの事だから自分で持つて行きませうと、元氣な御婦人の聲に力を得て、助け合ひながら静な尾根道を歸途に就く。

誰だつたか「今日は程ヶ谷を出てから何處を歩いて居るのかサツパリ見當が着かないが、一體此處は何處だ」と云ふ奇抜な御質問「コレデモ横濱市でシカモ中區です」と御答へすれば、市内で芋掘りは驚いた、コンナ面白い所が手近に有るとは氣付かなかつた、燈臺元暗とは此の事で洒落じや無いが此れがホントニ掘り出し物だと、一行至極御満足の御様子であつたのは、提案した拙者に取つては何より嬉しかった、之れから小池元老の御説の通り、益々不遇の山河を開發する様努力致しませう。

途中九一・九米突山王臺の三角點あたりから、右手遙に圓海山の峰の松並木が見え、左には横濱根岸の新装成つた競馬場が夕日を受けて鮮に見えたので、コレデ幾らか方角が解つた様だとお芋の重いのも忘れて見取れて話し合ふ内に、早や弘明寺に着く、豫定の通り丁度四時、今日の成功を祝して解散、湘南電鐵に乗り込めば、日のある中に吾が家に歸り着く事が出来た。此經費一人當り五十八錢。

東郷公園と子の權現

池袋武藏野鐵道驛

吾野驛

高麗川坂石町

子の權現

大鱗山天龍寺

名栗川

期日 十月十九日

集合 午前七時四十分。池袋武藏野鐵道驛。

發車 午前八時

下車 九時四十六分吾野驛

行程 車窓から高麗川の溪流を眺めつゝ吾野に着き、縣道を約一軒行けば、坂石町の東郷公園に着く、園内に東郷元帥と乃木大將の銅像が嚴然と建つて居る、此地の鳴下清八老が元帥の高風を慕つて獨立で建てたのである。公園の近くで街道と分れ、溪に沿ふて爪先登りの小路を行けば二軒程で人家も盡きて林の中に入り、急坂を登れば鳥居が見え程なく山門を通れば子の神社殿に着く、俗に子の權現と云ふが大鱗山天龍寺と稱し神佛混淆である。此權現に就いての興味ある御話は當日に譲るが靈顯あらたかなりと傳へらる。歸路は別の途を名栗川に向つて降れば四軒餘で御

名栗鑛泉飯能

馴染の名栗鑛泉へ出られる。此處から自動車で飯能へ。

歸路 飯能發午後五時廿三分、池袋着六時半解散。

天候 不論晴雨

地圖 廿萬分 東京 五萬分 秩父大宮

用意 辨當及水筒必ず携帯

東郷公園と子の權現

扁舟生

第三回の旅行は、僕がリーダーと配されて居る、東郷公園は初御目見得だが、子の山は會遊の地だ、併し其會遊たるや、それこそ權現様御入國時代だから記憶とても臚氣だ。孔子は五十にして天命を知ると言ひ、孟子は、頌白者、不_レ負_ニ戴於道路_一と言ふ、齡知命に及んだ此中老人を、リーダーとは、さりとは情れない事ながら、無理イダにも出來まいし、殊に相棒のリーダーは新進氣鋭の若手戸田君だし、更に斯界のオー

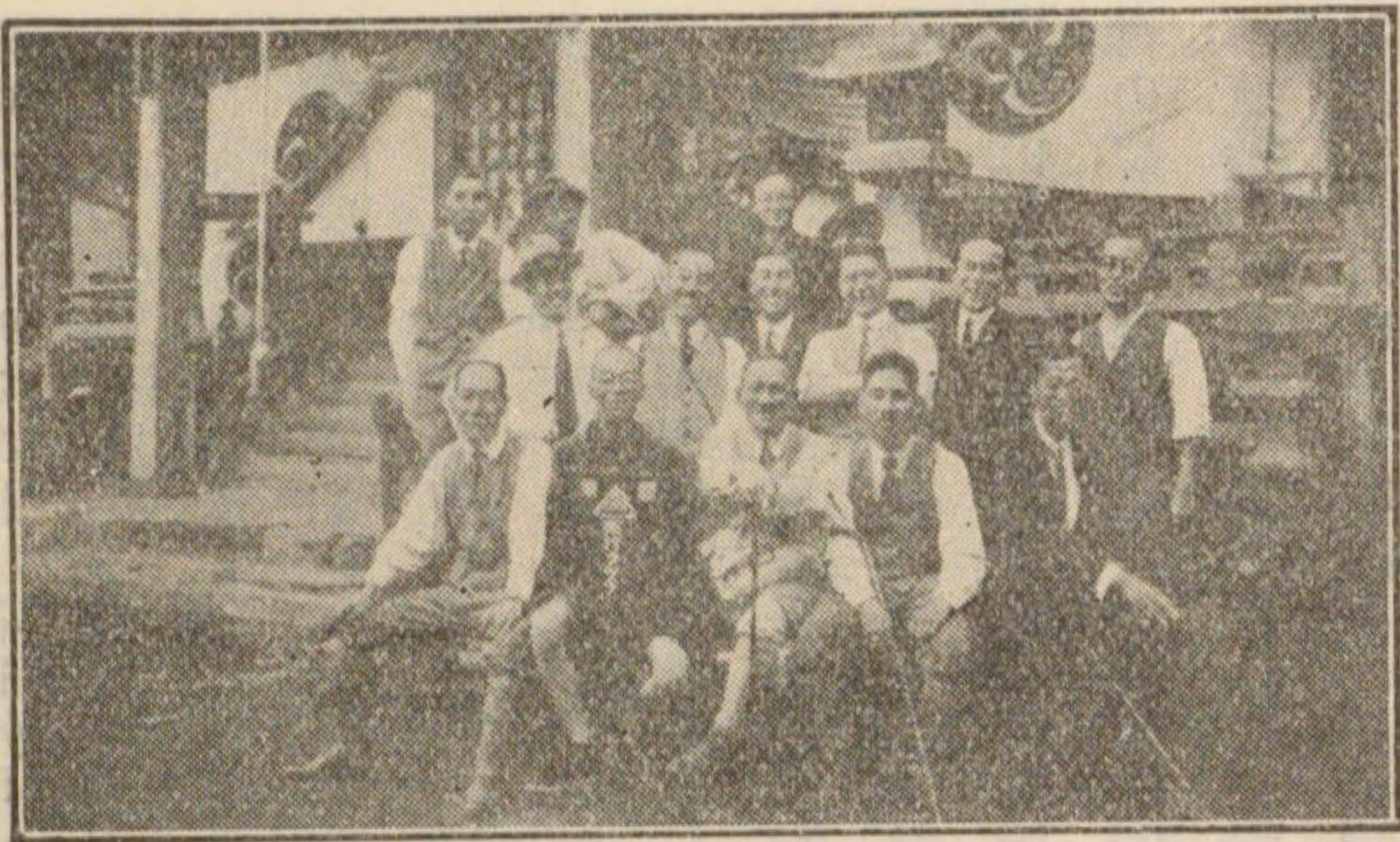
ソリチー小池君半田君もある事だし、何もオーソル事はあるまい、儘よ、何事も是も天命と、出掛けたり。

集合時刻の午前七時四十分を過ぐる事僅に二分なるに、一行の面々は、早や武蔵野鐵道驛に集まれり、今日は早慶野球戦の方へ行く人々多からんと豫期したるに、思の外の人數には、聊か驚きたり、車中の人となつて八時出發、飯能迄は御馴染なれば、窓外の景色を眺むるでも無く、談笑裡に一時間を過し、飯能驛に着きたり、此處にて、吾野行の電車に乗り換ふ、これから先は、始めてなれば、眼を車外に投じて行く、車は高麗川を幾度となく渡れば其流れ、右に左に移り、右顧左盼とはかくやらん、眞に應接に遑なし、木の間隠れに見えたる朱の鳥居は、何神を祀れる宮居のやらん、傍らの御神木とも覺しき樹の葉の少しく色づきたるに映じて、美しき言はん方なし、秋未だ淺ければなれど、色濃く染めたらばさぞなと思ふ間に打過ぎて、虎秀驛に着く、こしう、と讀むとぞ、とらひでにては、歌澤めきたり。更に車は進みて、終點吾野驛に着き、直ちに東郷公園にと向ふ、縣道を五六丁にて左折し、秩父御嶽神社を祀れる小高き山の中腹に、東郷元帥の銅像建てり、此地の人、鴨下清八老が、元帥を慕ふの

餘り、獨力にて建てたるものにて、臺座には財部海軍大臣の筆にて『嗚呼元帥』と記せ

り、少し下りたる、是も山の中腹を切り開きて、乃木大將の銅像建てり、之れは、東郷元帥の高風が、遂に此銅像を建つるに至れるなりと聞く、臺座には、宇垣陸軍大臣の筆にて『忠魂義魄』とあり。海軍が上に在りて、陸軍が下にあれば爾今此山を大阪ならぬ茶臼山と稱すべき歟とは、例のK君の口角より發せられたるエロ二百パーの巨彈なり、謹嚴なるアドミラルトーゴも、此の砲彈には苦笑を禁ずる能はざるべし。

道を更に左に入り、右に曲りて、子の山の本道を行く、何といふ名の溪流やらん、路に添ふて、或は離れ、或は近づき、いと大なる



起聲笑頭社現權

岩の苔むしたるあれば名も知らぬ赤き花の、水の流れに誘はれつゝ、根元の強ければか、波のうね／＼浮きつ沈みつ流れもあえぬしほらしさよ、かくて行けば一條の瀧あり、青葉の瀧といふとぞ、其上の方に一字の堂あり、不動尊を祀る、やがて溪流の聲も無くなり、人家も盡きて林の中に入り、急坂を登り鳥居を過ぎ山門に至る、比叡の直末にして大鱗山天龍寺といふ天台宗の御寺にて、即ち子の山権現なり、麓より三十二丁あり、一丁／＼に標石ありて、登るに便りよろし。

抑、子の権現の縁起を尋ぬるに、昔時紀伊國天野郷に阿字長者と云ふ賢女あり、一生貞寡なりしに、或る夜氣高き梵僧來り口中に入ると夢見て孕めるあり十二ヶ月にして、淳和天皇の天長九年子歳子月子日子刻に降誕し七歳にして比叡山に登り、天台座主圓仁大僧正に就き得度授戒し後出羽國羽黒山に入り、能除大師の教を受けたり、或夜の夢に、觀世音菩薩出現し般若經を授け、之を虚空に投げ其止る所を汝が衆生濟度の道場とせよと宣ふと見れば夢覺めて經卷は手に在り、乃ち靈夢に従ひて、かの經卷を投げければ、光明赫々として飛び、此峰に止る、其光明を追ふて吾野の里に來りけるに、此の山に住む鬼類其の威容に恐れ火を放ちたれば、野火遂に衣の袖に移り腰下

を傷けたれど、雲間より天龍出現して法雨を降らし猛火消滅せり、かくて此峯に登りたまふに果してかの經卷ありければ、之を石函に納め峯頭に藏す、現在の奥の院にて經ヶ峯といふは此の因なり、又天龍現はれたるによりて、天龍山と名付けたるなり、かくて三條天皇の長和元年壬子歳子月子日子刻即ち三月十日に昇天し給ふ、時に天龍再び出現し、聖人化縁盡きぬるを嘆き鱗を取りて投下せるにより大鱗山の稱あり、其の鱗今尙ほ寺寶として存すといふ、かく生死共に子なれば、子の聖といひ、大権現と崇められ、今に至る迄信者多く、講社の數多くありといふ。

聖人、火傷の難に遭ひ給ひしより『我に祈願せば、能く火災を除き尙腰部の病あるもの斷酒して祈願せば殊に其の驗を得しめん』と宣ひき、されば腰下の病あるものは、本復せば草鞋を献すべしと祈り、御禮参りには社前の茶店の店頭にあるブリキ製の草鞋を奉納す。健脚を願ふの士、宜しく立願すべきなり、アル中のよいのも亦願がけすべきなり。さるにても、出生届に時間を記入する今日ならいざ知らず、遠き一千年の昔、よく刻限迄記録し置きたる者なり。

時已に亭午なれば、ひるがれいひしたゝめんと、社前の茶亭に憩ひ、漫談に花を咲



遠山を背景に

かせつゝ喰ふ、U氏爐邊にありたりしが忽ち甘諸の焼けつゝあるを見出したたり、をし
 や只一本より無く徒らに涎を流すのみ。一時
 過、傍の小路を名栗に向つて下る。此道も亦
 一町毎に標石を立つ、十丁目にて道左右に
 別る。左の方は幅廣く、行かまほしけれど、
 是より先、途中にて聞きたる教を守り、狭き
 右側の山路に入る、此處よりは上りにて、遂
 に、豆口峠に達す、標高六二九米なり。道復
 二つに別る、標示杭あり、右、名栗道、左、
 天王山、又曰く、急がば廻れ天王山と、衆議
 紛々、遂に天王山行と決す、想起す、羽柴、
 明智が争ひたるも、かの山崎の天王山なり、
 由來天王山は大事の場所と見ゆるなり。途中
 道復二つに別る、今度は見事失敗して、崖に

添ふたる小徑の、少し上り加減なるに迷ひ入りたるも、流石はオーソリチーなり、此
 道にはあらざるべし、後とへの號令と共に引返し、約半町餘りを無駄足して一方の道
 に入る。されど、目的の天王山公園に出でず、とある山の裾の、併しながら、可成廣
 き山路を不安の心かられつゝ行く、やう／＼にして、公園入口に出でたれど、上る
 べきや、下るべきや、日さへかくるひたれば、方角を知るに由なし、オーソリチーの
 取り出したる地圖と磁針により天王山公園に上る。

此天王山と申し奉るは、八王寺と稱し、文徳天皇の天安元年六月の開創にて牛頭天
 王を安置し奉るなり、社頭の老杉、よく昔日を語る、山下より一町半にして頂上に至
 る、梵鐘あり、試に撞けば梵音嫋々、心耳を澄ますに足る。頂上より俯視すれば山下
 の小學校の運動會手にとる如く見ゆ、眺望絶佳、意外の收穫なり、麓まで十二町とあ
 れば下りにかゝる、然るに此道たるや眞に直下にして、しかも急カーブ幾曲り、羊の
 腸は見たる事なけれど、九十九折とは數へたりな、それにもましての曲りくねりたる
 急坂にて、一たび下り出せば、如何に膝頭にて速力を調節したればとて止むものにあ
 らず、唯轉ばん事を維恐るゝのみ、下る程に走る程に、走る程に下る程に、たゞ下り

に下り走りに走る、漸くにして山下の鳥居下に走り着く、仰げば天王山と題せる額を掲げ傍らの標石には、頂上まで十二町とあり下りにてすらかく悩めるに、登りは嘸かしと思はる、人家に入りて此處の名を問へば『この』と答ふ、地圖を按ずれば、小殿とあり、豫想よりも下流に出でたるなり、折から來かゝりし乗合自動車をキヤツチして名栗鑛泉まで行く、路は名栗川に添ひたる縣道らしき平坦幅廣き街道なり、來がけに、飯能驛にて頼み置きたる自動車の、迎ひに來るには、一時間餘りあれば、一浴を試むる事とし車を捨て、鑛泉に向ふ、忽ちヒナビあり（註に曰く、鄙に稀なる美人の謂なり）御手紙を下さいました、と半分言はせず、N君引取つて、ウンそうだくと、扱は敵に内通したな、前々から手紙の遣り取りをして居るな、など、攻撃の焼點となる、宿舎に入り、何より一浴と飛び込む、温泉水滑かにして凝脂を洗ふによし、窓を明くれば眼前の小巒、馬山に秋霧罩めて、楊太真が籠りたる驪山宮もかくやと覚え、私かに小驪山と命名しぬ、扱も此宮殿の汚き事よ、違ひ棚は埃にまみれ、柱は黒く、たゞ床に挿したる秋草のみぞ、新しく、華清宮の名に反かす。

御迎ひの自動車、四時十五分に來る、苦茗啜るもそこ／＼に再び車中の人となり、

名栗の溪流に沿ひて下り、五時飯能驛着混雑の中を腰掛くる事を得て、池袋より省線にて新宿に出で、驛外置去られの喜劇と幕あつて、半田君と夕餉を共にし、八時家路に就きぬ。此經費一人當り二圓七十錢。

紅葉の金峰へ

黒平より金峰を経て甲武信へ

藤 義 生

市制記念祭に賑はふ甲府の町を後に天神平長潭橋に着いたのが午後の九時半であつた。御岳の道は素敵によいが紅葉も激湍も闇の中、重いリウツクに喘ぎながら一時間の後には仙娥瀧に出る。猪狩の茶店の燈火は赤々と輝いて居るが、皆靜である川に望むだ亭にリウツクを放り出し長々と延びる、汗ばんだ身體も川風に寒くなつたが眠氣の方が勝ち相になる。

猪狩をはづれて坂を登り始めると上から灯が一つ下りてくる何が出てくるかと内心

怯えながら行くと、丸々と太つた老爺であつた。挨拶を交はすと猪狩の宿屋の主人らしく御岳の宿は學生で満員だから宿は下で取つた方がよいと商賣的深切に忠告してくれたが、此の夜中を黒平を経て少くも水晶峠あたりで朝を迎へ、折よく甲武信の小舎迄も長驅しやうと最も理想的な慾張り方を考へてるものであるから、只感謝の意をのべて上下に分れる。間もなく御岳の宿に入つたが寢静まつて音もなく灯もない。これから道は多少細くなつたがよくついて居る。山中の氣分が次第に濃やかとなる。ジグザグのブナ坂を登りつめると晝間なら眺望の如何にもよささうな峠に出る。ベンチが一つ置いてある。同じ様な形の猫坂を越えて、下黒平の木賊峠を経て増富に至ると書た石の示導標の處で一時、眠氣次第に募つてくるが何んのとばかりに奮ひ立つて上黒平の半程に來た時、遂に草叢の中に入つたをれる。十五分か二十分もすれば寒さに目が覺める事と思つて居ると、其れが一時間の三時二十分已に周囲は霜で眞白である。寒さに震へながらリウツクを擔ぎ、上黒平に着く頃漸く人心地する暖かさとなつた。

上黒平を過ぎて愈々山路にかかるが示導標はよく教へてくれる。鳥居峠を下つてカクレ澤を渡り精進川の右岸を溯行して一舉五百mの登りとなる。檜峠にとつたのが四時四十分、峠上の物見石に着く頃には夜のとほりもはらはれて炎るが如き紅葉に眠氣も一度に朝風に吹きはらはれる。芝栗は道に充満し爲に歩行頗る遅々となる。檜峠は一七一〇M三角點所在の最高の隆起と、同高の隆起を右に左に巻て行く約二キロに渉る長い峠である。雲一つなき晴れ渡つた朝のすが／＼しき時、紅葉の下を靴のかくれる程深い落葉をかきこぞ踏んで行く、第四隆起を左に巻く時、忽然として行手遙に鐵山より秩父山群の雄、金峯山のピラミットが現はれた。其尖端にある五丈石は碧空の中に金色に輝やき、頂上附近一帯は白き露岩によつて中腹は濃綠色の針葉樹林に包まれ麓は數段の紅葉の山の床になつてゐる。

北アルプスの岩と雪より成る豪壯なるに比すれば女性的ではあるが本邦に於ける中級山脈中の雄なるだけに壯觀たとへ様なく大に元氣を勵まされる。

七時乙女澤に下る、清冷なる小川に口を洗ぎ飯を清水と共に流し込む。刈合峠も程近く案外明るいミコノ澤を渡つて水晶峠の梅の薄暗き森林の中で八時半水苔の厚い床は乾燥して心地よいクツションとなつて居る。長々と足を延ばして木の葉の間より青空を眺める、何の音もしない、鳥の鳴く音も聽えない。餘り静かだ何か熊でも出て來

ないか等考へ相なものであるが其れには餘りに静寂である。

御室澤の涸澤を百M程登ると中天に巨岩がせり出して来る。此の下に御室の小舎がある、九時に小舎に着く。五丈石は近くなつて来た片手廻しの巨石は中腹懸崖に今にも落ち相に見える。

水は小舎の近くにある管が幾等探してもない、大に落膽したが儘よ水位と小舎の裏より登りかゝると其處に此より八間先に水ありと小さく書てある。御室澤の上流になる所で多量に湧出するが、直ぐ伏水となつて此下數町を涸澤としてゐる。

其時上の方より人聲が聞える間もなく土地の人らしき風采をした三人連が下りて来た。先水を呑んで元氣をつけて居る。鹽平附近の人々で昨日荒川の上流を登り梓山に下る峠に出て五丈石の下に夜營をやつたが、寒くて徹夜であつたと言ふが元氣なものだ。之から水晶峠より荒川に下り焼山峠を越えて鹽平に歸るのださうだが、水晶峠より荒川を渉る附近は初てらしく盛に質問をするので地圖面に就て細かく説明をして別れたが、荷物は何にも無く辨當の包が一つ、幾何でも飛で歩ける。大體日頃の身體の鍛へが違ふ、眞似をすると早速遭難ものだ、羨しいものである。

小舎の裏より登つた道は中天に聳えて居た。巨岩の下に出て花崗岩の一枚岩の鐵鎖にすがりついて登る途中左に巻くのを其儘岩の頂に登つて目の眩み相な切り立つた所に出て危く引返す片手廻しの險を過ぎる頃には木賊峠の彼方に前月會遊の地茅ヶ岳、金ヶ岳の紅葉に包まれたるがもれ上つてくる。天を摩す五丈石は次第に近づいて来た。緊縮時代の流行とは云ひながら夜中に一日分の行程を歩いた譯であるから直下八百Mの登りには地形の觀察とか食事の時間等と稱して大小五回を休み、普通二時間程の所を三時間を要して十二時半に五丈石に達したが、荷が重いとは云ひながらよくも漫歩したものである。

頂上の眺めは其日の快晴と相俟つて素敵なものであつた。

富士は靄の爲め完全ではなかつたが七合目以上に新雪を戴き均齊のとれた形は何時見ても優美なものである。白峰の三山も雪がある。赤石、荒川岳等も見える。甲斐駒は近く、岩石の殿堂其物の感がする。木曾駒は寶劔より木曾殿越に下り南駒に續く一連續、御嶽乗鞍より槍白馬に及ぶ北アルプスの大連達、近くには前月クラブコースとして登山した蓼科の豊圓な容より峨々たる八ヶ嶽に至る山々は細き谷迄も望むことが

出来た。又怪物然たる瑞牆山、膨大なる小川山は手近なるだけに儼然たる風貌が一入強く感じられる。

五丈石は高さ五十m幅三十五mと稱されるから相當大きなものである。鳳凰山の石佛と並び稱されるものであるが共に甲府盆地より望まれる鳳凰山の薬師佛は山の懐に入ると其の眞下迄行かなければ見えないが、五丈石は鳥居峠より檜峠より御室澤より又御室小舎からの登り八百mの登行裏にはたへず樹間より岩石の上より望む事が出来て殊に尾根筋の横を見るより正面を望み得て如何にも堂々たる感じが與へられる。

其の頂の凹所には水絶ゆる事なく旱天にも涸れざる由を傳へて居るが、其の見物は他日にゆづりて一時十分川上村梓山への下り道を左に見て頂上を出發した。頂上のゴトツを下る時慶應の學生七人、中には飯盒片手にぶらさげて來たのに出合す。是から先はえらいよと教へられて別れる。

鐵山は白檜唐檜の密林左信州側に卷て羊腸の如く曲りくねつて朝日山の登りとなる。地圖には右甲州側に頂上より百二十m下を卷て居る筈が幾何探しても無い。此時分には少しの登りも敬遠する程に顎が出て居るのでよく探したが、止なく朝日頂

上を越える、二時半朝日山二五八一mの獨高點に立つ。

道は尙屈曲を重ねて行く、倒木益々多くなる。荒川を登つて來て川端下に下る時が三時十五分、五十m位の隆起を一つ越えてだら／＼下り切ると新しい樹の切株の澤山にある明るい平に出る、之が今夕の夜營地大タルミである。時に四時五分。

樹影に流るゝ氷の様な清水を満喫する。一抱に餘る位の樹を切り倒す、焚火は盛に燃上る、うまい味噌汁が煮たち飯盒が／＼言ひ始める。空はよく晴れて星座の研究が始まる。先天幕がなくとも安全と落着く、焚火にあたりながら温い食事をすますと早速ねむくなる。夜半に火が消えては事であるから太いや長いのを充分に補ふ、長いのは切り倒した儘のを焚火の上に幹の眞中をのせる、燃え切つた時兩方からよせると云ふ横着な考へ、其れが終つたら寝袋にもぐつて何も知らなくなつた。夜半二三回燃切つた樹をよせたり補充したりして火焰を強くする。夕立が降つた夢を見て袋から顔を出すと二つ三つ露がたれただけであつた。

十八日、三時半に目が覺る、大變早起の様であるが六時に袋にもぐり込んだのであるから約十時間、東京に居るよりよく寝たわけである。氣温は焚火の風下の切株の上

に置た最高低寒暖計は氷點下二度を示す。

此大タルミは南に面し北は樹林に被はれ水に近く焚木は豊富に地表は草地乃至水苔の床厚く誠に申分なきキャンプ地である五時四十分出發、今日もよく晴れて居る、道は清水の流るゝ澤に沿ふて左に登つて行く、白檜唐檜エゾ松の深林をくゞり抜けて二五〇〇m前國師の肩に出ると富士南アルプス木曾駒等の藍色の勇姿が現はれる。金峯の五丈石は天に聳えてゐる。奥千丈の頭も目前である。其突端に大きな岩が抜き出て居る。岩窟のある所と思はれる。國師前岳七時少し下ると左國師三角點右小舎の示導標がある、此邊から國師奥千丈に至る高低の少い所を國師の大平乃至ミツナギ平と稱するものらしい。

國師の小舎は頗る粗末なものである、山梨縣營のものであるが今少し深切に造つたらどうかと思はれる。風通しは動物園の檻と變はらない。奥千丈の頭七時三十五分秩父連峰に於ける最高峯で大嶽山大權現の石碑が存在する所より、俗に大嶽山奥の院と呼ばれるが、天狗岩、大嶽山、奥の院と違ふものである。近く國師の三角點は銀色に光つて見える三寶山は幅廣い頭をもたげ、甲武信嶽は小さく拳の様に見える、破不山

木賊山は釜澤附近より立昇る怪氣な密雲に遮ぎられてゐる。此の怪雲は次第に擴がり後には三寶山迄被はれた。此時分破不山を越えて甲武信嶽を征した石井天文子は此の怪雲に視界を遮ぎられ、國師以西を窺ふ事を得ずして恨を吞んで眞の澤に下られたが天文子の所だけ妖氣が立昇る等何か六根清淨でない理があるのかも知れない。奥千丈の頭にある予は六根清淨であるのか四方遮ぎる物なく、雲海より胸を現はした富士より右に一廻轉して淺間山迄實に得がたき眺めである。此の眺めにキネマにカメラの活動も忙がしく出發する時を忘れる様である。此奥千丈の頭より國師に向ふ途中草地の平を下ると左右に分れる。右に取ると水の示導標がある。左に藪をくゞると尾根に出る國師の三角點は目の前に立つて居る。三角點の脇に示導板があるが文字は消えて何もわからない處へ東北面は密林、此の大きな頭の上で方向に面喰ふ。北に行く廣い道が岩屋林通、三角點の東の岩影に入る細い道が小さい岡を二つ越えて突端に出て左に曲つて甲武信に行く本通りであるが對照が激しいので大に迷ひ三十分程空費して八時五十分出發。

石楠嶽樺の頂稜を東に約十分で國師嶽頂稜の突端に出る。その少し手前から右に京

の澤大嶽山の登路が岐れてゐる。此の道は奥の院を祀る、岩峯を経て山稜を京の澤に降り、西澤を渡つて黒金山を越え三富村川浦の大嶽山那賀都神社に通ずる参道である。國師嶽の突端から北北東に向つた杖明け徑はよく踏み慣らされてゐた。この降りを経を十四五分で徑は分岐して居る。右は細く藪の中に入つて石堂尾根を傳はり西澤、東澤の合流點から廣瀬へ降つてゐる。北々東に進む本通りはよく手入がしてあり横木も最近やつたらしく新らしいものであつた。此の秩父山中廣い杖明きと横木の階段はアスファルトに舗装された銀座の通りより立派に感じられたが、見通しがつかない程一直線に降つて居るから登りに是を仰ぎ見た坂はうんざりする事であらう。降りながら隆起を三つ越える。左側信州側を卷く甲州側は東澤の急斜面頗る險惡な相を示して幾多の遭難者が此の澤に怨を残して居るのである。東俣の頭三角點東梓は高く尖つて見える。その先に一大嶺巖が突立て居るのが名に負ふ龍門の頭である。

三つ目の隆起は三つ重なつて是を降ると最低鞍部に出る。尙ほ一つ二十m位の隆起を越えると黄蓮の小舎の示導標がある。十時十分より二十分、多くの紀行に最低鞍部に黄蓮の小舎がある様に書てあるが、最低鞍部より隆起を一つ越えた東側にある。尙ほ白檜、唐檜、梅、嶽樺の密林の中を隆起を二つ越えてから約七八十mを登ると東俣の頭三角點東梓二二七二m十一時である。いよ／＼甲武信嶽が近く見えて來た。又二つの隆起を越える鞍部には梓川を登つて來た徑がある筈であつたが、それらしい踏跡は眼に付かなかつた。

梓川の溪は緩いが東澤は益々惡くなつて來た。急斜面を登り切つて石楠の叢林中を右に逸れると岩の一角に出る、十二時二十分、龍門の頭二二八〇mである。東澤に臨んだ高い仞崖をなし短少なコマツガ、イワツツジ石楠が蔓つてゐた。鶏冠山と石堂尾根に挟む東澤より釜澤の大森林を瞰下する。岩頭に佇めば脚下は身震るひされる程物凄く蒼黒い東澤、釜澤の谷に水流に沿ふて闊葉樹林は見事の紅葉を呈して曲りくねつて水線の所在を現はして落ち行くのを見ると大いして險惡な谷とも思へず、何日かあの中にキャンプを張つて見たい感じが浮ぶ。行手は甲武信嶽も木賊山も間近く甲武信嶽の釜澤側にある大きなガレもよく見える。

登りが續く富士見二二七九m迄三十五分案外つまらない所、石楠、白檜の藪の中に逕は東に曲つて迷ふ事はない。或る人は北に走る山稜を三角點天笠二二四九mに行く堂

またる切開があつて間違ひ易いと言はれたが少しもそれらしいものがなかつた。不見師への登りは四十分疲れも加はつて大分長かつた様に感じられた。一時半ミヅシ二三八〇m、甲武信嶽、木賊山は焦眉の先に三寶澤を中に三寶山は膨大な根を張つて、二四八三mの一等三角塔は白光つて見える。右の肩には五丈石より雄大であると稱される三寶岩も黒木立の中に示摘される。寫眞を撮つたり食事をしたりして四十五分程遊ぶ。大きな崩を右にして鞍部を下り一隆起を越えて甲武信嶽の登りとなる。釜澤へ南面した崩壊に沿ふて山頂に辿り着いた、午後二時四十分。甲武信三國境界標が小高く積まれて在る。その脇の示導板の上に名刺が一枚石を重しにのせてある、見ると自分の名が書いてある。

驚いて見ると石井天文子の名刺で、午前九時に破不山より此處に達した時釜澤より起つた密雲の爲め國師岳奥千丈方面の眺望を得ず、天候の變を恐れて、甲武信林道を眞の澤に下り栃本に出たのであるが、自分は其頃國師嶽に、子は甲武信嶽に、共に秩父山群の中心の兩峯上に立てたわけである、然し一葉の名刺でも此の山中に友人の便り實になつかしいものである。

甲武信嶽は、二四七二mの南北に細長に狭い山頂である、山頂は拳と稱される程小さく、みすぼらしいが、地形上では重要な頂稜で、即ち東京灣と駿河灣と日本海に注ぐ川の分水嶺となり、本州中部の兩斜面を支配する中軸となつて居るのである。

木賊、破不は東南に、三寶山は北に連り、その間の廣い尾根は針葉樹の密林に包まれてゐる。

東の方は金峯國師の秩父の大屋根は、驚く可き剛壯雄大な山容を誇り顔である。

北の山頂より北東に入る廣い伐り開きが甲武信林道で眞の澤に下るものである、狭い山頂を其の儘東南に峠地を下れば十五分で鞍部に着く、此處に秩父營林署のがつちりした小舎がある、水も釜澤に四五丁下ればある、小舎着三時、風通しの強い水場の悪い破不小舎を止めて此暖かい氣持のよい小舎に泊つて、明日は眞の澤の紅葉を見ながら栃本に出る事にして早く落付いた。

俳句

伊豆十國峠

蹄

花

秋の山晴雨の雲を交はしけり

島かけて雲の浪打つ野分かな

蚊帳裾に虫のきて鳴く野分かな

花蕎麥の波八丁や秋の風

花野戻り蜻蛉の宮に憩ひけり

和歌

沼津千本松原土肥より船原へ

奥田松太郎

朝の靄磯の小松をへだつれば

その幹も見ゆ赤き小鳥と。

笛聞ゆ何船ならん靄晴れて

下田通ひの船浮きにけり。

一時は命も死をも忘れ果て

富士の雪見る落日を見る。

磯のうへ白き椿に風吹きぬ